OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	E.H.エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する研究
Author(s)	谷村, 千絵
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/641
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

E.H.エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する研究

谷村千絵

E．H．エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する研究

大阪大学大学院人間科学研究科
教育人間学研究室
日本学術振興会特別研究員
谷村千絵

目次

はじめに 3

第一章　予備的考察—ライフサイクル論の基本構造 5

第一節　エリクソンの経歴とその研究手法について 5

第二節　発達段階論の基本構造—葛藤・危機・徳 8

第三節　エピジェネティック・チャートとその空白 11

第二章　研究の目的と方法 15

第一節　先行研究 15

第二節　空白解釈というアプローチ 19

第三節　器としての「ジェネレイティヴィティ」 23

第三章　三つの系—1950 年代、1960 年代 27

第一節　フロイト理論の継承・発展（1950 年代） 27

第二節　世代サイクルと社会進化の要としてのジェネレイティヴィティ（1960 年代） 36

第三節　儀式—世代サイクルをつなぐ媒体（1960 年代） 49

第四章　ジェネレイティヴィティ概念の展開と錯綜—*Gandhi's Truth* (1969) 61

第一節　儀式化概念の展開と創造的ジェネレイティヴィティ 61

第二節　ジェネレイティヴィティの錯綜—マハトマへの手紙 71

第五章　ジレンマとの取り組みと分裂——1970 年代と 1980 年代 80

第一節　「儀式化」のジレンマとの取り組み 80

第二節　ジェネレイティヴィティ概念の分裂 86

結論 98

引用文献ならびに参考文献一覧 102

巻末図表 106

図 1-1　Epigenetic Chart

図 1-2　エピジェネティック・チャート

図 1-3　1937 年のチャート

図 1-4　ジョアンの織物

図 2　フランツ／ホワイトによるエリクソンのエピジェネティック・チャートの応用

図 3　作業チャート

図 4　Ontogeny of Ritualization「儀式化の個体発生」

図 5　心理社会的発達の理論的概観図

謝辞 115

はじめに

ジェネレイティヴィティ（generativitiy）は、エリク・H・エリクソン（Erik H. Erikson 1902-1994）のライフサイクル論において「成人期」の調和的傾向を示すものとして、エリクソン自身によって造られた概念である。本研究は、この概念の形成過程を跡付けながら、その意味の変化を明らかにするものである。

エリクソンの理論は、とりわけ1960年代および1970年代にアメリカ合衆国のみならず日本においても注目され、その理論の学際的性格ゆえに、心理学、社会学、思想、臨床、哲学、人間学、倫理学、宗教学など多様な領域で受容されてきた。ライフサイクル論における「乳児期」の「基本的信頼感」や「青年期」の「アイデンティティ」などの諸概念はとくに広く受容され、精神医学や青年心理学などの諸領域における重要な概念となっている。また、彼のライフサイクル論は、現在でも生涯発達理論の代表的理論として紹介されることが多い。

教育学においては、エリクソンの理論は、とりわけ人間形成論の領域において森昭が『遺稿 人間形成論』（1977）のなかで生涯発達をとらえる理論として注目しているほか、森の研究を引き継ぎ発展させる形で、田中毎実（1996a, 1996b, 2003）が異世代関係の「相互性」と「大人の成熟」をとらえる生涯発達理論であるとして、考察を展開している。また、西平 直の『エリクソンの人間学』（1993）は、各学問領域において断片的に扱われることの多いエリクソンの理論全体を包括的に再構成するものであり、彼の理論を発達理論ではなく人間学としてとらえ直して人間形成論の基礎理論に位置づけるものである。

そうしたなかで、ジェネレイティヴィティについて、とくに近年、アメリカ合衆国と日本の心理学の分野においてこの概念に注目する研究が多く見られ（Kotre, J. 1996; MacAdams, D.P. & Aubin, E.S. 1998; やまだようこ 1999）、また宗教学においてもこの概念に関する言及がみられる（Browning, D. 1978; Emmons, R.A. 1999）。

ジェネレイティヴィティという語は、エリクソンの造語で、基本的には「生み出すこと」を表し、「次世代を生み育てること」といった意味で一般に理解されている。しかし、エリクソンのほぼ40年にわたる著作活動を通じ、ジェネレイティヴィティ概念はたびたびその意味内容が変化している。そのため、エリクソンのテキストにおいてこの概念を包括的、統合的に理解することにはかなりの努力が必要となり、したがって、今日の諸研究は、そ

れぞれ個別の関心からこの概念を発展的にとらえ活用するものがほとんどである。それに対し、エリクソン自身がジェネレイティヴィティ概念をどのように形成し、またどのように変容させていったのかということを明らかにする研究は、未だなされていない。

本研究では、エリクソンの理論形成過程を年代ごとに跡づけ、この概念の形成過程を再構成する。とりわけジェネレイティヴィティ概念の内容変化に即して、形成過程は次のように分けて考えることができる。まず、フロイトの心理性的理論の継承発展によって展開された発達段階論のなかでこの概念が形成される 1950 年代、そして、世代サイクルというパースペクティヴにこの概念が明瞭に位置づけられる 1960 年代、この概念内容が錯綜し始める 1969 年の中年期のサイコヒストリー研究 *Gandhi's Truth* 、この分裂が明瞭となり、ジェネレイティヴィティが性役割的にも分裂し、かつ、そうした連関のなかで世代間関係から切り離された自己生成という意味合いをも帯び始める 70 年代、80 年代である。

ジェネレイティヴィティ概念は厳密な定義から生まれたものではなく、また最終的にすべての意味内容を統合し包括するような定義もなされていない。しかし、別の見方をするならば、この概念の形成過程は、エリクソンが人間発達の理論構築において取り組んだ問題の複雑さと多様性を如実に示しているといえよう。そうした問題の複雑さと多様性は、エリクソンが自らの理論を構築・展開していった過程とこの概念の形成過程との関係を明らかにし、彼の理論全体との関連性のなかでこの概念の意味を解釈する作業を繰り返し行うことで明らかになる。

本研究は臨床的関心のもとに行われるものではなく、この概念の形成過程を明らかにする理論研究である。それゆえ、ジェネレイティヴィティ概念が現実の成人の発達をとらえるのに適しているか否かの判断を下したり、あるいは「正しい」ジェネレイティヴィティを同定することを目的としたりするものではない。あくまで、エリクソンの概念形成の過程を明らかにするということが、本研究の目的である。また、本研究では、ライフサイクル論の構造を端的に示すものとしてよく知られているエピジェネティック・チャートにも注目するが、とりわけ、エリクソン自身の言明によって裏づけながらチャートの空白箇所の解釈可能性を探究するというアプローチをとりたい。

第一章　予備的考察—ライフサイクル論の基本構造

第一節　エリクソンの経歴とその研究手法について

＜経歴＞

はじめに、エリクソン（Erik H. Erikson 1902-1994)の略歴を述べておこう。エリクソンは、デンマーク系ユダヤ人としてドイツで幼少期を過ごした後、大学を中退、青年期は芸術家を目指すべくヨーロッパを放浪し、25歳の時、ウィーンのある私立学校の教師になる。当時ウィーンではフロイト（Sigmund Freud 1856-1939）のもとに多くの人々が精神分析を学びに来ていた。彼らの多くは子どもを同伴していたが、その子ども達を集めたごく私的な学校に、エリクソンは赴任したのである。教師は、エリクソンと彼の友人の二人だけであった。自由主義に貫かれたこの小さな私立学校で、エリクソンは、当時としては珍しく子どもと遊べる大人の男性として評判になったという。子どもに対するセンスを認められたエリクソンは、モンテッソーリ教育の免状を取得したりもしたが、アンナ・フロイト（Anna Freud 1895-1982）から教育分析を受けて児童精神分析家となる準備をし、また当時、ダンスの研究に来ていたカナダ人学生のジョアン（Joan Mowat 1903-1997）と同棲、後に結婚した。

1933年にアメリカ合衆国にわたり、ボストンで児童精神分析家として子どもの臨床に携わったエリクソンは、その後、知人の誘いを受けてアメリカ原住民スー族（1939)、ユーロク族（1943)の子育てなどについて観察・研究を行い、1939年にはカリフォルニア大学バークレー校の児童福祉研究所に就任している。彼は1950年に初の著作 *Childhood and Society*（1950；邦訳『幼年期と社会』1956）を出版するとともにカリフォルニアを離れ、東海岸マサチューセッツ州にあるオースティン・リッグス・センターで臨床に携わる。この最初の著作 *Childhood and Society*（1950；邦訳『幼年期と社会』1956）に彼が提示した「人間の８つの段階」の理論は、その後「心理社会的(psycho-social)」という斬新な視座を提供した自我発達理論として注目されることになった。また、とくにこの理論において示された青年期の「アイデンティティ」概念は、その後、青年心理学などの領域における中核的なテーマとなった。さらに、1958年の著作 *Young Man Luther*（1958；邦訳『青年ルター』1974および2002）では、サイコヒストリーの方法による伝記研究として、青年期の自己確証の問題と歴史との関連性を描き出した。1959年には8つの段階をライフサイクル

として提唱する論文を含む論文集 *Identity and The Life Cycle*（1959；邦訳『自我同一性』1973）を出版し、1960年から1970年まではハーヴァード大学人間発達講座教授職に就いてライフサイクルに関するセミナーを開いている。この間に、*Childhood and Society* の改訂版（1963；邦訳『幼児期と社会』1973）、*Insight and Responsibility*（1964；邦訳『洞察と責任』1971）も出版され、エリクソンのライフサイクル論は発達心理学における生涯発達理論の代表的理論となった。また、60年代にはしばらくインドに滞在し、69年には、中年期を主題とするサイコヒストリー研究 *Gandhi's Truth*（1969；邦訳『ガンディーの真理』1973）を著している。晩年の70年代、80年代も精力的に執筆活動を行い、1994年マサチューセッツ州で亡くなった。

以上、概観したように、彼の人生はドイツからオーストリアへ、ヨーロッパからアメリカ合衆国へ、東海岸から西海岸へ、そしてまた東海岸へと移動を繰り返す人生であった。また、携わった仕事や著作においては精神分析学を基礎とする姿勢を一貫して保ちながらも、その内容は臨床から学問へ、フィールドワークから伝記研究へと多領域にまたがり、境界上を往来するものであったともいえよう。

＜研究手法＞

上記のように既存の学問領域の区分を超えて研究を進めていたエリクソンは、自らの研究手法をどのようにとらえていたのだろうか。

「1950年以降、発達心理学のなかに芸術家が居座ることになった」（『20世紀思想家事典』誠信書房、2001、p.11）。これは、アメリカ合衆国で宗教心理学においてエリクソン研究を展開しているドナルド・カップ（Donald Capps）の評である。この評が示すとおり、エリクソンは自らの見解を科学的に裏付けようとはせず、精神分析以外にアカデミックな手法を学ぶこともなかった。彼は自分に見えるものを描写し、解釈する姿勢を貫いたといわれている。エリクソンの方法論については、西平直（1993）によって詳細に検討され、すでにその基本特徴が明確にされている。西平によれば、エリクソンの手法は一貫して「臨床的」なものであるという。エリクソンは児童精神分析家であるから、そうした意味ではまず彼自身が臨床家なのであるが、エリクソンのテキストにおいて「臨床」という言葉は、広く「生きた一人の人間を相手にする場面を意味する」ものととらえられるのである。西平によれば、エリクソンの方法論的立場は、「参与観察」、「相対性＝関係性」、「ものの見方」などをキーワードに、次のように読み解くことができるという。すなわち、エリ

クソンは、「自らのものの見方が、一つのものの見方にすぎないことを自覚しながらものを見るというものの見方」に立ち、「事実はその事実を得るに至ったものの見方に依存する」ということに自覚的になりながら(相対的)、主体的に現実との関係を生き(関係的)、その関係そのものを記述している(参与的観察／観察的参与)、と(西平直 1993, p. 21-27)。

エリクソンは自らの著作について、それらは「ものの見方 (a way of looking at things)」を提示しているに過ぎないと自己限定している。西平が指摘するように、ここに彼の理論の特徴があるのだが、エリクソンは、さらにこうした態度を読者にも勧めている。たとえば、巻末図表の図 1-1、1-2 のエピジェネティック・チャートはエリクソンのライフサイクル論を説明する図としてよく取り上げられるものであるが、彼は、読者に対してもこのチャートを理解する際に彼と同様の立場に立つことを求めている。エリクソンは、「チャートは、それが理解の助けになると思う類の人たちにとってのみ役立つものである」(Erikson, E. H. 1963, p. 70) といい、読者にも相対的＝関係的な読みを要求している。それは、必ずしもエリクソンと同じ見解をもつということではない。この点についてエリクソン自身は次のように述べている。

> 『理解できる』ということは、私の言葉の用い方に対して読者が各自の知識や語彙を照合することができるという意味である(Erikson, E. H. 1963, p. 70)。

エリクソンは、自らの主張が理解されるということは、読者が各自の思考や語彙に照らし合わせてエリクソンの語彙を自分のものとできる、ということだと考えている。エピジェネティック・チャートは、そうした理解の手助けとしてのみ有益であり、そうでなければ無益であるとエリクソンは主張するのである。エリクソンは、エピジェネティック・チャートが決定論的なものとして誤解されやすいことも自覚しており、この危険性について「チャートはあくまで考えるための道具にすぎない」とし、「このようなチャートは、これを応用し、<かつ>自由に棄て去ることもできる人々が、真剣な注意を向ける場合にだけお薦めしたいと思う」と述べている (Erikson, E. H. 1963, p. 270)。

一つの解答を求めて論文を読もうとする大勢の読者には、非常にまわりくどく、また分かりにくい主張ではある。ドナルド・カップの評価が示すように、彼の方法的態度の特徴は学問領域に芸術の手法をそのまま持ち込んだものであるとみなすこともできるが、それを理論的に説明するなら、エリクソンの態度にも現れているように、自分のものの見方が相

対的なものであることを自覚しながら、対象を考察するということになるのである。こうした視座は、エリクソンにとっては患者と治療者との「関係性」に自ら参与しつつ、その「関係性」を考察の対象にすることによって「相対的な」真実を明るみに出す、という精神分析的手法に基礎をおくものであり、彼のオリジナルの、そして正当な手法だったのである(1)。

第二節　発達段階論の基本構造―葛藤・危機・徳

本研究で取り上げるジェネレイティヴィティ概念は、エリクソンの心理社会的発達段階論、後のライフサイクル論のなかに登場する。そこでここでは、ジェネレイティヴィティの位置づけを明確にするために、以下の詳論を部分的に先取りして、彼の発達段階論の基本特徴を概観しておくことにする。

＜葛藤＞

彼の発達段階論は、心理社会的発達理論としての基本特徴を有するものであり、人生諸段階を、そのつど独特のテーマをもつ関係性のダイナミズムと葛藤によって表すものである。

では、心理社会的発達とはそもそも何を意味するのだろうか。たとえば、多くの発達理論が、認識能力の向上、知識や技術の獲得といった具体的な概念を用いるのに対して、エリクソンの理論は、人間がある種の社会様式（モード）(2)を内面化してゆくプロセスを、

---

(1) エリクソンは、自分の師として誰を挙げるかという質問に対して、次のように答えている。「私はドイツで大きくなり、そこで詩人や芸術家に学びましたが、結局、それは一時的な師にすぎませんでした。私の場合、それは芸術的な才能を生かす道を探していたのだと思いますが、その後、フロイトは私が出会った中でもっとも創造的な人物となり、私は彼のサークルに迎え入れられたのです。ご存知のように、フロイトは私の養父と同じく医者であり、著述家でもありながら、また芸術に深い造詣のあった人物でした」(Erikson, E.H. 1981, p.260)。すでに指摘されてきたことであるが、精神分析はエリクソンにとって一つの芸術的活動の方法であったのだ。

(2)社会様式（モード)という言葉について。エリクソンのテキストでは社会の様式、様態、様相などを示す場合に mode、modality、style など様々な語が用いられている。本研究においては、統一して「社

メタレベルにおいて、つまり、その「ことの文脈」と意味においてとらえようとしている点に大きな特徴をもつといえよう。エリクソンは、乳幼児の発達段階においてこの理論の基本構造を構築した。たとえば、授乳や排泄のしつけは単なる栄養摂取や衛生の問題ではない。その様々な方法は文化や時代によって異なり、そして共同体や母親の育児態度は一つの社会様式（モード）として乳幼児に示される。乳幼児にとって授乳や排泄行為は、社会様式（モード）と自己の身体的・心理的反応との調整過程として体験されるというのである。こうした視座において、たとえば言葉の発達についても考えてみるなら、それは言語獲得という単なる知識レベルの向上ではない。生活者としての人間にとって、当該社会の言語モードを正確に使用できる能力は、自律的で自発的な社会参加の感覚として当人に自覚されるだろう。そして、それは同時に、その言語モードによって自己を形成していくことでもある。言語という一つの社会様式（モード）を内在化するということ、そのことが人間存在にとってもたらす心理社会的な意味をエリクソンは問うているのである。

エリクソンによれば、こうした心理社会的発達過程は、人生段階ごとに独特の「葛藤（conflict）」をもたらすとされる。彼は、その葛藤を「～対（vs.）～」という形式で表現している。たとえば「成人初期」の葛藤は、「親密性 対 孤独（intimacy vs. isolation）」として表現されている。この対立する２項目は、それぞれ「調和的（syntonic）」な項目と「失調的（distonic）」な項目と呼ばれているが、「親密性」や「孤独」といったこれらの項目には、それらが「無意識から前意識、意識のすべてにまたがる」感覚であるという理由から「～の感覚（a sense of～）」をつけて考えるよう指示がされている（Erikson, E. H. 1968a, p. 97）。

＜危機＞

このように、社会様式（モード）に意味づけされる側面と、心理的・身体機能的な必然性の側面との相互調整における感覚が心理社会的感覚である。そして、それは発達過程の進行にともない上述の葛藤、すなわち「対立すると同時に補完的関係にある」二つの感覚のせめぎあいによって「危機（crisis）」を迎えるという。「危機」は本来医学の領域で使

会様式（モード）」という表記をとった。無論、各々の語を文脈によって訳し分け、エリクソンのとらえていたものをより明確化して考察することも場合によっては必要であろうが、ジェネレイティヴィティ概念の形成過程を明らかにすることが本研究の目的であるから、この語に関しては包括的な意味で「社会様式（モード）」ととらえて考察を進めていくことにする。

われた言葉で、「病気が峠を越える」というときの「峠」、良くなるか悪くなるかの決定的な分岐点や臨界点のことをいう。しかし、エリクソンにおいてこの「危機」は、２つの対立感覚のどちらに傾くかという意味での峠ではなく、それらの感覚が矛盾し緊張関係にあるということ自体を受容するかしないかという分岐点と理解するべきである。というのは、エリクソンは「危機」の解決を、調和的感覚と失調的感覚のバランスとして見ているからである（Erikson, E.H. & Erikson, J.M. 1997, p.55）。どちらかがどちらかを凌駕してしまうこと、ダイナミズムが消えてしまうことは、「危機」の解決ではない。そうした場合、葛藤は解決されないまま、無意識に追いやられ、何らかの形で障害を引き起こす深刻な状態をもたらすこともあれば、防衛を形成してなんとか安定を保つことも考えられるという(Erikson, E.H. 1963, pp.403-424)。

＜徳＞

エリクソンは、葛藤や危機を受容し、解決すること、すなわち、心理社会的ダイナミズムのなかで内的にも外的にも世界を広げることに、「徳（virtue)」の本質を見ていた。そして、それを獲得することがエリクソンのとらえた人間の「成長」であった。

さて、virtueという語は一般的に「美徳」という意味で使われるが、エリクソンはこの用語を次のように説明している。

> 私がこの語を使うのは、それがかつて、あるものの生来の強さや活性的な資質を意味していたからである。たとえば、薬やお酒の気が抜けたとき、「virtue がない」という言い方がされていた。その意味で<vital virtue>という言葉は、人生の連続する段階のなかで、人間に活力を与えるような資質を意味するものとして用いられてよいだろう（Erikson, E.H. 1968a, pp.232-231）。

このように、エリクソンにとって「徳（virtue）」とは、人間の発達段階における暫定的到達点を意味すると同時に、人間を生きさせる活力のことを指す。一般的にvirtueという語は、規範となるような「美徳」、「徳」という意味が強く、したがって、この語によってはエリクソンのいうような意味が伝わりにくい。また、もともと男性的な強さを表す語であるため（Erikson, E.H. 1980b, p.271）、エリクソンはある時期からこの語の使用をやめ、strengthという一般的な用語を代用している。

なお、西平 直 (1985)は virtue という用語の訳について、日本語の「徳」という語が古代において「いきほい」と読まれ、「威·勢」という意味が強いこと、また漢語の「徳」の原字が「悳」であり、「本性のままのすなおな心」を表しているという点を指摘し、「徳」が訳としてその本来の意味でもっともふさわしいとしている。しかし、西平は、今日ではそのような意味で「徳」がとらえられることは少ないということから、自らは virtue と表記することを通している。また、日本の心理学の領域で積極的にエリクソンを紹介してきた鑪幹八郎は、*Insight and Responsibility*(1964 ; 邦訳『洞察と責任』1971)の翻訳にあたって virtue を「人格的活力」と訳している。エリクソン自身は後に日本語の" Jinkaku teki Katsu ryoku" こそ、virtue でいい表したいことであったと、鑪の訳語を引用してもいる (Erikson, E.H. 1980b, p.271) 。

ここで、一例として「遊戯期」の「自主性 対 罪悪感」の葛藤と「目的性」という「徳」について考えてみよう。これは、自ら行動するという能動的で調和的な感覚と、それに不可避な失敗や挫折に伴う自責、罪悪感という悲劇的で失調的な感覚を示している。この葛藤の緊張関係が当事者の世界を未来に向けて開いていく力をもつとき、エリクソンはそこに「目的性」という「徳」の誕生を見るのである。「目的性」をもつことによって「自主性」が勝利し「罪悪感」を捨て去ることができる、ということではない。「目的性」とは、「自主性」と「罪悪感」とのバランスのなかで目的が吟味されていくということ、「自主性」にのみ突き動かされるのではなく、また「罪悪感」にのみうち沈むのでもなく、目的の重要性を吟味しながら状況を切り開いていく強さを意味するのである。

第三節　エピジェネティック・チャートとその空白

＜エピジェネシス＞

エリクソンは、人間の各発達段階を、それぞれ、以下のような特定の葛藤と「徳」によって特徴づけている。

「乳児期」　　:「基本的信頼　対　基本的不信　　希望」
「幼児期初期」:「自律性　対　恥・疑惑　　意志」
「遊戯期」　　:「自主性　対　罪悪感　　目的」

「児童期」　：「勤勉性　対　劣等感　　適格」
「青年期」　：「アイデンティティ　対　アイデンティティ拡散　誠実」
「成人初期」　：「親密性　対　孤独　　愛」
「成人期」　：「ジェネレイティヴィティ　対　停滞　ケア」
「老年期」　：「統合　対　絶望･嫌悪　　統合」

それぞれの葛藤と「徳」は、各人生段階において生起するものすべてを表すものではなく、また、その段階にのみ限定されているのでもない。この発達段階を図式化したもの、すなわちエピジェネティック・チャートにもそのことは示されている（図 1-1, 1-2）。

この「エピジェネティック(epigenetic)」、もしくはエピジェネシス（epigenesis）」という語は、本来は胎生学の用語で、一つの卵が分割を繰り返して、常に全体としてのまとまりをもちながら、体の各部をそれぞれに発達させていく過程を表すものである。エリクソンは、この語を彼が構想する心理社会的発達理論の原理として用いている。これについてエリクソンは、次のように説明している。

> エピジェネティック原理とは･･･（中略）･･･どの部分にも優勢になる特別な時期があり、それはいずれ、機能的な複合統一体（functioning whole）の形になるまでつづくという考えを示す（Erikson, E.H. 1968, p.92）。

つまり、この原理は、それぞれ独立したもののように見える各人生段階の諸特性を、その前後の人生段階にまたがる発達の流れにおいて「一つのまとまり」として、またそれ以外の人生段階に優勢となる諸特性との関係においても「一つのまとまり」としてみて、そのまとまりのなかの意味連関において個々の特性をとらえることを促すものの見方である。エリクソンは後にエピジェネティック原理を「意味関連性(contextuality)」の原理とも呼んでいる（Erikson, E.H. 1980b, p.215)。たとえば、エリクソンは、晩年にジェネレイティヴィティ概念を中心的に扱うようになったとき、学生からこの概念についての説明を求められた場面で、「アイデンティティ」や「親密性」の段階と切り離して考えるべきではないということを強調している（Erikson, E.H. 1981, pp.51-52）。また、「基本的信頼感」（乳児期）、「自律性」（幼児期初期）、「アイデンティティ」（青年期）などは相互に関連しあうものであるし、それぞれの段階で達成される「希望」、「目的性」、「誠実」

なども、一つの人格に見られる全体的な「徳」の具体的な表現としてとらえることができる。「アイデンティティ」といった項目や「誠実」の「徳」は、たしかに青年期にその発達が最も著しいとしても、先行する人生段階においてすでに徐々に準備され、また、その後の人生段階においても徐々に変化しながら影響を及ぼし続けるということである。

こうした彼の主張は、さらに次のように解釈することもできよう。すなわち、ある人生段階の新たな葛藤との取り組みによってもたらされる「徳」は、その人生段階に先行する諸段階において達成された「徳」との間に統一的な意味連関を形成しているのであり、先行する人生段階の「徳」に単に加算されたものではないということである。その意味では、先行する人生段階において形成された「徳」も、完全な安定性を備えているものではなく、やがて新たな人生段階における意味連関のなかで再構成される可能性を孕んでいるのである。

実際、エリクソン自身、ある人生段階と次に続く人生段階との関連について次のように述べている。

> どの段階で獲得された強さも、それを超えでる必要性によって、試練にさらされる。個人はその段階でもっとも傷つきやすく貴重だったものを賭けて、次の段階で冒険するのである（Erikson, E. H. 1963, p. 263）。

たとえば、「青年期」において「アイデンティティ　対　アイデンティティ拡散」の危機から生じる「誠実(fidelity)」の「徳」について見てみるならば、自分に対しても他者に対しても誠実であることは、「成人初期」において改めて具体的な他者、とりわけ異性パートナーとの関係というアクチュアルな次元で試されることになる(3)。そして、それは「成人初期」の「親密性 対 孤独」の葛藤と危機を乗り越えて「愛」という「徳」を形成する基盤になるのである。

＜空白＞

以上を考慮すれば、エピジェネティック・チャートにおいて発達過程を示す対角線の上下

---

(3)「アイデンティティがもっともその力を証明するのは、それを試す場が与えられたときであることは、とくに強調しておきたい。それゆえに愛は、その真の意味において、アイデンティティと誠実の二つを前提とするのである」（Erikson, E.H. 1964, p.128）。

に広がる空白にも意味があることが分かる。すなわち、ある人生段階の下部の空白は、先行する人生段階において克服された葛藤やそれによって獲得された「徳」の重層化を表現するものであり、上部の空白は、克服された葛藤と達成された「徳」がその後に続く人生段階において常に新たな意味連関において問い直され、再構成、再統合される可能性を予示するものだと考えることができるだろう。

こうした見方はエピジェネティック・チャートを縦方向で解釈したものであるが、このチャートを同様の構造連関において、横軸に沿って解釈することもできる。すなわち、各人生段階の左に連なる空白箇所は、その人生段階において、先行する人生段階において達成された「徳」がその人生段階に即したかたちで新たな意味を与えられて再構成され、暫定的なバランスを保っていることを示す。さらにその人生段階の右側に連なる空白は、その後の人生段階における課題が先取りされ、その人生段階にとって可能なレベルで統合的なバランスを保っていることを示す、と。

このように、エピジェネティック・チャートは、心理社会的な葛藤が前後の関連性をもちながら移り変わり、なおかつ、そのつどの人生段階において全体としての暫定的なバランスを保っているという特徴を示すものとして読むことができる。この点で、ピジェネティック・チャートの枠組みは、心理社会的項目や「徳」の意味関連性をとらえる座標軸の機能をもっていると述べることができよう。

第二章　研究の目的と方法

第一節　先行研究

さて、ライフサイクル論のなかで、本研究の主題であるジェネレイティヴィティは「成人期」の「調和的傾向」を表すものである。「成人期」は「ジェネレイティヴィティ 対 停滞(generativity vs. stagnation)」という葛藤によって特徴づけられ、そこから生じる「徳」は「ケア」とされている。ジェネレイティヴィティがどのような意味をもち、またその内実はいかなるものと考えられているか、という詳細な議論に入る前に、まずはこの概念に関する先行研究について紹介しておくことにしよう。

本研究の主題であるジェネレイティヴィティに関して、これまでになされてきた研究の多くは、ジェネレイティヴィティを「成人期」の発達の主要素である「親であること」を含め「広い意味での次世代への関心をもつこと」として定義している(MacAdams, D. P. & Aubin, Ed de St. 1998 など)。そのうえで、たとえば象徴的不死性への概念的発展を方向付けるもの (Wakefield, J.C. 2004)、エリクソン自身のライフサイクルとの照合から親子関係の葛藤の考察を試みるもの (やまだようこ 2002)、倫理学、宗教学の観点から「規範的人間像」を示す概念として概念に注目するもの (Browning, D. 1973, 2004)、発達における異世代関係の「相互性」に関連する概念として言及するもの (田中毎実 1996a, b) など、かなり多岐にわたる研究が展開されている。

しかし、ジェネレイティヴィティが、「基本的信頼感」に基づいて次世代との間に築かれる信頼ある出会いを前提とするものとして示され、あるいは「成人初期」に達成される「親密性」のさらなる展開として次世代のために「自分を失う能力」としても定義されるという点まで踏み込んで言及するものは少ない。このような、他の諸項目との意味関連性が不問にされていることが、ジェネレイティヴィティ概念が指し示す事態の複雑さやエリクソン理論のポリフォニック (多声的) な側面が見落とされる一因となっている。

＜エリクソン理論は発達決定論か＞

たとえば、アメリカ合衆国におけるいわゆる物語心理学のなかでジェネレイティヴィティ概念を先駆け的に取り挙げた研究者、ジョン・コトレー (John Kotre) による聞き取り調査研究 *Outliving the Self* (1984)に注目してみよう。コトレーは、8 人の成人男女からジ

ェネレイティヴィティに関するライフヒストリーの聞き取り調査を行い、その結論の一つとして、ジェネレイティヴィティが「アイデンティティ」と「親密性」の葛藤の解決によってもたらされるというエリクソンの考えは誤りであるとして批判している。コトレーによれば、エリクソンの見解は多分に発達決定論的であり、「親密性」(「成人初期」)や「アイデンティティ」(「青年期」)の葛藤が望ましい形で解決していなくても、実際には「個人と社会との偶発的で幸福な相互作用によって」ジェネレイティヴィティがもたらされる事例が少なからずあると指摘している。こうした理由から、彼はジェネレイティヴィティを「段階」ではなく、むしろ前後の発達段階とは直接的には関係のない「瞬間」として発展的にとらえることを提唱するのである。

たしかに、「親密性」や「アイデンティティ」の葛藤に対する望ましい形での解決を、「青年期」や「成人初期」における発達課題の適応的解決としてとらえるならば、コトレーの聞き取り調査の結果は、確固たる「アイデンティティ」の模索も中途半端なまま、幸福とはいえないような恋愛や結婚にも巻き込まれるなど、必ずしもうまくいっているとはいえない事例に満ちており、発達課題を「望ましい形」でクリアーできたという事例はむしろ稀であるといってもよい。しかし、社会との信頼ある出会いに対して開かれるという点から考えると、コトレーの調査結果のなかにも、そうしたことに関する記述は見られるのである。たとえば、息子との関係に関して深刻な葛藤を抱えたシングル・マザーが、彼女が互いの生き方を承認しあえるような仲間集団に所属したことと、彼女と息子との関係の改善が同時進行した、という事例のように。それは現実の事象としては、たしかにコトレーのいうように「個人と社会との偶発的で幸福な相互作用」の「瞬間」に起こることであろう。しかしながら、ジェネレイティヴィティにおける「親密性」が社会との信頼ある出会いにあると見るならば、その「瞬間」は、発達決定論としてではなく、「基本的信頼感」や「親密性」や「アイデンティティ」といった心理社会的諸項目との「意味関連性」において読み解くことができるのである。コトレーが挙げている「個人と社会との偶発的で幸福な相互作用」というものも、見方によっては、「乳児期」に達成される「基本的信頼感」を前提とするものとして解釈することもできるのではないだろうか。

このように、ジェネレイティヴィティを「成人期」にのみ発達する、あるいは発達「すべき」傾向と見なすのではなく、他の人生段階との関連のなかにあるものと考えるならば、コトレーのようにエリクソンの理論を発達決定論と見なすことはできなくなるはずである。本研究では、エリクソン自身が特定の人生段階、とりわけ「成人期」と、その他の人生段

階の関連について述べた箇所に着目しながら、通俗的に発達決定論として誤解されがちなエリクソン理論の特徴をより正確に読み解き、そのことを通じてジェネレイティヴィティ概念がもつ多様な側面を明らかにしたい。

＜ジェネレイティヴィティと死＞

エリクソンはジェネレイティヴィティに関して、複数回にわたって次のような言明を述べている。

> ジェネレイティヴィティの段階は、停滞感という脅威的な感覚が食い止められていれば、死を無視することが最高度に許されているという特徴をもつように思われる。（中略）青年期と老年期は、再生を夢見る時期であるが、成人期は生み出された現実のものに忙殺され、しかもその見返りに、強靭で不変な歴史的リアリティという独自の感覚を与えられている。この感覚は非存在（non-being）の影を拒絶しているので、若者や老人にはむしろ非現実的に思われる感覚だろう（Erikson, E.H. & Erikson, J.M. 1997, p.80）。

ジェネレイティヴィティは、「死」や「非存在」、すなわち自分がかつては存在せず、またいずれ消滅するという現実を、人間に忘れさせる特徴をもつという。多くのジェネレイティヴィティ研究は、エリクソンのこうした指摘には目を向けていないようである。たとえば、先にあげたコトレーによる聞き取り調査研究 *Outliving the Self*（1984）のタイトル（生き残る自己）にも表れているように、アメリカにおいても日本においても、自己の死の認識・受容とジェネレイティヴィティとを結びつけ、人間の象徴的不死性を意味するものととらえたり、世代サイクルという大きな流れに自己を位置づける感覚としてとらえたりする研究がかなり蓄積されている。このような解釈は、日本の内閣府のホームページに、高齢化社会対策の有識者会議の議事録において、「老年期の生きがい」を示すものとしてエリクソンの「ジェネラティヴィティ」概念を挙げる調査報告が挙げられていることにも表れているといえよう(4)。また、アメリカにおける近年のジェネレイティヴィティ

---

(4)この議事録には、以下のように述べられている。「青年期の＜アイデンティティの危機＞で有名な心理学者エリクソンは、中高年期になると＜ジェネラティヴィティ（generativity）＞の危機に陥ると述べ

ィと成人発達に関する心理学的研究を総括しているマクアダムス／オービン（MacAdams, D. P. & Aubin, Ed de St.）による論文集 *Generativity and Adult Development*（1998）でも、ジェネレイティヴィティを死と結びつけて解釈している。彼らはこの著作の序文においてエリクソンが「私とは、私の死後、残るもののことである」（Erikson, E.H. 1968, p.141）と述べた一文を示し、それとジェネレイティヴィティとを関連づけている。しかしながら、エリクソンのテキストを厳密に見てみると、この言明は「老年期」の感覚として挙げられているものである。そして、ジェネレイティヴィティの段階である「成人期」には、それと対応する一文として、「我々とは、我々が愛するもののことである」と述べられているのである。

この「私とは、～である」という定式化された文は、1968年に出版された *Identity: Youth and Crisis*（1968a；邦訳『アイデンティティ―青年と危機』1973）という論文集のなかのLife Cycle：Epigenesis of Identity と題する論文のなかにある。[アイデンティティのエピジェネシス]という副題のついたこの論文において、エリクソンはライフサイクルの各段階で「私（I）」の感覚がどのように違ってくるのかということを考察するために、それぞれの段階において「私とは、～である」という定型文を考えている。たとえば乳児期では「私とは、私がもっている希望のことであり、私が与えられる希望のことである」、遊戯期では「私とは、創造可能な将来の私のことである」、と。そして、「成人初期」と「成人期」については、この時期において「私（I）」は「我々(we)」に変えられる必要があるとした上で、「我々とは、我々が愛するもののことである」とされているのである。エリクソンが、「私とは、私の死後、残るもののことである」という一文を挿入しているのは「老年期」で、「ものごとや人々の世話をやいてきた老人、人の親であり、事物や観念を生み出してきた者としての喜びや悲しみに適応してきた老人」の感じる「私（I）」に

ている。世代を育み、つくり上げてきた過去からの伝統、文化をうまく次世代に引き継いでいけないと人生の停滞感、無力感に陥る。それを可能にする力が＜ケア（care）＞の力であり、世代交流の中でケアの力を発揮することで最終的には＜英知の統合に至る＞というのがエリクソンの話である。そういうイメージの仕組みをうまくサポートしていくことがポジティブ・エイジングになると考える。」この説明は、エリクソンの理論について要領よくポイントを整理しているように見えるが、しかしこれは、老後の生きがいのため、という目的からジェネレイティヴィティをとらえる発想である。たしかに、そうした発想は臨床の場面では有意義であるかもしれない。しかしながら、概念の検討を目的とする本研究では、そうした目的的態度とエリクソンが概念化したジェネレイティヴィティとの差異を明らかにしていくことになるだろう。

ついての箇所である。これは、正確には「老年期」におけるジェネレイティヴィティの感覚を示しているといえるだろう。

たしかに、次世代を生み出し、教え育てることに関連するジェネレイティヴィティは、自己という個体の死とまったく無関係なものではない。コトレー(1984)やマクアダムス／オービン (1998)に代表されるような物語心理学は、自己の死を超えて残るもの、という視点に限定してジェネレイティヴィティ概念を発展的にとらえているといえよう。

しかし、その一方で、エリクソンが「死を忘れなければならない」(Erikson, E.H. 1969, p. 399) と形容した段階、「我々とは我々が愛するもののことである」と考察したジェネレイティヴィティの段階そのものについて、充分な考察がなされているとはいえない。それに対して本研究は、エリクソンのテキストにより忠実に、自らの死を忘れて現実の世界を維持し、次世代を教え育てることという意味を含めて、ジェネレイティヴィティ概念の特徴を明らかにしたい。

なお、本研究は、基本的に臨床的関心によって導かれたものではない。したがって、たとえは「現実」との関係においジェネレイティヴィティ概念の「正しい」内容、あるいは「適切な」内容を確定するという必要からは解放されている。本研究は、むしろ、すでに述べたように、エリクソンの理論の発展に即して、ジェネレイティヴィティにどのような意味内容が付加されていくのか、そしてその結果としてこの概念のポリフォニックな内容が形作られていったのかを解釈するものである。ここで紹介したコトレーやマクアダムス／オービンらによる先行研究におけるジェネレイティヴィティ概念と、以下で明らかにするこの概念の内容との差異は、こうした立場の違いに由来するものでもある。

第二節　空白解釈というアプローチ

＜様々なチャート＞

すでに先の章で、予備的考察として、エピジェネティック・チャートの空白を読む可能性を指摘した。この点について、本研究のアプローチの方法として、さらに詳しく説明しよう。

一般にはあまり知られていないが、エリクソンは、1930年代にすでにエピジェネティテ

ィック・チャートの原型ともとれるような図を作成していた（図 1-3）。この図は、エリクソンが 1937 年に子どもの遊びの研究において、乳幼児期の心理生物的発達変化を表現したものである。デザイン画のような外観のこの図のなかに描かれた一つ一つの不思議な模様は、もちろんそれぞれに意味をもっている。エリクソンによれば、垂直軸は身体の部分を示し（Ⅰ、Ⅱが口唇、Ⅲ、Ⅳが肛門、Ⅴ、Ⅵが生殖器）、水平軸は衝動（1．吸入、2．咀嚼、3．保持、4．放出、5．保持と変化、6．放出と変化、7．侵入、8．侵入と変化）を示すという（Erikson, E.H. 1937 [in 1987, pp.106-114]）(5)。この図を水平方向に見た場合、身体の各部分に異なる衝動が生じることが示されており、垂直方向に見た場合は同じ衝動が身体の異なる部分に生じることが示されている。より具体的に見てみよう。Ⅰ、Ⅱは口唇期、Ⅲ、Ⅳは肛門期、Ⅴ、Ⅵは遊戯期であるが、さらにそれぞれの段階が二つの段階に区分されている。第一の段階（Ⅰ）は、対象が身体に属するものとして認識される自他未分化な段階であり、第二の段階（Ⅱ）は対象が外界に属するものとして認識される段階である。対角線上に四角で囲まれたマスのなかでは、2 つの外円が太線になっている。これは外界との接触、身体的活動を示す円であり、それが太線になっているのは、内的発達と外的要因が適応的に作用しあうことを示している。したがって、この対角線上のマスが発達変化の正常な軌道を示すものである。それに対して、対角線の左上と右下に位置するその他のマス目についていえば(その後に提示されるエピジェネティック・チャートでは空白の部分）、左上は身体が新しい段階へと発達しているにもかかわらず前段階の衝動に固執している状態を、そして右下は、身体の準備ができていないにもかかわらず次の衝動が生じている状態を表している。いずれもリビドーの固着や疎外・分裂など発達の逸脱を示すものであるという。

この図 1-3 は、その後に作成されたエピジェネティック・チャートでは人生の最初の３段階にあたる。この点では、エピジェネティック・チャートの空白のマス目は本来そこにあった図形を省略したものだと考えることもできる。実際、エリクソンは、新たに作成されたエピジェネティック・チャートについても「このチャートは、空白のすべてについて一考するよう促している」（Erikson, E.H. 1963, p.272）と述べている。このような空白解釈の重要性という点で新旧２つのチャートは共通性をもつといえるが、ただし、エリクソンは、後にエピジェネティック・チャートの空白については、これを逸脱として見なす

(5) 以下のこの図 1-3 の説明はすべてこの論文中のエリクソンの叙述に依拠している。

よりもむしろ、人生諸段階の相互関連性を示唆するような方向で読み取るよう説明している。

> このチャートを見るときには、水平方向の欄も垂直方向の欄も全て、—たとえば（ある特性の）初期の状態として、あるいは明らかに必然的に生じる後期の結果として—発達的に相互に深く関連するものとして考えなければならない(Erikson, E.H. & Erikson, J.M. 1997, p.61)。

図1-4は、エリクソンの妻ジョアンが、エピジェネティック・チャートにおける横軸、縦軸の空白箇所の意味を視覚化するために作成した織物によるチャートである（Erikson, J.M. 1988, p.96）。鮮やかな七色の縦糸は調和的傾向の「基本的信頼感」や「自律性」などを、そしてそのなかに一定量混ぜられている灰色の糸は、それぞれの心理社会的項目の失調傾向である「基本的不信」、「恥・疑惑」などを示しているという。各人生段階における心理社会的諸感覚が、危機を迎える段階の前後にも継続して全体として織り合わされていくことがよく表現されているといえよう。右側の作品は、各人生段階の平均的な時間幅の違いを示したものである。ジェネレイティヴィティの段階である「成人期」は、ちょうど次世代の幼児期の発達期間を支える段階として、もっとも長い期間として表現されている(6)。

さて、図1-1から図1-4までを見てきたが、上に指摘した空白箇所に関する解釈の間には、多少の変更が見られるものの、エピジェネティック・チャートの空白に着目するということは、エリクソンの理論構造の把握において重要な意味をもっているといえる。本研究でも、エリクソンの理論の発展過程に即して、そのつど考えうる空白解釈を試みるというアプローチを取りたい。

---

(6) エリクソンは、エピジェネティック・チャートはこの織物も含めて、心理社会的発達の個体発生をとらえるものではあるが、「ライフサイクル」や「世代サイクル」の「サイクル」を充分に視覚化することにはならなかったと、限界を認めてもいる。たしかに、心理社会的存在しての人間にとって不可欠な「絆（きずな）」であると同時に不可避な「絆し（ほだし）」でもある関係性そのものについては、エピジェネティック・チャートや織物では表現しきれておらず、世代連鎖の「サイクル」は視覚化されていない（Erikson, E.H. 1980b, p.215）。

＜空白解釈の試み＞

ところで、エピジェネティック・チャートの空白箇所を重視するという点、また、このチャートの意味を開かれたものとに保つという点では、本研究と西平 直 (1993)による先行研究との間には共通点がある。彼もまた、空白箇所について「それを切り落として、八つの段階を、縦一列に並べて理解してしまうのでは、わざわざ平面図表という仕方で工夫された、その意味を見落としてしまうことになる」と述べ（西平 直 1993, p.81）、このチャートは心理社会的発達を見通すときの「海図」（西平 直 1993､63 頁）のように用いられるべきであると述べている(7)。しかし、彼の関心はあくまでも「臨床」的なものであるという点をここでは強調しておきたい。つまり彼は、具体的な個人あるいは集団を前にし、これを理解しようとする場合の我々の道しるべとしてエリクソン理論を用いる可能性と重要性を明示しているのである。西平自身の言葉を借りれば、エリクソンが用いた曖昧な用語は「現実の曖昧さを処理し、説明するために使われたのではなく、むしろ、その曖昧さとつきあい続けるための手掛かりとして」、「操作的(operational)」というより「発見的(heuristic)」、「喚起的(evocative)」な機能をもつということになる（西平 直 1993, p.59）(8)。したがってその際には、エリクソン自身も指示したように、このチャートを自らの経験と照合しながら、そこに新たな命を吹き込むようなかたちでのチャートの理解が求められることになるだろうし、読者なり、臨床家なりにエリクソン理論に含まれた矛盾を解消し、統合しながらチャートを解釈するというかたちになるだろう。エピジェネティック・チャートの空白という意味の不確定性は､あくまでも理論上の不確定性なのであって、それは臨床の上で読者や臨床家が、それぞれの「現実」との関係において、自ら意味を確定できるための余地を意味するのである。

また、フランツ／ホワイト(Franz, C.E. & White, K.M. 1985)のように、エリクソンのエピジェネティック・チャートについて、単なる解釈という枠組みを超え出てチャートの空白を使い、自らこれを発展させようと試みている研究者も存在する。彼らは、エリクソ

---

(7) しかしながら、実際にエリクソンのテキストでの言明を、チャートでの座標を確認しながら解釈してゆくという作業を、彼自身は行っていない。

(8) 西平の説明によれば、たとえばアイデンティティは､「その最も中核の意味合いにおいては、アイデンティティの感覚であり、それは研究者の視座から見た言葉ではなく、生きた本人の感覚を、内側から、存在感の次元において、自我親和的に、受け入れたところに成り立つ感覚＝実感として、理解されてくる」（西平 直 1993, pp.215-221）とされる。

ンのライフサイクル論は人間の「愛着欲求」を考慮していないため発達理論として重大な欠陥があると指摘する。そこで、彼らは、「愛着欲求」という新たな軸を付加してライフサイクル論を再構成しようと試みるのである。その際、彼らが指摘するエリクソン理論の欠陥は、本研究の主題であるジェネレイティヴィティにおいて、すなわち他者や次世代とのつながりを求める態度(＝愛着欲求)がもっとも顕著になる段階において表れるという。というのは、エリクソンの理論構造では、成人がそうした愛着欲求をもつ過程が充分に説明されていないからであるという（Franz, C.E. & White, K.M. 1985, p.240）。そして、彼らはエピジェネティック・チャートの「成人期」の段階において7番目の段と列に位置する空白に、「愛着欲求」の発達を示す項目を書き加え、ライフサイクル論そのものを再構成するのである（図2）。彼らは、新しい形でエピジェネティック・チャートの空白箇所を用いている。彼らによるエピジェネティック・チャートの使い方は、エリクソン理論に独自の見解を付加するものであり、ライフサイクル論を発展的に再構成するものとして特徴づけることができるし、またその意味で高く評価されるべきである。

しかし、彼らの研究もまた、西平の場合と同様に「臨床的」関心によって導かれたものである。本研究では、基本的にこうした「臨床的」関心を追求するものではなく、上述のようにエリクソンのジェネレイティヴィティ概念をその概念形成のプロセスに沿って見ていくことが課題である。それ故、エピジェネティック・チャートについての統合的解釈や、発展的な解釈は行わない。むしろ、エリクソンが各年代に記したテキストと照らし合わせ、とくにエピジェネティック・チャートの空白箇所にも着目して、ジェネレイティヴィティ概念がチャート上のそれぞれの空白にどのように関連しているのかを具体的に考察、提示していくことを課題の一つにしたい。そうした読み込みを通して、ジェネレイティヴィティ概念を彼の理論上の意味関連性においてとらえることが可能であり、またこの概念のポリフォニックな意味内容について、その構造を視覚化してとらえていくことが可能であると思われる。

第三節　器としての「ジェネレイティヴィティ」

＜様々な訳語＞

エリクソンが用いた generativity という語を日本語としてどのように表記するかとい

う問題は、未解決の状況にある。generativity という用語そのものがエリクソンの造語であることが訳出を難しくしているともいえる。エリクソンはもともとドイツ語を話しアメリカに渡ってから英語を習得したのであるが、そのエリクソンが generate（生む）、generative（生殖の）、generation（生殖、世代）などの他の英語を念頭においていたのであろうことは容易に想像がつく。おそらく、彼は英語のこの意味の重なり合いとズレを意図してこの用語を造り出したのではないかと思われる。

また、generativity という語はエリクソンの初著 *Childhood and Society*（1950；邦訳『幼年期と社会』1956）から、ライフサイクル論の完結を見る *The Life Cycle, Completed*（1982；邦訳『ライフサイクル、その完結』1989）、そして最後の著作 となった *Vital Involvement in Old Age*（1989；邦訳『老年期』1989）をまとめるまでのおよそ 40 年間に渡る著作活動のなかで何度も登場している。そして、ライフサイクル論が練り上げられ、発展していくとともに、generativity 概念もまた、意味内容が大きく変化している。このことも訳出の問題を複雑にしてきた要因である。

この概念の形成過程については後に詳述するが、訳語の問題に限って概観するならば、まず、エリクソンが本格的に著作活動を始める 50 年代、「成人期」の一つ前の段階「成人初期」で詳細に論じられる「性器性(genitality)」と「親密性(intimacy)」との関連から generativity は「親的な責任をもって次世代を導いていくこと」として定義され(Erikson, E. H. 1950, p. 231）、一般に子どもを生み育てることであると理解された。しかしながら、後には、「子どもがいても、さらには子どもをほしがっていても、必ずしも generativity の表出とは限らない」（Erikson, E. H. 1959, p. 103）と主張されるようになる。さらに、60 年代に入って「世代サイクル(generation cycle)」の視点が導入されるとともに、この概念は具体的な意味内容を飛躍的に増大させ、「生殖性(procreativity)」、「創造性(creativity)」、「生産性(productivity)」といった三つの側面に加え、「教えること」や「世界の維持(the maintenance of the world)」がキータームとして強調されるようになる。ガンディーやジェファソン大統領、フロイトとユングなどを取り上げ、成人を主題とする研究が進められるのもこの時期からである。80 年代になると、「親密性」と「アイデンティティ」との関連が再び強調され、アイデンティティ発達と関わる「自己生成(self-generation)」がその範疇に加えられる。

日本においては、エリクソンの主な著書が精力的に翻訳された 1970 年代以降、そのほとんどの訳書において generativity は「生殖性」と訳されていた。たしかに、初出の 1950

年にこの概念は「子どもを生むこと」と理解できる記述がなされていたため、1950年の訳に関しては「生殖性」という訳語も妥当であったといえるだろう。しかし、エリクソンの記述を詳細に追えば、1960年代には生殖を示す場合に＜procreativity＞という語が充てられていることが分かる。さらに言えば、1970年代はgenerativity概念が飛躍的にその意味内容を増大させた後の時期にあたる。こうした点を踏まえるなら、generativityには「生殖性」ではとらえきれない意味があると理解されるべきであった。しかし、1970年代にエリクソンは「アイデンティティ論者」として注目されていたため、generativityという概念はむしろ日本の読者の関心にとってきわめて周辺的なものと見なされていたのである。

そして、1971年に*Insight and Responsibility*(1964)の翻訳において「世代性」と訳されて以来、日本においてもエリクソン理論における「世代サイクル」の視点の重要性が認知され、generativityは「世代性」と訳出され、理解されることが多くなった。「世代性」という訳語は、当時とりわけ発達心理学の領域において定着しつつあったようだ。ただ、それ以降も「生殖性」と訳される場合や、とくに社会学、教育学などの諸領域でエリクソン理論の「成人期」に焦点を当てた研究論文等のなかでは、「生成力」、「生み出す力」、「世代継承性」、「生成世代性」、「生成継承性」等、さまざまな訳出が独自に試みられている(9)。

ところで、エリクソン理論においてもっとも注目された概念の一つであるidentityの訳語に関して、「自我同一性（自己同一性）」という訳語が定着していながら、しかしそれでは概念の内実をとらえきれないという理由で、現在では「アイデンティティ」というカタカナ表記が定着している。それと同様に、generativityも「ジェネラティヴィティ」というカタカナ表記も用いられるようにもなってきている。

このように、様々な訳出が試みられ、またカタカナ表記も行われているのであるが、訳

---

(9)それぞれの訳語の出典については、順に、柳沢昌一「E. H. エリクソンの心理社会的発達理論における「世代サイクル」の視点」『教育学研究』第52巻第4号 1985年（「生成力」）、田中毎実「人間形成論の内容的展開の試み－ライフサイクル論と相互形成－」岡田渥美編『人間形成論－教育学の再構築』玉川大学出版会 1996年（「生み出す力」）、馬場禮子・永井撤共編『ライフサイクルの臨床心理学』培風館 1997年（「世代性」）、将来世代総合研究所『いまなぜ世代継承性なのか』将来世代国際財団 1999年（「世代継承性」）、やまだようこ「喪失と生成のライフストーリー」『発達』第79号、ミネルヴァ書房 1999年（「生成世代性」）、やまだようこ「エリクソンの子どもたちと生成継承性」『教育学年報8子どもの問題』2001年。

出に関してここに挙げたものだけを見ても、ジェネレイティヴィティを人間の「力」としてとらえるもの（「生成力」、「生み出す力」）と、世代が生成・継承されてゆく事実に重点をおくもの（「世代性」、「世代継承性」、「生成世代性」、「生成継承性」）との間には微妙な対立が見られ、この点でなお概念としての共通理解を欠いている状況があるといえるだろう。そしてそれは、エリクソン自身において、この概念自体が曖昧であり、加えて年代ごとに徐々にその意味内容を変化させたという事情にもよるのである。

こうした事情を考慮した上で、本研究では原語の発音のカタカナ表記を用い、ジェネレイティヴィティという用語をいわば一つの入れ物としておきたい。というのは、年代ごとに変化していく意味をその都度この概念に組み込むためには、むしろこうしたカタカナ表記を用い、意味を臨床的・統合的観点から確定しない方がふさわしいからである。また、generativity のカタカナ表記は、これまでのところ「ジェネラティヴィティ」が主流であるが、本研究では、「ジェネレイティヴィティ」としたい。英語の発音では<ra>の部分は「ラ」と「レイ」の中間のように聞こえるので、どちらでもよいと思われるが、この言葉の語源であると思われる generate（ジェネレイト）、generation（ジェネレイション）、generative（ジェネレイティヴ）などの語を連想させやすくするためには、むしろ「ジェネレイティヴィティ」と表記することが適切であろう。

第三章　三つの系—1950年代、1960年代

それでは、1950年代から80年代までのジェネレイティヴィティに関するエリクソンの見解の変化を追い、この概念の内容をとらえていこう。発達段階論、そのなかでもジェネレイティヴィティにのみ焦点を絞って見てみると、まず、1950年から60年代まで（1969年の *Gandhi's Truth* を除く）に次のような流れを見て取ることができる。

第一に、「成人初期」に関する理論のなかで、フロイトの心理性的理論を発展させる過程で心理社会的発達段階論の基盤が形成され、またこうした文脈のなかでジェネレイティヴィティ概念が誕生するまでの系（1950年代、第一節）。第二に、「世代サイクル」の視点が確立され、心理社会的発達段階論がライフサイクル論として提示されるとともに、ジェネレイティヴィティ概念が「相互性」の要として明瞭に位置づけられ、社会進化的、プラグマティズム的傾向が表れてくる系（1960年代、第二節）。第三に、年代的には第二の系と重なるが、「儀式化」、「擬似種化」の概念が導入され、ジェネレイティヴィティを支えあるいは阻止する社会的、文化的、歴史的要素に関する考察が展開され、社会様式(モード）の意義が明確化されていく系（1965年以降、第三節）である。

第一節　フロイト理論の継承・発展（1950年代）

まず1950年代のエリクソンの著作から、心理社会的発達段階やライフサイクルを考察の中心に据えたものとして以下の2つの文献を取り上げ、この時期にジェネレイティヴィティがどのように考えられていたのかをみていくことにする。

1950年の *Childhood and Society*（邦訳『幼年期と社会』1956）
1959年の *Identity and the Life Cycle*(邦訳『自我同一性』1973)

彼の最初の著作 *Childhood and Society*(1950)には、エリクソンの臨床家としての基本的姿勢や、人間へのまなざしが示されている。エリクソンは、この著作においてフロイトの心理性的理論、とくに幼児性欲理論を信頼性のある理論として引き継ぐ一方で、フロイトの理論がさらに社会的な視点によって補われる必要があると考え、「身体的過程」、「自我の過程」、そして「社会的過程」の三つの視点で人間を観察し、これらの視点をフロイ

トの理論に加えた独自の「心理社会的（psycho-social）」視座を提示している。

この著作のなかでジェネレイティヴィティ概念については、未だ詳細な記述がなされていないものの、「成人初期」との関連で簡単にその概念内容が示唆されている。また、「ライフサイクル」ないし「世代サイクル」という用語は用いられていないが、本書第七章「人間の８つの段階」はその前身と言えるものであり、心理社会的発達項目のエピジェネティック・チャートが掲載されている。

＜「性器性」から「親密性」へ＞

エリクソンは、この著作のなかで、フロイトの考えが固定的で極端な主張をもつ理論へと組み替えられて「信奉」されていることに対し懸念を表明している。すなわち、成人の「性」についてこれが短絡的に強調されすぎる傾向を批判し、とくに「成人初期」についての叙述部分で次のように、フロイトのコメントを紹介している。

> この段階（「成人初期」）で「性器性」についての議論を完結させるべきだが、その基本的な方向づけとしてフロイトのきわめて簡略な言説を引用しよう。精神分析の治療は、患者にただ一つの義務を遂行する必要性――充分なオルガスムを、適合する「対象物」と、定期的に経験すること――を納得させようとしている、とよく言われ、それはお決まりの噂話にもなっている。しかし、もちろんこれは真実を伝えるものではない。フロイトは、ある時、正常な人間にできなくてはならないことは何であろうかと問われたことがあった。質問をした人は、おそらく複雑な答えを期待していたに違いない。しかし、フロイトは晩年に顕著になったそっけない口調で、「愛することと働くこと」と答えたと伝えられている（Erikson, E.H. 1950, p.229）。

周知の通り、フロイトは人間の性のエネルギーに注目した。そして、性の欲望が過度に抑圧されていた当時の人々の不安と怒りを指摘し、そこから人間を解放することに貢献したといえよう。しかしながらフロイトの言説が性の短絡的な強調としてみなされるようになった状況を踏まえ、エリクソンは、性を本能的な適応の問題としてのみとらえることは適切ではないと主張する。そのために、フロイトの「愛することと働くこと」という返答を紹介したのでる。

エリクソン自身も、男女パートナー間の性的関係に、次のような心理社会的意味を見出

していた。

> オルガスムのクライマックスの経験を経て、二人の相互調整(mutual regulation)という最高の経験へと至る事実全体によって、男女の対立や、事実と幻想、愛と憎しみの対立などから生じる敵意や潜在的激怒は、なんらかの形で緩和される(Erikson, E. H. 1950, p. 230)。

エリクソンは、男女パートナー間の性的関係に、単に性交がうまくいくということにとどまらない意味を見出している。つまり、彼はここに敵対しやすい二者が各々の「相互調整」によって二項対立を緩和するという、動的な人間関係の原型を見るのである。エリクソンは、こうした人間関係を特徴づける概念として「親密性」を導入する。そして、この「親密性」は必ずしも男女の関係に限られるものではない。たとえば「親しい友人関係、肉体的な格闘、教師から感化される経験、自己の深みからの直観の経験」などにも、「相互調整」のダイナミズムは通底しているともいうのである。

＜「親密性」の前提条件—「アイデンティティ」と「自己放棄」＞

エリクソンによれば、「オルガスム」や「性的結合」も含めて、「親密性」が達成するためには、相手を（そして自分自身をさえも）受け入れることが前提とされるという。エリクソンはこうした前提を「自己放棄(self-abandon)」という言葉で表している。

また、エリクソンは「真の親密性は、現実に融合している複数のアイデンティティ(identities)であると同時に、対比によって際だつアイデンティティ(identities)でもある」(Erikson, E. H. 1968a, p. 135)[10]と述べる。「親密性」は他者との完全な融合ではなく、それぞれに「アイデンティティ」の感覚があるがゆえに互いに交じり合うことができ、また交じり合うがゆえに、お互いの「アイデンティティ」がより際だつ、という相互調整のプロセスなのである。

---

(10)「親密性」や「アイデンティティ」に関して1968年の論文集 *Identity : Youth and Crisis*（『アイデンティティー青年と危機』）からの引用箇所は、それが本書に所収されている1950年に発表された論文中にあり、論理的な整合性から考えて50年代の見解として見ても誤りではないと判断して引用している。

真に二人でいること(true twoness)の条件として、その人がまず自分自身にならなければならない（Erikson, E. H. 1959, p. 101)。

「親密性」の前提は「自己放棄（self abandon）」であるが、それが可能になるのは「アイデンティティが申し分ない形で形成途上にある場合に限られる」（Erikson, E. H. 1968a, p. 135）のである。「青年期」の段階で達成された「アイデンティティ」の感覚は、「成人初期」において男女間の性的関係という具体的な場面での「自己放棄」として試され、「親密性」の感覚において「際だつアイデンティティ」として再構成される。この意味で、真の「親密性」は、「青年期」における「アイデンティティ」の形成を前提とするのであり、逆に言えば、この「アイデンティティ」に新たな様相をもたらすものと考えられよう。

こうした見解は、エピジェネック・チャートにおいては、「アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散」（青年期）の上部に連なる空白部分を説明するものと考えられる。ここで、エピジェネティック・チャートを見てみよう（図 3-1 の作業チャート）。このチャート上の a の空白の部分は、「青年期」に経験される「アイデンティティ」の葛藤が、「成人初期」の段階においてどのような様相を帯びるのか、また同時に、「成人初期」における「親密性」の葛藤に「アイデンティティ」の問題がどのように関わっているのか、ということを示すと見なすことができるだろう。

このようにエリクソンは「成人初期」に関する論述のなかで、「性器性」を「自己放棄」という概念を介して「親密性」の問題へと発展させているが、ここで述べた「性器性」ならびに「親密性」の議論は、本研究で問題とする「成人期」のジェネレイティヴィティの概念にも密接に関連するものである。以下、この点についてより詳細に論じることにする。

＜ジェネレイティヴィティ概念の誕生＞

1950 年の *Childhood and Society* のなかで、エリクソンは「成人期」については重点的に論じておらず、分量にして「成人初期」の半分程度にとどまっている(11)。その中でジェ

(11)Childhood and Society（1950；邦訳『幼年期と社会』1956）が公表される以前、ジェネレイティヴィティの段階を除く 7 つの段階がすでに考案されていた。エリクソンの妻ジョアンの回顧によると、彼らはドライブ中の車の中で「成人期」の段階を思いついた。彼らは、シェイクスピアの描いた人生段階に「遊戯期（play age)」が抜け落ちていることを話していて、自分たちの理論に自分たちのいる重要な段階が一つ抜けていたことに気がついた、という。

ネレイティヴィティ概念は、「成人期」の調和的傾向を示すものとして、エリクソンが新たに造った用語であることが示されている。少し長くなるが、1950年に初めてジェネレイティヴィティ概念が登場した箇所をここで引用しておきたい。

ジェネレイティヴィティ　対　停滞

「親密性 対 孤独」に関する議論に、すでに、かなり核心的な葛藤が含まれていたので、ここでは端的に「ジェネレイティヴィティ 対 停滞」という定式を明示するだけでよいだろう。私は、新しく、分かりにくい用語を作り出したことを謝るが、しかし、創造性や生産性、あるいは他のどのような最新流行型の用語を用いても、次の重要なことを伝えるのは不可能に思われたのだ。つまり、身体的精神的出会いの中で自分を失う能力(the ability to lose oneself)は、生みだされたもの、責任として受け入れられたものに対する自我の興味拡大とリビドーの供給増大をもたらす、ということである。基本的に、ジェネレイティヴィティは次世代を生み出し導くこと、何であれ親的な責任が付与される専念対象を生み出し導いていくことへの関心である。この豊かな生成の失敗は、ジェネレイティヴィティから退行し、相互反発に際して顕となるような「疑似的親密性」への脅迫的欲求が生じることを意味する。そうした場合

ジョアンは93歳のとき、1940年代の自分たちの研究と生活を回顧してこう述べている。「ライフサイクルの中で自分自身が今どこにいるのかをしっかりと認識し、それについて距離を置いて眺めることは、なんと難しいことなのだろう」。彼女はまたつぎのように述べている。「私たちが、子どもの発達段階に身近に触れると同時に、壮年期、結婚、子育てといった問題や課題に気づき始めていたことは確かである。しかし、未だ充分にこなしきれていないもつれた関係の糸の真っ只中で生きながら、どうして当時の私たちが＜この時期のことがよく分かっている＞と感じていられたのか、今から考えるとあきれてしまう」。この回顧はエリクソンの実質的に最後の著作となった *The Lifecycle Completed* (1982；邦訳『ライフサイクル、その完結』1989)をジョアンが加筆して改訂版を出版したときの序文につづられているものである（Erikson, E.H & Erikson, J.M. 1997, pp.2-3)。ジョアンは、エリクの英文を校正するなど、これまでも重要な研究パートナーであるといわれてきたが、とりわけライフサイクル論への貢献は大きい。工芸に長けていたジョアンは、カラフルな糸で調和的傾向、失調傾向を表したエピジェネティック・チャート織物を作ってもいる（図1-4)。また、1986年に出された *Vital Involvement in Old Age*(1986；邦訳『老年期』1989）はエリクソン夫婦と若手研究者キヴィニックの3人の共著となっているのだが、この中に収録されている聞き取り調査はジョアンによって行われ、実質的には彼女とキヴィニックの作品となっているという。なお、エリクソンの研究生活におけるジョアンの重要性については、エリクソンの伝記をまとめた歴史学者Ｊ．フリードマン氏からの教示による。

には内的な停滞と関係性欠乏の感覚（そして客観的な徴候）が全面的に広がるのである（Erikson, E.H. 1950, p.231.傍点筆者）。

ここでは、ジェネレイティヴィティ概念が、自らの子どもを生み出すこと、すなわち「性器性」がもたらす帰結としての生殖と関連することが示唆されている。しかしそれと同時に、エリクソンは、ここで「成人期」の核心的葛藤がすでに「成人初期」に含まれていると述べている。具体的に言えば、ここで言及されている「身体的精神的出会いにおいて自分を失う能力」には、「成人初期」の「親密性」のところで問題となっていた「自己放棄(self-abandon)」と通じるところがある。「自分を失う」は文字通りに訳した形だが、lose oneself には英語の慣用句で「没頭する」「専念する」「夢中になる」などの意味もある。引用中にも実際「専念」の語が見られるが、エリクソンは、このように「出会いにおいて自分を失う能力」の形成が背景ないし前提にあることを含意するために、「生産性」や「創造性」というポピュラーな言葉を用いるよりも、generativity という用語を新たに造り出すことを選んだのである。

しかし他方で、「身体的精神的出会いのなかで自分を失う能力」というように、「精神的」の語が加えられることで、性的連関からの解放の傾向もまた示唆されている。この意味では、ジェネレイティヴィティは、自らの子どもを生殖し、またその子どもを育て、導くなかで自己を失う能力として特徴づけることができるだろう。

そう考えるならば、彼がここで、ジェネレイティヴィティの対立項目を、「成人初期」で示した概念を再び用いて、「擬似的親密性」を脅迫的に要求する「停滞感」、「関係性欠乏」として定義していることも理解できる。この「擬似的親密性」は、「成人期」に関連づけていえば、自らが生み出した子どもとの関係において、「自分を失う」ことができないことを意味するといえよう。

＜脱性化＞

「成人期」におけるジェネレイティヴィティは、別の言葉を用いるなら、「成人初期」に異性パートナーとの間に築かれる性的「親密性」を前提としつつ、同時にこれを次世代との責任関係において「自己を失う能力」へと脱性化したものとして特徴づけることもできるだろう。エピジェネティック・チャートに関連づけていえば、「成人初期」の上部の空白（図3のb）は、パートナーとの「親密性」がやがて次世代との関係において脱性化さ

れることを予示し、あるいは、「成人期」における異世代間の「親密性」が「成人初期」における「親密性」に根ざすものであるということになるだろう。

ジェネレイティヴィティ概念におけるこうした脱性化の特徴には、フロイトの心理性的理論の枠組みを超え出ていくエリクソン理論の特徴が現れているとも言えよう。こうした傾向は、1959年の *Identity and the Life Cycle* (1959；邦訳『自我同一性』1973)のなかで、再び、しかしより拡張されたかたちで現れてくる。

たしかにエリクソンは、この著作においても、ジェネレイティヴィティ概念について、次世代との関係における「親密性」の基盤に「性器性」があることを否定せず、「親的な責任」という表現をし、「ジェネレイティヴィティは（「性器性」と遺伝子を介して）次世代を形成することへの関心」(Erikson, E.H. 1959, p.103) であると明確に述べている。しかしながら、エリクソンはここで、ジェネレイティヴィティを「性器性」の帰結として、つまり子どもを産み育てる生殖のみを表す概念として、狭く限定することはしていない。この点に関してエリクソンは次のように述べている。

> 不幸にして親になれなかった人たち、あるいは別の方面に特別な才能をもっている人たちは、子孫にではなく他のかたちで、親的な責任を専念させるような愛他的な関心や創造性にこの衝動を向ける (Erikson, E.H. 1959, p.103)。

> 子どもがあるということ、あるいは子どもを望んでいるということさえ、それだけではジェネレイティヴィティの証明にはならない (Erikson, E.H. 1959, p.103)。

つまりここでは、性的必然性からさらに離れて、身体的に生み出すことのみならず、これを超え出て精神的にも次世代を生み出すという含意が、ジェネレイティヴィティ概念にあったということができるだろう。こうした脱性化の含意は、「自分を失う能力」という精神的な力量の強調において示されているといえよう。

＜「相互性」の視点＞

「親密性」とも内容的には接近しているが、50年代におけるジェネレイティヴィティ概念を特徴づける場合、さらに「相互性(mutuality)」の概念について述べておけなければならない。この概念は、60年代のジェネネレイティヴィティ概念を把握するのに極めて重要

な鍵概念であるが、実はすでに1950年の *Childhood and Society*（1950；邦訳『幼年期と社会』1956）において示唆されていた。

エリクソンは、この著作の第二章すなわち発達段階論の「乳児期」の基盤的考察である「幼児性欲理論」と題する章において、フロイトの幼児性欲論と児童精神分析家としての臨床事例を基盤に、乳幼児の退行現象やしつけ（child training）を論じる視座を明らかにしている。そのなかでエリクソンは、「幼い患者とその両親との間に＜相互性＞の機能をもう一度確立することが我々の仕事であるといいたい」とし、次のように述べている。

> そうすれば、子どもと両親が互いに相手を支配しようとして、空しい、しかも苦痛の多い、破壊的な努力を繰り返すことがなくなり、代わりに相互調節（mutual regulation）が確立されて、その結果として、子どもと親の双方に自己制御が回復するだろう（Erikson, E.H. 1950, p.64）。

エリクソンにとって、幼児の治療は親子関係の治療を意味しており、関係の治療とは、その関係から過剰な相互支配を取り除き、「相互性」の確立もしくは回復をもたらすことを意味したのである。このような臨床経験と考察から、エリクソンは「親子関係」について以下のような主張を展開している。

> 多くの子どもたちの発達に向き合う親たちは、暮らしの中でたえず子どもからの挑戦に応じている。親たちも、子どもとともに発達していかなければならないのだ。
>
> 子どもが生まれた時、あらかじめ不変の性格を有している親が哀れな幼き者に一方的な影響を与える、というように一般化して考えるなら、われわれは事実を曲げて理解することになる。なぜなら、このか弱く変化していく幼い存在は、家族全体を動かすからである。赤ん坊は家族からコントロールされると同時に、その家族をコントロールし育てている。事実、家族は赤ん坊によって育てられながら、赤ん坊を育てているといってよい。生物学的に、あるいは発達的に反応様式がどのように決定されていようとも、それらは相互調節の可変的様式における一連の潜在的可能性であると考えられなければならない（Erikson, E.H. 1950, p.65）。

エリクソンは、このように、親が子どもを一方的に育てるだけでなく、子どもによって

親が育てられるという視点を示し、親子関係を相互形成的な関係としてとらえている。ただし、これはあくまで乳幼児の発達をとらえる文脈において述べられていることであり、先に引用した同書の七章「人間の８つの段階」における「成人期」に関する記述に、このような「相互性」に関する見解はまだ見られない。

＜世代サイクル論の萌芽としての「基本的信頼感」の理論＞

1950年代において、ジェネレイティヴィティは、上述のように「成人初期」の「親密性」の展開として示されていた。すなわち、ジェネレイティヴィティは別の発達段階の項目である「親密性」との意味関連性から導き出された概念であるといえる。さらにジェネレイティヴィティは、1959年の著作ではさらに別の発達段階、すなわち「乳児期」とも関係づけられている。「乳児期」との関係に関しては、1960年代において本格的に展開されることになる「世代サイクル」の視座の萌芽を見て取ることができる。

エリクソンは、1959年にジェネレイティヴィティが発達しない理由について述べた箇所で、次のような考察を展開している。

> 事実、児童相談にくる若い親たちの大多数が、この段階での発達遅滞や発達すべき能力の欠乏に悩まされているようだ。原因は、幼児期初期の漠然とした記憶の中に見いだされることが多い。無理やり自己形成したパーソナリティに根をもつ過剰な自己愛に、そして、最終的には（ここではじめに戻ることになるが）一つの信頼である「種への信頼」、つまり、共同体の中で自分が歓迎されており、信頼される存在であると子どもが確信するような信頼の欠如に見いだされるのである（Erikson, E.H. 1959, p.103）。

ここでエリクソンがジェネレイティヴィティの未発達の理由として指摘しているのは、乳児期で獲得されるべき「基本的信頼感」の欠如である。ジェネレイティヴィティは「基本的信頼感」の上に世界と自分とを素朴に受容し、出会いを可能にする姿勢において発達するととらえられている。

このことをエピジェネティック・チャートと関連づけるなら、「乳児期」の「基本的信頼感」の上に連なる空白は、やがて「成人期」に至って、「基本的信頼感」が上記のような形で問い返され、そして新しい形で――ジェネレイティヴィティを構成し、また支え、

あるいは阻止する要素として――問題となることを予示しているといえるだろう（図３のｃ[12]）。そして、チャートを見渡すと、「基本的信頼感」が単独でジェネレイティヴィティに影響を与えているというのではなく、これが「アイデンティティ」の基盤となり、「親密性」において「出会いのなかで自分を失う能力」を支えているものであることが分かる（ｃ’）。また（ｃ’）は、他の全ての諸項目についても同様に、それぞれが過去での経験が積み重ねて成人期に至っていることが読み取れるのである。

ところで、ここではたしかに一つの世代の発達過程内部での発達諸段階間の関係が指摘されているのみである。しかしながら、まさにこの世代は、親として次世代に関わっているという理由で、また、この親の世代における「基本的信頼感」の欠如が、さらにそれに先行する世代から信頼されなかったことに起因すると考えることができるという理由で、ここにはすでに「世代サイクル」の視点の萌芽が見られると言ってもよいだろう。

以上の考察は次のようにまとめることができよう。1950 年代には、フロイト理論を継承・発展させるなかでエリクソン独自の心理社会的発達理論が展開される。このなかでジェネレイティヴィティ概念は、未だ詳細に論じられてはいない。しかし、「成人初期」や「幼児期」との関係のなかで「親密性」や「相互性」といったジェネレイティヴィティ概念の重要な構成要素が示される。これらの概念のうち「親密性」概念からは脱性化の傾向や「出会いにおいて自分を失う能力」の重要性が見て取れ、他方、「相互性」の概念からは 60 年代の「世代サイクル論」への展開の萌芽を見ることができるのである。

第二節　世代サイクルと社会進化の要としてのジェネレイティヴィティ（1960 年代）

本節では、以下の５つの文献を中心に、1960 年代のエリクソンのジェネレイティヴィティに関する見解の変化を追っていく。

---

(12)　図３の作業チャートで、ｃについて各段階において色の濃度を変えて示しているのは、同じ項目でも各段階において異なる様相を示すことを表現するためである。色の差異は、それぞれの様相の意味そのものを示しているのではない。

1963年の *Childhood and Society* 2nd edition（邦訳『幼児期と社会』1973）

1964年の *Insight and Responsibility*（邦訳『洞察と責任』1971）

1968年(a)の *Identity : Youth and Crisis*（邦訳『アイデンティティー青年と危機』1973）

1968年(b)の社会科学事典に掲載された項目 Life Cycle

1966年の論文 The Ontogeny of Ritualization in Man

1963年に *Childhood and Society*（1963；邦訳『幼児期と社会』1973）の改訂版が出版された。全体の構成は初版と同じであるが、第七章「人間の8つの段階」における「成人期」の分量は劇的に増え、内容に関してもかなり変化している。よって以下では、初版との比較からジェネレイティヴィティ概念の変化を追ってみたい。まず「成人期」の節の冒頭には次のような文章が加えられている。

> 本書は幼児期に重点をおいているが、そうでなければジェネレイティヴィティの章が中心的になったに違いない。この用語は、人間を、学習するだけでなく、教え、組織を作る存在にしてきた重要な進化的発達を包含しているからだ。最近は、子どもが大人に依存していることをドラマチックに表現する主張があるが、そのことによって年上の世代が若い世代に依存している事実が隠されてしまっている。成熟した人間は、必要とされることを必要とする。成熟は、生みだされ、世話をされなければならないものから勇気づけと同じく、導きをも必要とするのである（Erikson, E.H. 1963, pp. 266-267）。

この冒頭の一節には、重要な見解が凝縮されている。第一に、改訂版では、成人が「必要とされることを必要とする」と述べられているように、幼い世代と先行世代とが相互依存、相互形成の関係にあるということがより明瞭に主張されている。前述したように、大人と子どもの相互形成的な関係、とりわけ母子の「相互性」については、すでに1950年の初版においても触れられていたが、改訂版においてはじめて「相互性」の視点がジェネレイティヴィティと結びつけられ、「成人期」を考察する際の鍵として位置づけられるようになっている。

第二に、このことは、世代サイクルという視座、そして異世代間の「相互性」による、

人間の強さの発達、すなわち「徳（virtue)」の発達の明示化という新しい理論展開を方向づけることになる。

第三に、*Childhood and Society* の初版では、人間の幼児期と社会様態との関係が考察の対象になっていたのに対して、改訂版ではエリクソンの思索がさらに発展し、教える存在、社会組織そのものを作り出す存在としての人間、「成人」がその中心的テーマになりつつあることが示されている。さらに、これとの関連で、このようなジェネレイティヴィティが人間の「進化的発達」を意味するものとしてとらえなおされていることにも注目しておきたい。後に述べるが、エリクソンはこの時期から、ジェネレイティヴィティに関して社会進化論的、プラグマティズム的、あるいは優生学的ともいえる主張をはじめるのである。

以下、これらの三点について詳細に見てみることにしよう。

＜必要とされることを必要とする＞

まずは、「相互性」の視点から見てみよう。このテーマは、1963年の改訂版での先の引用に示されているように「必要とされることを必要とする」という言葉で、初めてジェネレイティヴィティに関連するものとして定義される。これは、1964年の著作 *Insight and Responsibility*（邦訳『洞察と責任』1971）でも、次のように述べられている。

> 大人の人間は、必要とされることを必要とする。人間は、自分が生み出してきたもの、今は‘育てられ’、保護されるているもの、そして、やがて自分を乗り越えてゆくものから発せられる挑戦＜challenge＞を必要とする。なぜなら、それは人間の自我の強さのためであり、また、彼の所属する共同体の強さのためだからである（Erikson, E.H. 1964, p. 131）。

ここでもジェネレイティヴィティは、先行世代から「必要とされること」として定義され、しかもそれが成人個人にとって「必要」であるのみならず、社会にとっても「乗り越え」のために必要であることが示されている。エリクソンは、前者、すなわちジェネレイティヴィティが成人世代にとって有する重要性については次のように述べている。

> ひとたび人間の人生諸段階の相互連動を把握するなら、我々は成人が「必要とされ

ることを必要とする」ようにできていると、理解できるだろう。それは、人間が自分自身をペットや子どものように扱うようになる自己耽溺という精神のゆがみを避けるためである。だから、私は本能的で心理社会的なジェネレイティヴィティの段階を、「性器性」を越えるものとして提示したのであった（Erikson, E. H. 1964, p. 130）。

エリクソンが、成人は「必要とされることを必要とする」という理由は、成人個人が「成人期」という発達段階において、その時期独特の「強さ」を獲得するためである。それに失敗した場合、成人は、「自己耽溺」に陥るとされている。つまり、これは「出会いにおいて自分を失う能力」を達成できないために「親密性」によって特徴づけられるような他者との関係を築くことができないこと、「擬似的親密性」にとどまることを意味しているのである。そのことと関連して改訂版の「成人初期」では、「親密性」について次のような見解が付与されている。

> 二人の孤独（isolation à deux）[13]ともいいうるようなパートナーシップもあるが、それは次の重大な発達（critical development）— つまりジェネレイティヴィティの発達に直面する必要から二人を遠ざけることになる（Erikson, E. H. 1963, p. 266）。

ここでは、性的連関とその帰結としての生殖という文脈はほとんど完全に背後に退き、むしろ、教えること、組織を作ること等の対人関係スキルの発達条件としての「親密性」に重点が移動しているといってよい。「出会いにおいて自分を失うこと」は、成人としての発達の可否を左右する重要な項目になっている。ここでエリクソンが挙げている「二人の孤独」は、お互いの甘えあいを許しあう閉じた関係であると推定できるが、そうした関係に甘んじていては、ジェネレイティヴィティの発達に直面できないとエリクソンは断言しているのである。

一方、ジェネレイティヴィティにとって不可欠な「自分を失う能力」は、真の「親密性」に支えられているだけではなく、「相互性」のなかで引き出されるものでもある、というのがエリクソンの見解であろう。この能力は、ある年齢に達すればひとりでに芽生えてく

---

(13) ここで用いられている仏語<à deux>は、「二人の」、「二人による」、「二人のための」という意味にも読める。

るというものではない。エリクソンは、晩年に「私たちみなが親しく交わるようにさせる基本的な条件は、生まれたばかりの子どもがもつ飾らなさ（nakedness）と無力さである」（Erikson, E. H. 1974, pp. 81-82）とも述べているが、彼のこうした基本的見解は、「出会いにおいて自分を失う能力」を、丸裸で自分を必要とする他者によって引き出されるものとしても位置づけていることを意味しよう。そうした無力な相手との間に「相互性」を築こうとする場合、まず不可欠なのがその関係に自分を投げ出すこと、「自分を失う」ことだというのである。

＜世代サイクルと徳の形成＞

このような展開は、この時期から現れてくるエリクソンの新たな視座の枠内に位置づけることによってよりよく理解される。すなわち、「世代サイクル」という視点である。日本におけるエリクソン研究では、すでに柳沢昌一（1985）が60年代前半の「世代サイクル」の視点の導入とそれにともなうエリクソンの思想的転回を指摘している。本稿はこの論考にも負うところが多いので、ここで、柳沢の議論を整理しておきたい。

柳沢は、1950年代までのエリクソンの理論は不完全であったが、それに60年代前半に「世代サイクル」の視点が導入されることによって、より整合性の高い理論となり、そしてこれがその後のエリクソンの研究の動向に大きくた影響したと述べている。柳沢は、50年代のエリクソンの理論について、「生命体の個体発生をとらえるために構成された系のなかに、相互性の論点を組み込む形での構図化では、複数の発達系の間の社会的相互作用の動態をとらえるものとはなっていない」（下線筆者）と述べ、「相互性の視点とライフ・サイクルの構図の間には、発達に対する認識論上の断絶が存在している」と見ている。そして、「60年代前半、エリクソンは相互性の視点を基盤として＜世代サイクル＞の視点を措定し、「成人期」の意味をとらえ返すに至っている」（柳沢昌一 1985, p. 397）と指摘している。

柳沢が指摘するように「世代サイクル」という用語が初めて登場するのは、1964年の *Insight and Responsibility*（1964；邦訳『洞察と責任』1971）においてである。このなかでエリクソンは、心理社会的発達を推し進めている人間個人の内的な力を「人間の強さ（human strength）」あるいは「徳（virtue）」として定式化して考察し、それらが葛藤の解決から生じるものであると同時に、異世代の相互形成的な関係のなかで発達するものだという洞察を示した。

「徳（virtue）」については第一章でも述べたが、この著作においてエリクソンはまず、臨床経験から次のように述べる。

精神分析家は、これまで半世紀以上にわたっていろいろな人生史を聴いてきたので、個人のライフサイクルや世代継承の中にみられる固有の強さに関して、「公的ではない」イメージをすでにもっていると私は信じている。だから、精神分析の発展や「自我の強さ」への注目は、人間の強さについて、道徳的観念によって培われた高潔さや公正さという意味ではなく、「固有の強さ」という意味で再検討するべきであることを示しているといえる（Erikson, E. H. 1964, p. 111）。

エリクソンは、人間の強さを、道徳律としてではなく人間に固有の本質的な強さとして提示していく必要性を指摘している。それが彼のいう「徳（virtue）」なのであるが、その「固有の強さ」とは具体的にどのようなことを示すのか。エリクソンは、自らの臨床経験から、患者が自己を再構成し、新しい段階に進んでゆく回復力にその力を見出している。

我々にとって、患者が回復してきたことを知るのはもっともうれしい瞬間だ。ただ、それは、一質問紙でいうような、顕著な変化、やや変化というようなことではなく一本質的な変化が見られている場合である。つまり、症状が消失したというのは、次の段階へのプロセスに過ぎない。決定的な変化の基準とは、患者に強さの増大が見られることであり、愛情関係であれ、仕事であれ、あるいは家庭生活や友人関係であれ、社会人生活においてであれ、正しいと考えられる目的追求を集中してやれる力を保有しているということである(Erikson, E. H. 1964, pp. 111-112)。

ここで、エリクソンが人間の強さと見ているものは、社会への能動的働きかけとして表れるものといえよう。人間を生きさせる活力としてのそうした強さを、エリクソンは各人生段階における心理社会的危機を乗り超える「徳（virtue）」として、「希望」（「乳児期」）、「自律性」（「幼児期初期」）、「自主性」（「遊戯期」）、「勤勉性」（「学童期」）、「誠実」（「青年期」）、「愛」（「成人初期」）、「ケア」（「成人期」）、「英知」（「老年期」）と提示したのである。

ジェネレイティヴィティと直接的に関連する「成人期」の「徳」は、「ケア（care）」

と示されている。

> ケアは、愛や、必然や、あるいは偶然によって生み出されたものに対する、広がり続ける関心(concern)である。ケアは、放棄できない義務感に伴うアンビヴァレンスを克服する（Erikson, E.H. 1964, p. 131）。

ケアという語はもともと「懸念」、「心配」、「気苦労」、「憂慮」などを表すが、エリクソンはケアを、心配や憂慮などの消極的な意味に限定せず、「義務感に伴うアンビヴァレンスを克服する」前向きな力として、「肯定的な意味合い」においてとらえ直している(14)。

また、ここでエリクソンは、ジェネレイティヴィティが、愛によるものであろうと、必要によるものであろうと、あるいは偶然によるものであろうと、いずれにせよ自らが生み出した世代との間で生起するものであることを示唆している。そうしたものは、義務やアンビヴァレンスをもたらすものであるが、エリクソンはケアを、自らが生み出したものへの義務とそれに付随するアンビヴァレンスを受容する成人の心理社会的強さとして提示している。

エリクソンは、このように、「成人期」の「徳」である「ケア」が、「ジェネレイティヴィティ」と「停滞」という二つの項目の間の葛藤の解決から生じるものであるとするの

---

(14) なお、エリクソンのケア概念は、従来「世話」や「はぐくみ」と訳され、または「ケア」と表記されてきた。本研究においては、「ケア」という訳語を当てたい。エリクソンのケア概念については拙稿（2000）でも考察している。そこでは、この概念の訳語の問題に触れ、エリクソンのケア概念は、成人の「自己へのまなざし」と「他者への関心」とが交差するところにこそ生じるものであるとして、「配慮」と訳すことを主張した。しかしながら、これは、エリクソンが精神分析の手法によって「自己観察的になることによって思慮分別を身につける」ことを「啓蒙」と呼んでいた（Erikson,E.H. 1963, Chapter11）こととの概念的混同の結果導かれた解釈であったといえる。エリクソンのテキストから、そうした解釈をすることそのものは可能であると思われるが、しかしながら本研究において示している三つの系や、70 年代以降の見解も含めて考えると、こうした解釈は一面的であったといわざるを得ない。そのため、本研究では、訳語を改め、ケアというカタカナ表記を用いることにした。ケアという概念は、近年、エリクソンのテキスト以外で、教育学などの臨床科学において新たに注目されている（Noddings, N. 1984, Mayeroff, M. 1971, Gilligan, C. 1982, 広井良典 1997, 鷲田清一 1999 など）。これらの議論においてこの語を「ケア」と訳すことはほぼ定着している。また基本的にこの語を「関心」ととらえる点では、エリクソンの用語としての care もそれらの議論との共通基盤をもつと判断し、本研究においてもカタカナ表記をとることにした。

だが、それと同時に、この「ケア」の「徳」は、異世代の相互形成的な関係のなかで発達するということを強調している。ここで「世代サイクル」という新たな視点が展開されるのである。

徳は、各世代が組織の中で共に生きるとき、重なり合う世代の相互交渉の中で発達する。共に生きるということは偶然のつながり以上のものである。個人の人生の段階は、他者の段階と連動して「相互に生きて」おり、歯車のように噛み合いながらすすみゆくものである(Erikson, E.H. 1964, p.114)。

幼児期と成人期の段階が＜歯車のように噛み合う＞ことは、まさに世代の形成と再形成のシステムである(Erikson, E.H.1964, p.152)。

ここにおいて、すでに1950年の著作に登場していた「相互性」の概念が、明確に、２つの世代における発達を進めていく共通の契機として示されている。そして、そのことと関連して、「幼児期」の重要性についてエリクソンは次のように述べている。

人間には長くて重要な幼児期があるが、家族や共同体に連なる子孫のそれぞれの幼児期に、人間だけが気遣い（solicitude)を押し広げることができ、またそうしなければならない。子どもの具体的な経験に意味を与え、言葉を教えるときには文字通りの意味を超えた論理を伝え、自分の世界像と仲間の様式の輪郭をだんだんと明確に示していくことで、人間は子どもに希望、意志、目的、適格の萌芽を伝達するのである(Erikson, E.H. 1964, p.130)。

人間の幼児期が長いことは、一般的には、人間が教育されることを必要とする種であることの論拠となっている。しかしながら、ここでエリクソンが指摘するのは、それゆえ人間はまた、長い幼児期を生きる次世代を同様に長い間「教育する」種でもあるということだ(15)。そして、そうした成人の「気遣い」や「ケア」のなかに、成人の次世代の調和的傾

(15)こうした理由からエリクソンは後に、各段階の平均的な時間幅の違いを視覚的に表したジョアンによる織物によるエピジェネティック・チャート（図1-4）を自らの論文に掲載してもいる（Erikson, E.H.

向と失調的傾向との葛藤を、彼ら自身の「希望」、「意志」「目的」、「適格」などの「徳」を生み出す契機として支えてゆく力をエリクソンは見るのである。

このように「成人期」と「幼児期」は、２つの世代の歯車が噛み合う箇所であり、ジェネレイティヴィティは「相互性」の、すなわち世代サイクルの要として、改めてとらえ直されるのである。

このような「世代サイクル」の視座は、1968年の社会科学事典に掲載した項目 Life Cycle においてもさらに深化される。

> ジェネレイティヴィティの本質は、その弱さが、次世代の境界例的な症状において、我々がリストアップしてきた過度の疎外として見いだされるということにある（Erikson, E.H. 1968b, p.291）。

エリクソンは、これまで、心理社会的発達の失調傾向として、「基本的不信」、「恥・疑惑」、「罪悪感」、「劣等感」、「アイデンティティ拡散」、「孤独」、「停滞」、「絶望」などを列挙してきた。これらの項目については、エリクソンは別の箇所で「一生を通じて人を毒する底知れぬ深みの疎外感」（Erikson, E.H. 1969, p.34）であるとも言い表しているが、ここではそれらが極端なかたちで、「過度の疎外」として次世代の発達諸段階において「境界例的な症状」をもたらす危険性を示唆している。そして、こうした危険性は、先行世代のジェネレイティヴィティの「弱さ」から生じた結果として特徴づけられているのである。

これに対してエリクソンは、人をそのような疎外感から「常に一貫して守ってくれるもの」が「基本的信頼感」であるという。「基本的信頼感」は「乳児期」の調和的傾向であるが、エリクソンは、「自分はさ迷っていると感じるときには、それとなく何度も現れて、自らを取り戻させるもの」であるともいう（Erikson, E.H. 1969, p.34）。それは、成人の人生においてまずそうであってはじめて、次世代に伝達されるものだといえるだろう。

以上を考慮すれば、さしあたり次のように要約することができよう。すなわち、「基本的信頼感」は、「乳児期」以降の発達諸段階においてそのつどの課題を達成するための基盤として機能する。しかし、この「基本的信頼感」は、先行世代が自らの「乳児期」以降

1980b, p.212)。

の人生諸段階において獲得した「徳」を「成人期」においてジェネレイティヴィティとして再構成・統合し、次世代に示すことによって生み出されるのである。そしてさらに後続世代もまた、先行世代のジェネレイティヴィティによる導きによって「乳児期」に獲得した「基本的信頼感」を頼りにして、その後の人生諸段階における諸課題を達成していく。

これをエピジェネティック・チャートに関連づけてみよう。「成人期」の段にある横列の空白のうち、左端の空白について先ほども述べたように、「基本的信頼感」は、成人期において、人が世界や他者、とりわけ次世代の他者との出会うことを支え、あるいは妨げる要因となりうることを示すと考えられた。これは「基本的信頼感」が「成人期」にも影響を重要な意味をもつことを示すものである（図３のｃ）。

チャートに示したこのｃおよびｃ’は、それぞれの「徳」が、成人の「ケア」、ならびにジェネレイティヴィティを通じ、次世代の子ども時代のそれぞれの「徳」の萌芽となることを予示していると見ることもできる。すなわち、これらの「徳」が次世代に示されるとき、それは次世代の「希望」、「意志」、「目的」、「適格」、「誠実」、「愛」、「統合」のモデルとなると考えることができる。二つの世代におけるそれぞれの「徳」は、相互形成的に、「歯車のように噛み合っている」のであり、先行世代との関係において強められたり、弱められたり、特別な形を与えられたりすると考えられるのである。

ところで、エリクソンは世代サイクルの視座の導入に先駆けて、1959年には心理社会的発達段階を「ライフサイクル」と呼んでいる（Erikson, E. H. 1959 *Identity and the Life Cycle*）。ここでいう「ライフサイクル」というのは、心理社会的葛藤と危機のエピジェネシスというパターンがそれぞれの人生において周期的に繰り返されるという意味として、まずは理解できる。しかしながらエリクソンのライフサイクル論は、たとえば人生を四季にたとえるレヴィンソンのライフサイクル論などとは異なり、個人の人生のなかに経験の反復と再構成の契機が組み込まれている点に特徴があるといえよう(16)。次世代の「徳」を

---

(16)田中毎実 (2003)によれば、ライフサイクルという構図は、エリクソンに固有のものではない。ライフサイクルという人生イメージについて、田中は、「今日のライフサイクル論は、1930年代に西欧の周辺部で出現し体系化された」と述べている。「人生の個的自己完結性と類的連続性とを丸ごと把握するのにもっとも有効な概念」であるサイクルとしての人生のイメージ仕方は、時間性の乖離を生きる現代人の課題であり、希求されるフィクションであると田中は指摘する。

私たちの時間感覚においては、生物学的で土着的な循環する時間と、産業社会に固有の時計で測られる均質で直線的な時間と、高度産業社会で多くの人々がもつ実存的で一回的

育もうとするとき、成人は「基本的信頼感」、「自律性」、「自主性」、「勤勉性」、「アイデンティティ」、「親密性」の発達を、以前に自分が経験したときとは異なる形で経験するということ、またそれは同時に、心理社会的失調傾向を示す各段階の項目、すなわち「基本的不信」、「恥・疑惑」、「罪悪感」、「劣等感」、「アイデンティティ拡散」、「孤独」、「停滞」、「絶望」などを再体験、追体験するということでもある。エリクソンのライフサイクル論は、世代サイクルの視点導入に伴って、このような経験の反復と再構成を中核とする「育てられる存在」から「育てる存在」への転回を意味するものとなったと考えられよう。

なお、エピジェネティック・チャートの＜epi-＞が上に徐々に積み上げるという意味を有するため、エリクソンのライフサイクル論は、生涯発達を垂直的な進行・増加としてとらえる理論であると理解されることが多い。エリクソン自身、このエピジェネティック・チャートが「サイクル」を視覚的に表すものではないとして、限界を認めてもいる(Erikson, E. H. 1980b, p. 215)。しかし、以上の考察によって、心理社会的発達段階を「成人期」のジェネレイティヴィティを要として読み解くことで、異世代間の相互関係の観点から人生を「サイクル」として読み解く可能性が明らかになっただろう。

＜組織を生み出し駆動する力ー社会進化論的傾向＞

次に、この節の冒頭で示唆しておいた第三の点、すなわち組織を生み出すという視点の展開について見てみよう。

Childhood and Society の初版（1950）では、成人期の調和的傾向を示す用語として、生産性や創造性はふさわしくないとして退けられていた。しかし、1963 年の改訂版では、

で質的な生きられる時間の三者が共在しており、集団の内部でも個人の内部でもこの三つの時間性が激しく相克し対立している。・・・(中略)・・・今日のライフサイクル論は、この相克がもっとも露骨に現れた西欧の周辺部において、問題を先取りする仕方で出現した。おそらくこの周辺地域では、なお力強く残存する伝統的土着的な時間イメージと、新たに出現しつつある産業社会の時間イメージとの乖離が、息苦しいまでに極限化していたのであろう。(中略) いずれにしても時間性の過酷な乖離を生きることへの実存的・理論的な応答が、彼らのライフサイクル論である（田中毎実 2003, pp249-250)。

実際、エリクソン 19930 年代オーストリアにいて、ライフサイクル論者の先駆け的存在であるショーロッテ・ビューラーの講義を受けてもいた（Friedman,1999)。

「ジェネレイティヴィティ概念は、生産性や創造性といったよりポピュラーな類義語で置き換えることはできないが、実際、それらを含意している」（Erikson, E. H. 1963, p. 267）と述べられている。この変化については、上述のようにジェネレイティヴィティ概念の脱性化が明瞭に打ち出されることに伴い、むしろその範疇に「生産性」、「創造性」を含めて考えるということが改めて強調されたと考えてよいだろう。

この点については、1968 年の事典項目 Life Cycle においてより明確化されて次のように述べられる。

> ジェネレイティヴィティは、生殖性(procreativity)に加えて、生産性や創造性を含む。つまり、これは本質的に心理社会的なものである(Erikson, E. H. 1968b, p. 291)。

ここで初めて、「生殖性(procreativity)」というより意味を限定した用語が用いられている。すなわち、ジェネレイティヴィティは以前には心理性的発達の文脈から「生殖」を基盤とする概念として、またそれとの関連で「自分を失う能力」を含意する概念として示されていたが、ここにおいて明確に「生殖性」、「生産性」、「創造性」の三つの側面をもち、それらを包含する心理社会的な概念として位置づけられるのである。ジェネレイティヴィティは、生殖か創造かといった区別を超えて以下のように示される。

> ジェネレイティヴィティは、それ自体で、人間の組織における駆動力(driving power)である（Erikson, E. H. 1968b, p. 291）。

「生殖性」、「生産性」、「創造性」の三つの側面をもつジェネレイティヴィティは、それ自体が「組織の駆動力」であるという。つまり、ジェネレイティヴィティとは生殖、生産、創造といった具体的な一つ一つの生成を支えに、ある組織を生成し、まとめ上げていくこととして定義されているのである。その際、「人間の組織」は、夫婦、家族、地域共同体、国家、社会、など様々なレベルで考えることができるが、どのようなものであれ「駆動力」がなければ組織として存続しない。ジェネレイティヴィティは、そうした「組織」を支えてゆく力、つまり、生殖、生産、創造などの「生み出すこと」を通じ、社会を形成してゆくという人間の基本的傾向を表すものとしてとらえられるようになっている。

そして、1963 年の *Childhood and Society* の改訂版の冒頭でも示唆されていたように、

単なる生殖を超えて組織などをも含めて一般に「生み出すこと」というジェネレイティヴィティ概念の内容的展開には、社会進化論的意味合いが伴っている。

エリクソンは、*Childhood and Society* の改訂版（1963）での「成人期」に関する記述の冒頭で、ジェネレイティヴィティが人間を「教える種」にしたと述べ、さらにジェネレイティヴィティ概念を、次のように社会進化論的方向に展開する。

> 人類が教える種である限り＜ケア＞は心理社会的進化に必須の特質である（Erikson, E.H. 1964, p.130）。

> 人は教えることを必要とする。それは、教えられることが必要な者のためだけではなく、また彼自身の「アイデンティティ」を満足させるためだけでもない。事実は語られることによって、論理は証明されることによって、真理は明らかにされることによって、生き続けるからである（Erikson, E.H. 1964, p.131）。

なぜ、人は教えることが必要とするのか。それを必要としているものが目の前におり、そうすることが自分の「アイデンティティ」に適うからという以上に、人から人へと事実が語りなおされ、論理が証明しなおされ、真実が明らかにしなおされるそのサイクルのなかで、事実や論理や真理がはじめて存続し続けるからである。事実や論理、真実そのものに普遍的な価値があるのではない。これらは、ジェネレイティヴィティにおいて、すなわち、先行世代が後続世代に対して、を語りなおし、証明しなおし、明らかにしなおしてくプロセスのなかではじめて価値をもち、ひいては心理社会的進化を支えるものとなるのである。

すでに述べたように、1960年代には、先行世代が「成人期」に至るまでに積み上げてきた様々の「徳」を、「成人期」において再構成し統合して次世代に示すという「世代サイクル」の構造が明示される。しかしここではさらに、「事実」、「論理」、「真理」の再構成について、知識論的ないし学問論的視座とでも呼べるようなものが新たに加えられたと見ることができる。また、社会の進化が、とくに知識論的、学問論的視座と結びつけられている点では、プラグマティズム的学問論に通じるところもあると言えよう。

以上、第二節の考察においては、1950年代においてフロイトの心理性的理論を継承しつ

つ、その枠組みを脱していく過程においてジェネレイティヴィティ概念が構想されたこと、さらに1960年代に入って、「世代サイクル」ないし「ライフサイクル」の視座が導入されたことに伴い、ジェネレイティヴィティ概念の意味内容が明瞭化し深化していったことが明らかになった。この「世代サイクル」ないし「ライフサイクル」のパースペクティヴのもとでは、ジェネレイティヴィティ概念は、異世代関係の「相互性」、相互形成的関係の要として位置づけられた。さらに、そうしたエリクソンの理論展開のなかに、社会進化論的あるいはプラグマティズム的と呼べるような傾向が見られることも明らかになった。

第三節　儀式—世代サイクルをつなぐ媒体（1960年代）

1960年代のエリクソンの考察の展開には、これまでに論じてきた流れとは異質な、もう一つの系の展開が見られる。それは、世代サイクル、すなわち二つの世代の間の相互形成的関係を支え、あるいは、阻止するという社会や組織の働きについての議論である。つまり、一方で「世代サイクル」は、例えば親子関係に代表されるように、二つの世代が直接向き合い互いに形成し合う関係として描き出されている。しかし、他方では、1960年代の著作のなかには、両者の関係に介在し、二つの世代をつなぎ相互関係を促したり阻止したりする媒体、すなわち社会や組織のなかで形成され伝承される儀式化された行動様式に関する考察も見られるのである。以下では、この、もう一つの系の展開に焦点を当てて論じることにする。

＜儀式化＞

ジェネレイティヴィティにおける二世代関係に限らず、社会や組織が発達諸段階における葛藤一般の克服を助けるということについては、すでに1964年の著作 *Insight and Responsibility*（邦訳『洞察と責任』1971）のなかでも触れられている。

> 我々のとるいろいろな社会的態度は、社会制度や伝統によって統合性と永続性が与えられるが、それらの社会的態度はこのシステムの中に流れ込み、そして、このシス

テムの中から出現するものなのである。このシステムは、「基本的な徳（virtue)」と「組織された共同体の本質」との最も直接的な結びつきである(Erikson, E.H. 1964, p.152）。

こうした洞察は、その後「儀式化(ritualization)」という概念によって明瞭に定義されることになる。1965年、ロンドン王立協会で開催された「動物と人間における行動の儀式化」というシンポジウムにおいて、エリクソンは「人間における儀式化の個体発生」と題する報告を行い、その翌年、論文として公表している。

このシンポジウムにはJ．ハックスレイ（Julian Huxley1887-1983）を中心にK．ローレンツ（Konrad Lorenz 1903-1989）やR.D.レイン（Laing, R.D. 1927-1987）、そしてエリクソンなどが参加したが、そこでエリクソンは比較行動学の概念である「儀式化（ritualization)」を、彼自身が考察してきた人間の相互関係の定型化の構造を解明する概念として提示した(17)。エリクソンは、そこで、人間における「儀式化」を、強迫神経症等の病理ではなく、「高度に適応的で重要なメッセージのやりとりによって創造さる結束」（Erikson, E.H. 1966, p.576）を示す概念として独自に定義している。彼はそのような「儀式化」の機能にまず、「擬似種化(pseudo-speciation)」という機能を指摘する。

> 動物の儀式化のほとんどが同じ種の中での現象であるのに対して、人間は擬似種として進化してきた（どのような進化と適応的原因があったにしろ）、ということを強調せねばならない。擬似種とは、たとえば部族、氏族などを意味している。超自然的意志によってはじめから特別に創造された種であるかのように振舞うこと、自分たちの地理的経済的事実を天地創造に喩えてみたり、神によってつくられた国であるといってみたり、人間像を世界と重ね合わせてみたりすることは、擬似種によって可能になることである（Erikson, E.H. 1966, p.580）

人類としてではなく、部族や国家、文化共同体など、より下位概念としての擬似種として人間は進化してきたのだと、エリクソンはいう。そして、こうした擬似種の感覚は、心理社会的アイデンティティ形成にとっては、不可欠なものであると指摘する。

---

(17) シンポジウム講演原稿は、Erikson, E.H. 1987 に収められている。以下、Erikson,E.H.1966 と表記する。

こうしたことによって、<アイデンティティという特殊な感覚>が発達する。そのことによって<人間>としてのアイデンティティが保持され、他の種は例外的で、実際、唯一の「真の」人間的努力に反目しているではないかというような偏見によって、他の擬似種に敵対するからである（Erikson, E.H. 1966, p.580）。

このような「擬似種」を生み出す働きをもつのが「儀式」であるとされる。「儀式」を通じた集団アイデンティティの形成、それをエリクソンは「擬似種化」と呼ぶ。それは、一面では偏見や狭量さを生み出すにもかかわらず、それと同時に、人間に集団アイデンティティ感覚の発達を促してきたというのである。

さらにエリクソンは、そうした伝統的儀式化の偏見や狭量さを超えて、人類という普遍種のアイデンティティ形成を促すような「新しい世界観を伴う儀式化」（Erikson, E.H. 1966, p.590）の創造に期待したいと私見を述べながら、このような儀式化の機能について考察を展開していく。

儀式化は、実際、創造的形式化を意味しうるでしょうか？つまり、衝動的な過剰さと極度の強迫的自己抑制の両者を、そして社会的アノミーと道徳的強制の両者を避けうるものでしょうか（Erikson, E.H. 1966, pp.580-581）。

ここに見られるように、エリクソンは「儀式化」のなかに、偏狭な「擬似種化」を超える可能性、人間の衝動と抑制との、そしてアノミー（無秩序）と強制との、どちらにも傾かないバランスを保つ「創造的形式化」の可能性を見出そうとしている。そして、もしそれが可能であるとすれば、「儀式化」には次のような機能があるはずだとして、以下の4点を挙げる。

（1）相互性の様式に本能的エネルギー（instinctual energy）を結びつける。たとえば母親は、本能的に母親であったとしても、さらに「ある特別な種の母」になることと「ある特別な方法」を必要とし、無意識にでも彼女が好ましく思わない方法を嫌悪し避けるが、そのことに不安を感じることがない。

（2）母親が「彼女自身」であると同時に集団のエトスを表現しているとき、儀式化は、

彼女を本能的な過剰さや気ままから遠ざけ、無限の小さな決断を統合的に行う負荷から解放している。

（3）子どもと大人に世代から世代へと継承される相互的な同一化の基盤を形成する。母と子は、お互いに善意の「他者」を体験する。

（4）精神分析が「強い自我」と呼ぶところの内的安定を支える心理社会的基盤を形成する(Erikson, E.H. 1966, p.581)。

ここに挙げられている「儀式化」の機能は、心理社会的発達の各段階において相互性を支える重要な要因として（1、2）、また、相互性の結果生み出される心理社会的基盤として（3、4）考えられていると見ることができる。ここでエリクソンは、「儀式化」についてとりわけ母子の相互性という独自の見地からその機能を考察し、この概念を再定義しているといえよう。さらにエリクソンは、彼の発達段階理論における「乳児期」から「青年期」までの特徴と関連させて、各発達段階における「儀式化」の特徴とそれらがもつ各テーマを提示しているが、それらは以下のようにまとめることができる（Erikson, E.H. 1966, p.576-590)。

「乳児期」とヌミノース　：「認知の相互性」
「幼児期初期」と分別：「善悪の区別」
「遊戯期」と演技　：「演劇的精緻化」
「学童期」と形式　：「遂行の規則」
「青年期」とイデオロギー　：「信念の確立」
「成人期」と世代継承　：「世代継承的裁可」

また、こうした心理社会的各発達段階における「儀式化」の特徴を、エリクソンは「試論的なものであるが」と断った上で、図4のようにエピジェネティック・チャートの形式で表現してもいる(Erikson, E.H. 1966, p.591. Table 1)。

＜成人期の儀式＞

このような定式化において、「成人期」には特別な意味が付与されている。エリクソンは、「儀式化」と成人との特別な関係について、次のように明瞭に述べている。

儀式的な目的に自己を捧げることができ、そして、自分の子どもの生活のなかで自らが日常的な儀式施行者（ritualizer）となって将来を視覚化しうるという意味で、そのときはじめて人間は成人になったということができる（Erikson, E.H. 1966, p.558）。

すなわち、成人は儀式を施行する者（ritualizer）として位置づけられ、また儀式を施行することによってはじめて成人として形成されるということである。ここには二つの世代の間での「相互性」の関係を再び見て取ることができる。しかしエリクソンは、それと同時に成人を次のように特徴づけてもいる。

両親は、子どもの生活における最初の儀式執行者である。またそれと同時に、彼らは、彼ら自身の幼児期の儀式化の反復と再確証が見出される制度化された儀式への参加者である。成人の儀式は、儀式化の個体発性にどのように結びついているのだろうか。この点について私は、成人が儀式化を確立するのに必要な裁可を、儀式が再強化すると考える（Erikson, E.H. 1966, p.589）。

ここで、エリクソンは、成人は儀式施行者であると同時に、自らの幼児期に体験し内面化した「制度化された儀式への参加者」であると見ている。つまり、「儀式施行者」としての成人は、新しい儀式を自由に施行する存在というよりも、自らが過去に体験した儀式の反復と再確証を、次世代との「相互性」において再「儀式化」する存在だということである。それゆえ、上の引用中に見られるように、エリクソンは、成人が「儀式施行者」であることもまた、儀式そのものによって裁可される必要があると見ているのである。しかしエリクソンは、一成人を「儀式施行者」として裁可する存在として、その成人自身の親を想定するのみならず、成人個人を超越した存在をも想定している。

過去に存在した個人の祖先、文化的英雄、あるいは魂、神、王、指導者などは、いずれにしても成人時代の儀式に必要とされるものである。成人には成熟した必要性というものがある。それは、儀式施行者としての役割を定期的に強化される必要性のことである。そのことによってはじめて、多少なりとも、彼らは子どもたちの精神にお

いてヌミノース的モデルとなり、伝統的理想の判事や伝達者として行為することができるのだ（Erikson, E.H. 1966, p.590）。

このように、エリクソンによれば、成人は、自らの親のみならず、儀式を施行するために第三者（超越者）からも「裁可」というかたちで儀式化された存在である。このように、成人は「儀式施行者」としての特徴と、自らが儀式化され裁可される者であるという２つの特徴を備えているがゆえに、成人によって施行される儀式の全体的特徴は他の段階よりも複雑なものとなっている。エリクソンは、「成人儀式の要素」として次のような特徴を挙げている(Erikson, E.H. 1966, p.581)。

「成人儀式の要素」：ヌミノース的、分別的、演劇的、形式的、イデオロギー的、
世代継承的裁可

エリクソンがここに示している「ヌミノース的、分別的、演劇的、形式的、イデオロギー的」という５つの要素は、次世代が体得する「儀式化」の特徴でもある。そして、６番目の「世代継承的裁可」は、そうした「儀式施行者」として裁可されるという「成人期」特有の儀式化のテーマである。

＜アンビヴァレンスの克服＞

エリクソンは、この論文の最後に、動物とは異なる人間の「儀式化」の特徴として、次のような点を挙げている。

人間の儀式化は＜情動的アンビヴァレンス＞の克服にも役立っているに違いないということを、もう一度強調しておこう。曖昧さとアンビヴァレンスは、もちろん、両者とも、生存のために調停されなければならない＜矛盾する情動＞に関係する。動物の本能的形式による華々しい挨拶は攻撃的脅威の要素を吸収してしまうが、人間においては、（たとえば、貪欲な情動の受動者である子どもが、「食べちゃうぞ」というフレーズのもつ意味をたいてい理解できるように）、アンビヴァレンスは＜結合的な＞振る舞いのなかに残存しているのである(Erikson, E.H. 1966, p.593)。

ここで、エリクソンは成人が子どもに向けるアンビヴァレントな情動が、儀式化によって「克服」されると指摘している。エリクソンは、精神分析学的見地から、成人から子どもに向けられる愛情はしばしば支配的で専横的でもあり、子どもへの侵入を企図するものだと考えていた（Erikson, E.H. 1963, Chapter 11）。上の引用箇所にも見られるように、エリクソンは、子どもは成人からそうしたアンビヴァレントな情動を受け取ることを日常的に経験していると見ている。それゆえに、エリクソンは、たとえば「食べちゃうぞ」という儀式化されたフレーズに愛情と専横というアンビヴァレントな情動がこめられていることを、子どもはたいてい理解していると述べるのである。このフレーズを親から聞かされ、笑いながら大げさに逃げ叫ぶ子どもの姿は容易に想像できる。仮にこのメッセージを文字通り受け取ってしまうときには、子どもは恐怖のあまり泣き出してしまうだろう。エリクソンは、愛情と専横というようなアンビヴァレントな情動がこうした儀式化において表現されることにこそ、情動の「カタルシス」と「解放」の働きがあると述べている(Erikson, E.H. 1966, p.593)。

以上の議論をまとめるならば、「儀式化」概念の独自の定義づけによって、エリクソンは自らの心理社会的発達段階理論とライフサイクル論の骨格である「相互性」を、「儀式」という社会様式（モード)によって補強したと言えるだろう。こうした議論において、「相互性」のなかで次世代を教え導き組織を動かしていく存在としての成人は、一方では「儀式施行者」として改めて位置づけられるとともに、他方ではそれと同時に成人自らが儀式によって儀式化され、裁可される存在であるということが明確化されている。また、成人と子どもの間に生起するアンビヴァレンスから子どもを「解放」し「浄化」する機能もこうした「儀式化」に見出されるのである。

＜「ケア」から「儀式化」へ＞

ところで、こうした議論は、次の２点において、エリクソンのジェネレイティヴィティ理解に関する変化を示すものである。第一に、次世代の人間や社会を生み出す存在としての成人は、同時に、生み出された存在でもあるという、そのパースペクティヴの広がりであり、第二に、「儀式化」が成人と子どもの間のアンビヴァレンスの克服を助けるという新しい見解である。

とりわけ第二の点であるアンビヴァレンスの克服については、重要な力点の変化を示していると思われるので、以下でさらに詳しく考察してみたい。

エリクソンは *Childhood and Society* (1950)において、すでに親子関係に内在する暴力性について述べていた。すなわち、その関係は本質的に「非対等」であるため、成人は常に子どもに対する「搾取可能性 exploitivity」 (Erikson, E.H. 1950, p.377) を有しているというのである。そして、1963年の *Childhood and Society* 改訂版の最終章「不安を超えて」では、精神分析学こそ、こうした関係から生じる不安や緊張、偏見などから人間を解放し、ものごとの判断力や「思慮分別(judiciousness)」を身に着ける方途を指し示すものあるとされていた (Erikson, E.H. 1963, pp.403-424) 。成人が自分のなかにある不安と向き合い、反省的な立場で自己を再構成することで、大人と子どもの関係に必然的に生ずる葛藤やアンビヴァレンスや暴力性は、「思慮分別」へと変化するとエリクソンは考えていたのである。さらに、エリクソンは、1964年の著作 *Insight and Responsibility* のなかでは、後続世代との出会いにおける偶然性や曖昧さと、それに対して負わねばならない義務との間に生じるアンビヴァレンスを受容し、克服していく力を「ケア」のなかに見ていた。すなわち、「ジェネレイティヴィティ 対 停滞」の葛藤と危機を超えて生じる「徳」としての「ケア」である。ここまでの論議では、エリクソンは、アンビヴァレンスの克服を、たとえ精神分析学によって助けられることがあるにせよ、基本的には親の個人的な課題としてとらえていたのである。

それに対して、65年の「儀式化」の概念は、エリクソンがそうしたアンビヴァレンスの克服を、成人個人の主体の責任ではなく、儀式という文化的・社会的要素の機能に求めていることを示している。換言すれば、エリクソンは、ここではその責任を成人個人に負わすような立論を改め、むしろこの責任の遂行を支えるものとしての「儀式化」に注目しているといえるだろう。

＜二つの関係発達論＞

こうしたエリクソンの力点の変化は、発達理論の構造を理解する上で、重要なポイントとなるものである。この点については、「関係発達論」の構築を考えてきた鯨岡 峻 (1999) によってすでに指摘されている。鯨岡によれば、発達理論に関係論的視点を取り込む場合、関係性に必然的に生じる「両義性」 (アンビヴァレンス) をめぐって、我々は社会的、文化的、歴史的な制約について一つの選択をしなければならないという (鯨岡峻 1999、219頁) 。つまり、人間の発達において社会的、文化的、歴史的要素を、「本質的な要因として取り上げ、理論に組み込む」か、「副次的な要因とみなして捨象してかかるか」という

選択である。鯨岡は、とりわけ関係性のアンビヴァレンスは、個人の主体的努力において克服するには非常に困難な問題であるとして、自らの関係発達論的視点を、前者の立場に位置づけて関係発達論を構築している。それは、たとえば母子関係の発達を次のような視点でとらえることを意味している。

> たとえば、現在の母親たちの抱える欲望や願望は、それそのものとしては当該個人に帰属されるもののように見えながら、むしろ個人をはみ出して、今日の社会的文化的な枠組み、つまり社会通念や常識に支配され、またその社会通念や常識を支えるものとなっている。一人の大人のもつ主観性と共同主観性（社会通念や常識）との相互浸透的な関係に留意すれば、社会文化的な要因は、養育者の乳児への具体的な働き掛けをその大枠で規定しているとさえ言い得る（鯨岡峻 1999, p. 219）。

この鯨岡の言明は、エリクソンが「擬似種」に言及しながら「母親は本能的にマザリング感覚を付与され、母親であることに本能的満足を求めえたとしても、さらに彼女は、＜特殊な仕方＞で＜特殊な種族の母親になること＞を必要とする」（Erikson, E.H. 1966, p. 581）と述べていることと、表現は異なっても同じ事態を指している。つまり、鯨岡の整理によれば、エリクソンもまた前者の立場、社会的、文化的、歴史的な制約を「本質的な要因として取り上げ、理論に組み込む」アプローチをとっていたといえよう。もしくは、エリクソンはさらに積極的に、社会的、文化的、歴史的な制約によって支えられた「特殊な種」としてのみ心理社会的アイデンティティが育まれていくものであることを主張していたと言ってもよいのかもしれない。

日本におけるエリクソン研究のなかには、エリクソンのライフサイクル論の貢献を、人間の生涯発達に関係論的視点、とりわけ異世代関係を取り入れたことにある、と指摘するものがいくつか見られる（Yamada, Y. 2004、田中毎実 2003、岡本祐子 2002 など）。人間の発達を個人のものとしてとらえる視座に比べ、関係性の視点、世代サイクルの視点は、発達や成熟の様相を極めて複雑かつ豊かなものとして描き出すものである。しかしながら、こうした解釈はエリクソンの理論における「儀式化」概念などの社会的、文化的、歴史的要因の重要性を見過ごし、彼の理論を親子関係論のような個人と個人の関係性の枠組みに押し込めてしまうことにもなりかねない。

エリクソンのライフサイクル論を異世代関係論としてのみとらえるならば、後者の立場、

人間の発達において社会的、文化的、歴史的要素を、関係発達にとって「副次的」な、背景にある文脈として扱うアプローチをとることになる。そうしたアプローチにおいては、関係性のアンビヴァレンスの解決を成人個人の責任や成熟の問題に帰し、また他方、その犠牲者として子どもを位置づけてしまう発達理論を構築することになるだろう。

たしかにエリクソンは、*Childhood and Society* (1950, 1963)において、精神分析学的立場から、文化を超越した発達構造を明示する姿勢も見せてはいた。しかしながら、同書に収められている彼の臨床観察には、社会的、文化的、歴史的文脈を人間の発達に本質的に関わるものとして見る「ものの見方」が明示されている。たとえば、乳児の発達における社会様式（モード）と身体諸器官の発達との綿密な関連性の考察などである。そして、本章で見てきた「儀式化」論においてもまた、社会的、文化的、歴史的要素が、彼の発達論のなかで重要な位置にあるということが改めて明示されたといえよう。

＜優生学的展開のアイロニー＞

ところで、*Insight and Responsibility* (1964；邦訳『洞察と責任』1971) では、ジェネレイティヴィティのなかのとくに生殖に関して、次のような新しい見解も示されている。

> 豊かな生殖能力を制限しなければならない現代人は、生殖にともなう問題が、受胎の意識的な選択を可能にする技術の力によって解決したと考えるようになっている。そのような選択をする場合、人間には準備ができていなければならない。もし、これまでの極めて「安全な」愛の生活が、単に子どもを生むことを避け、ジェネレイティヴィティを拒否することになるなら、ちょうど性欲自体の否定がそうであったのと同様に極度の内的緊張の原因になりえる。この場合、しばしば「創造の火」を弄しているという特別の罪悪感が生じる。したがって生殖性(procreation) の制御は、人間の心理性的欲求の知識に照らして導かれるだけでなく、計画的にこの世に生みだされた人間全てに向けられた生成的責任(generative responsibility)という普遍的な感覚にたって導かれることが必須である。このことは、われわれが描いているような発達の機会を（避妊具と食物の問題を超えて）共同で、ひとりひとりの子どもに保証することを含んでいる (Erikson, E. H. 1964, p. 132)。

人間は自らの力で「産児制限 (birth control)」を可能にし、今や子どもは、自然に授

かるものから意識的につくるものに変わっている。エリクソンは、そこにある抑圧を指摘する。フロイトは「性」の抑圧を解放したが、今日ではそれに代わって「生殖」の抑圧があるというのである。エリクソンによれば、この抑圧によって「極度の内的緊張」がもたらされないためには、現代人に「準備」がなければならないという。準備とは、我が子に限らず、「計画的に生みだされた子ども達への」普遍的なジェネレイティヴィティの意識をもつことである。それによって、現代人は「生殖性（procreation）」の抑圧を昇華させうるとエリクソンは考えている。

現代人における「生殖性」の抑圧は、技術主義、効率主義が邁進する20世紀のアメリカ社会における精神分析家の使命として、エリクソンがその後20年にわたって主張することになる見解である。「生殖性」の抑圧の真偽の検証はさておき(18)、ここでは、産児制限を認め、この抑圧の合理的な解決を図るために彼が主張する、「選ばれた命に最良の環境を提供する」という優生学的な発想に注目したい。

生殖と産児制限に関するこのようなエリクソンの見解には、特定の社会にとって適応的でない時期に生じた命、あるいは適応的でない性質をもった命を選別するという社会様式（モード）に対する現状肯定的な態度が見られる。現実には、全ての人間が計画的にこの世に産み落とされるのではなく、また、望まれぬ出産とそれにともなう育児上の問題は産児制限の技術だけでは解決しないと思われる。しかし、そうしたことへの配慮はエリクソンの著述には見られない。付言するなら、近年明らかにされた事実によればエリクソンは障害をもって生まれた４番目の子どもを、誕生後すぐに施設に入れて世間に公表せず、ほとんど養育を拒否していたという（Friedman, L. J. 1999, pp. 208-215）。そうしたことも、このような見解と関連しているのかもしれない。

ジェネレイティヴィティを「計画的にこの世に生み出されたものに対する普遍的ジェネレイティヴィティ」と合理化する素朴な優生学的、進歩主義的発想には、大人優位、そして健常者優位の近代的志向を読みとることもできるだろう。このように計画性に富むジェ

---

(18) エリクソンは一貫して生殖性の抑圧と昇華というこの主張を繰り返す。このことによって彼に対しては保守的であるとの批判が寄せられた。しかし、実際に抑圧の有無を調べる調査が行われたことに対して、エリクソンはインタヴュー論文の中で論駁を加えている。それによると、彼は精神分析家として、文化の変化に伴い、現代人の無意識の中にあると見て取った抑圧を語ったのであって、その抑圧を意識して感じている人がどれくらいいるかという調査は意味がないということ、そしてまた、こうした問題を把握しておくことは臨床家の努めであって、一般的な啓蒙をうながすものではないと主張している（Erikson, E.H. 1981, p.263）。

ネレイティヴィティを、エリクソンは「人間を教え育てる存在にまでしてきた進化的発達」(Erikson, E.H. 1963, p.266)を約束するものとしてとらえたのであった。彼は、「人類の永続は、あらゆる種類の思想家と労働者のジェネレイティヴな賢明さにかかっている」(Erikson, E.H. 1964, p.131) とも述べているが、この点で彼はジェネレイティヴィティに関して楽観的な進歩主義者である。エリクソンは、出会いにおいて「自分を失う能力」によって生み出すことがジェネレイティヴィティであると主張してきたが、ここでは、出会いの本質的要素である「偶然性」が排除されていることに、彼自身が無自覚であるといえるだろう。

また、「儀式化」に関する議論において懸念を示した「擬似種化」が孕む府の側面を、エリクソン自らが優生学的志向という形で無自覚のまま肯定してしまっているのは皮肉である。

以上、第三節では、「儀式化」の議論を中心に、エリクソンの理論が社会的、文化的、歴史的な文脈としての社会様式(モード)を重視する立場にあったことを明らかにした。成人は「儀式施行者」であると同時に「儀式施行者」として「儀式化」された存在でもあり、ジェネレイティヴィティやケアに関して、「儀式化」は世代関係を支えるもの、とりわけ関係性のアンビヴァレンスの克服を支えるものとして示されていた。しかし同時にこうした力点の推移のなかで、ジェネレイティヴィティがもつ負の側面も——エリクソン自身によって明瞭に自覚されていたとはいえないが——暗示されていたのである。

第三章では、1950 年から 60 年代に至るまでの、ジェネレイティヴィティ概念の形成過程を見てきた。基本的にエリクソンの研究を時系列にそって考察した３つの系は、それぞれ、フロイトの理論を脱性化する方向で「親密性」との関連性が明確化されていく第一の系 (50 年代) 、ライフサイクル論の枠組みのなかで異世代間の「相互性」と「徳」の形成の関係が理論化されていく第二の系 (60 年代)、そして「儀式化」概念が導入され、成人発達における社会様式 (モード) の重要性が再確認されることになる第三の系 (60 年代) として特徴づけることができる。それによって、単に時系列的な整理ということだけではなく、エリクソンの視点がジェネレイティヴィティに関して、個体発生的発達から関係発達へ、そして社会様式(モード)という新たな軸の設定というように変化し、それとともに概念内容が全体としてより多様かつ複雑になっていったことが明らかになったであろう。

第四章　ジェネレイティヴィティ概念の展開と錯綜－*Gandhi's Truth* (1969)

1960年代までのエリクソン理論におけるジェネレイティヴィティ概念の展開は、基本的にはこの概念内容の継続的な発展および深化として特徴づけることができるだろう。しかし、1969年の著作の *Gandhi's Truth* を境にしてそれまでの考察が錯綜しはじめる。そしてこうした傾向はやがて、1970年代および1980年代におけるジェネレイティヴィティ概念の内容的分裂へと展開していくのである。

第一節　儀式化概念の展開と創造的ジェネレイティヴィティ

エリクソンは、60年代、ハーヴァードに就任するとともに、世代サイクル、ライフサイクルという新しい視点による生涯発達段階論を提示したが、1962年にインドでもライフサイクルに関するセミナーを行った。そして、それが契機となり、インドを英国から「非暴力・不服従」によって独立させたモハンダス・ガンディー（Mohandas K Gandhi 1869-1948）についてのサイコヒストリー研究に着手した。エリクソンはこの研究のために何度かインドに滞在し、親近者にインタヴューを行い、またかなりの年数を執筆に費やして1969年にようやく *Gandhi's Truth*（1969；邦訳『ガンディーの真理』1973）を表した。

Gandhi's Truth では、インド独立の父であるマハトマ・ガンディーの中年期の一事件、アーメダバードのストライキが考察の中心になっている。そのため、本書はエリクソンの著作のなかで、青年期に焦点が当てられた *Young Man Luther*（1958；邦訳『青年ルター』1974, 2003）についで、成人期について書かれたサイコヒストリー研究として位置づけられている。*Gandhi's Truth* において、ジェネレイティヴィティに関するエリクソンの言明は、人生段階に関する西洋心理学とインド文化との比較文化的考察や、父子関係の精神分析学的解釈、ガンディーの実践した「サティアーグラハ（真理の力）」と精神分析との共通性に関する考察などの諸文脈に織り込まれており、錯綜した議論展開がなされている。そこで以下では、多くの諸要素が絡み合う *Gandhi's Truth* の全体像ではなく、むしろ、ジェネレイティヴィティに関連する箇所に焦点をあて、60年代までのエリクソンのジェネレイティヴィティを巡る考察が、このサイコヒストリー研究にどのように反映され、またどのような展開をたどっているのかということを明らかにしたい。

＜現実に奉仕すること＞

エリクソンは、ヒンドゥー文化における人生段階のうち「家長の段階（グラスタ）」と呼ばれる段階と、彼のライフサイクル論における「成人初期」および「成人期」とが対応しているとして、次のように述べている。

（ヒンドゥーの人生段階では）結婚して身を固めると、人は自分をアルタ、つまり、家族関係、共同体の権力、および生産といった＜現実＞に捧げることを奨励される。マヌ法典は、「妻と自分と子どもの三体の結合から成り立つものだけが完全である」と宣言する。この大部分は、我々の仮説———成人初期の様々な親密性は、数々のアイデンティティが融合したものである真の親密性の能力へと成熟する———に対応する。他方これ（真の親密性）は、「ケア」の感覚の基盤でもある。「ケア」は我々がジェネレイティヴィティと呼ぶものに栄冠を与え、生殖と生産によって結ばれるすべての人に力の源泉をあたえるのである（Erikson, E. H. 1969, p. 37-38）。

エリクソンは、1950 年代と 60 年代前半のジェネレイティヴィティに関する考察において「真の親密性」を重視したが、それはヒンドゥー文化の「家長の段階」においても結婚や家庭が重視されていることと対応していると、述べている。つまり、「成人初期」における「アイデンティティ」の融合としての「真の親密性」が、「成人期」のジェネレイティヴィティと「ケア」の基盤となるというプロセスが、ヒンドゥー文化においても確認され、強調されているのである。

そして、またエリクソンは、ヒンドゥーのアルタ、すなわち「自分を家族関係、共同体の権力、および生産といった＜現実＞に捧げること」が成人の特徴を示すものであるとして、注目する。

ライフサイクルに関するヒンドゥー的概念は、（中略）「世界の維持」に献身する一時期、つまり、エロティックで、生殖的で、そして共同体的なつながりをもっとも強烈に現実化しようとする一時期のために、人生の中年期をあてている（Erikson, E. H. 1969, p. 399）。

そして、「自らを現実に捧げること」、あるいは「世界の維持」ということを、ジェネレイティヴィティの考察に加えるのである。これについて、ガンディーの人生に即して、エリクソンが具体的に例示した箇所を見てみよう。エリクソンは、ガンディーが自らを「世話人（solitous）」と呼ぶこともあったと述べたうえで、「世話人」として精力的に活動するガンディーについて、次のように述べている。

> アーメダバードのストライキの時、ガンディーは四八歳で実際に中年のマハトマであった。彼はすぐ次の年にインドの父として台頭する。人生の中年期は、私がジェネレイティヴィティという術語で包括してきた普遍的な人間欲求と人間的強さの支配下にあるという事実は、このことからも強調されるものである（Erikson, E. H. 1969, p. 395）。

中年期のガンディーは精力的に周囲の「世話」――この語は、エリクソンの理論において「成人期」に獲得される「徳」が「ケア」であったこととも関連するだろう――をしてまわった。エリクソンはそれを、「普遍的な人間欲求と人間的強さ」であるジェネレイティヴィティの「支配」によるものと見なしている。ジェネレイティヴィティは、人間を突き動かす圧倒的な勢いをもつもの、「エロティック」で、「生殖的」で、「共同体のつながりを現実化する」欲求だというのである。

そして、精力的に現実に対応し、あるときは社会主義者、あるときは保守主義者、軍国主義者、平和主義者、またあるときは西洋的行動主義者、東洋的神秘家等々、様々に分裂した顔を見せるガンディーに、エリクソン次のように問う。

> 多様な形態をもつこの人には、はたしてしっかりした中心があったのだろうか？（Erikson, E. H. 1969, p. 396）(19)

先に述べたように、ジェネレイティヴィティの重要な構成要素の一つである「親密性」は、「出会いにおいて自分を失う能力」を前提とするものであった。そして、「自分を失

---

(19) 困難や責任をふりかけてくる現実に対応することで、ほとんど分裂しそうな多様な形態が一人の人間のうちに同居していた例として、エリクソンの研究からは他にジェファソン大統領を挙げることもできよう（Erikson 1974）。

う」と訳した<lose oneself>には、熟語として「我を忘れる」や「熱中する」という意味があることにもすでに触れた。ここで問われている「中心のなさ」は、この「自分を失うこと」の文脈においてとらえることができるだろう。その意味では、エリクソンはこれまでのジェネレイティヴィティに関する考察を、ガンディーの人生を考えるうえでもうまく引き継ぎ、発展させているといえる。ジェネレイティヴィティは、「真の親密性」を基盤とし、そして「自分を現実に捧げること」や「世界の維持」、つまり、自分にかまわず情熱的、献身的に自分の存在を必要とするもののために、現実生活において貢献することを意味するものとなったいえよう。

＜死を忘れること＞

エリクソンは、さらに、「自分を現実に捧げること」や「自分を失うこと」を、「死を忘れること」でもあるとして考察を展開していく。

> この時期においては、成人は、新しく生まれた個人と来るべき世代のために、死を忘れなければならない（Erikson, E.H. 1969, p.399）。

> 中年の男女は、彼ら自身と同じ種の生命を維持するために死を忘れる一時期を、本能と習慣によって＜割り当てられている＞（Erikson, E.H. 1969, p.400）。

「自分を失うこと」は「自己の存在を忘れること」でもあり、したがって「自らが存在しなくなること」すなわち「自らの死」を忘れることとしても表現することができる。生に関する観念と死に関する観念が一般に相補的な関係にあることからも、このことは理解されよう。この段階においては、自己の存在であれ、自己の死であれ、「自分自身」への関心が背後に退き、自らを必要とする者の方に関心が振り向けられるということである。エリクソンは、「世界の維持」を端的に示す挿話として、死期を目前にした老人でさえ、見舞いにきた家族に向かって「誰が店番をしているのだ？」と尋ねることがあるという話を挙げている（Erikson, E.H. 1982[1997], p.66）。これは、人生段階においては老年期にある人の話だが、「誰が店番をしているのだ？」という問いかけは、この老人の意識が、死を迎える自分自身よりも家族の日常生活の維持に向いていることを表しており、その点でむしろ成人性を示すものであるとエリクソンは位置づけている。このように、エリクソン

は「死」を忘れることや自分自身への関心を忘れることに成人期の特徴を見出し、次世代を生み育て、種を維持させていく駆動力であるジェネレイティヴィティと関連させていく。

エリクソンのこうした考察は、多くのジェネレイティヴィティ研究においては看過されているといえる。第二章の先行研究に関する箇所でも言及したように、アメリカにおいても日本においても、自己の死の自覚・受容とジェネレイティヴィティとの関連を問う研究が蓄積されてきている。第二章で取り挙げたコトレー（1987）、マクアダムス／オービン（1998）だけではなく、世代サイクルという大きな流れに自己を位置づけることが自分の人生の語り直しの契機であると主張する、やまだようこの一連の研究（やまだようこ 1999；Yamada, Y. 2004）、宗教心理学の観点から自己の象徴的な不死性と「自己超越」とを関連づける概念として言及するエモンズのパーソナリティ研究（Emmons, R. A. 1999）、プラトンの「象徴的不死性」の概念との比較検討を行っている哲学者ウェークフィールド（Wakefield, J. C. 2004）の論稿などを挙げることができる。

これらの考察においては、自分の死後に残るものとの自己とのつながりや、世代サイクルというパースペクティヴにおいて自己の死を自覚し受容するというパターンがほぼ共通している。換言すれば、永続的イメージが付与された世代サイクルという時間軸における自己の「アイデンティティ」探究の契機として、ジェネレイティヴィティが重要視されているといえよう。

なるほど、エリクソンは、ジェネレイティヴィティの前と後の段階では、逆に、死との関連性が極めて高くなると述べている。

> 人間の人生過程そのものは、次のことに運命づけられているようだ。人間は青年期において「在るべきか否か」 ”To be or not to be” （私はこれに「自分自身 ”himself” という語を付け加えて〔「自分自身になるべきか否か」と〕いいかえよう）の問題に直面する。その期間、人間は一種ロマンチックに、英雄的に、あるいは病的に死を意識する。そして、人間は老年期に至って死の必然性を痛烈に感じるのである（Erikson, E. H. 1969, p. 195）。

しかし、エリクソンはこれに続けて次のように明言している。

> しかし、この二つの期間にはさまれた人生の中間期にあっては、人間はヒンドゥー教

徒が家長と呼ぶところの、アイデンティティ、連帯性、能力、機会の相互的な統合に参与しなければならないのだ（Erikson, E.H. 1969, p.195）。

こうした時間軸のなかでとらえるなら、「青年期」の死の意識はジェネレイティヴィティの準備段階であり、ジェネレイティヴィティの段階は死すべき自分に向き合う「老年期」の準備段階として位置づけることができる。こうした意味ではたしかに「成人期」は間接的に死と関係している、と述べることもできるだろう。だが、いずれにせよ、死との関係を「成人期」において最も重要な特徴として挙げることはできないのである。

にもかかわらず、先に挙げた多くの研究において「成人期」と死とが結びつけられているのはなぜだろうか。この問題に関して興味深い指摘をしているのが、先にも挙げたコトレーの *Outliving the Self*(1984)である。彼は「生物学的ジェネレイティヴィティ」、「親的ジェネレイティヴィティ」、「技術的ジェネレイティヴィティ」、「文化的ジェネレイティヴィティ」の四つにジェネレイティヴィティを分類し、これに関する聞き取り調査を行っている。その結果、意味や価値の伝達を表す「文化的ジェネレイティヴィティ」をもたらす二つの契機の存在を明らかにしている。それは、成人として社会参加する自分を意識するとき――「アイデンティティ」の感覚と自文化の豊かさの確認、新しい自分史の形成をともなう時期――と、自分の死を意識するとき――自分の人生を肯定的に再構成するためには文化の力を、象徴的意味を必要とするが、そうすることによって文化そのものを「気遣う（care for）」時期――の二つの契機であるであるという（Kotre, J. 1984, p.259-260）。コトレーが指摘している２つの契機は、厳密にいえば「成人期」の前後に位置する「青年期」と「老年期」に関わるものである。もちろん、これらの発達段階の推移は、現代における「青年期の延長」と「活発な老年期」の出現によってより緩慢な特徴を備えるにいたったともいえるだろう。そう考えるならば、コトレーの調査結果において、「文化的ジェネレイティヴィティ」の契機として青年期的特徴と老年期的特徴が表れてくるということも理解できる。

さらに言えば、コトレーの研究は、あくまでも「臨床的」関心のもとで行われたものであるため、エリクソンの理論に忠実であることを必ずしも意味してはいない。むしろ、エリクソンの理論は、コトレーによってより現実に即したかたちで書き換えられたということになるだろう。マクアダムス／オービン（1998）、やまだようこ（1999, 2004）等に対しても、これと同様のことがあてはまる。彼らのいわゆる物語心理学におけるジェネレイテ

ィヴィティ概念への注目は、人間が来るべき現実としての自己の死を自覚するときに、世代サイクルのなかに自己を位置づける感覚、もしくはその契機を示すものとしてこの概念をとらえるものであり、ジェネレイティヴィティという概念に発展的展開をもたらすものとして特徴づけることができるだろう。

しかし、あくまでも研究関心をエリクソンの理論の解釈に限定するならば、しかも、*Gandhi's Truth* におけるエリクソン理論の新たな展開を考慮に入れるならば、ジェネレイティヴィティは、死の受容としてよりもむしろ、「死を忘れること」、「自己への関心を忘れること」、「現実に奉仕すること」として特徴づけられるのである。

＜儀式化概念の展開－文化的統合体との一体化＞

いずれにせよ、エリクソンは、*Gandhi's Truth* において、「自己や自己の死を忘れ」、「現実に奉仕すること」をジェネレイティヴィティの新たな特徴として挙げている。しかし、このような意味でのジェネレイティヴィティの実現は、成人が個人として達成すべき課題と見なされているわけではない。エリクソンは、すでに先に論じた「儀式化」の概念を文化という概念を用いて敷衍し、成人による課題の達成を助けるものとして、「文化的統合体」との一体化を取り上げるのである。まず、エリクソンは、「文化的統合体」との一体化の重要性について次のように述べている。

> 親密性とジェネレイティヴィティの段階において、人は否応なしにその時代の文化的、経済的統合体のある地位に、つまり適所に自らを位置づけることになる。そしてこれが（中略）彼の「リアリティ」、つまり、特定の文化的統合体における思想との一体化を規定する。「リアリティ」は、もちろん人間の最も強い幻想である。しかしそれは、彼がこの世に奉仕している間に、彼がとにかくそこに存在するという大きな謎に打ち勝つだけの重みをもったものでなければならない（Erikson, E.H. 1969, p.180）。

エリクソンはここで、人間のもつ「リアリティ」、すなわち現実感覚を「最も強い幻想」であると述べつつ、それが、存在の謎――たとえば、自分はなぜ存在しているのか、自分はいったい誰なのか、存在するということはどういうことなのか等――を凌駕する重みをもって人間に感じられることが必要であるとしている。そして、その重みが、「成人

期」において「この世界の現実に奉仕すること」を支えるというのである。ここでは、「文化的統合体」と成人個人との二重の関係が示唆されている。すなわち、成人は、一方で「文化的統合体」に「奉仕」というかたちで働きかけなければならないのだが、同時に、この「文化的統合体」によってはじめてこの「奉仕」を支える現実感覚を与えられるという関係である。「現実に奉仕すること」は、一方では組織を駆動すること、社会の維持や発展に貢献することという意味をもつが、他方でそれは、成人自らがそれによって心理社会的存在意味を与えられるということ、その共同体の構成員として内的に構造化されるということを意味するのである。

ここでは、先に明らかにした「儀式化」に見られる構造と同様の構造を確認することができる。実際エリクソンは、*Gandhi's Truth* のなかで「儀式」に、「かりそめのリアリティのなかで生きていかなければならない者を包み込み、彼らに平和を与えるもの」(Erikson, E.H. 1969, p.399-400) としての説明を付与している。成人は「儀式化」として特徴づけられるような「文化的統一体」すなわち「文化」の型に参加することで、自らを社会的存在として位置づける。そして、そのことを通じて、自らの存在の「リアリティ」を得てもいるということである。

＜儀式の創造者―宗教的現実家としてのガンディー＞

ところでまた、エリクソンはガンディーの中年期に「儀式施行者」以上の特徴を見出そうとしていた。それは「指導者」としてのガンディーである。

先の「儀式化」の議論において、エリクソンは成人を「儀式施行者」として「裁可」される必要があるとし、「裁可」もまた、儀式によってなされる必要があると述べていた。そして、「裁可」を担う具体的存在として「指導者」や「神」や「文化的ヒーロー」など、個人を超越する存在を挙げてもいた。エリクソンは *Gandhi's Truth* においてガンディーを、儀式的裁可を行う「指導者」として描き出そうとしたのである。しかし、以前の「儀式化」論議のなかで「指導者」は、どちらかといえば既存の社会様式（モード）を体現する人物として特徴づけられていた。それに対して *Gandhi's Truth* のなかでは、この「指導者」に新たな社会様式（モード）の創造者としての役割が付与されている。すなわち、新しい「相互性」の型を創造し、それを儀式として人々に広めていく力を発揮する人物としての役割である。

この段階（「成人期」）においては、男女ともに、何の、そして誰のケアをしてきたか、何を立派に果たそうと気遣っているか、そしてすでに着手し、創造したものを今後どのようにケアしていくか、ということを自分たちのために、決めねばないと私は指摘してきた。しかし、この偉大な指導者（ガンディー）は、自らと他の多くの人々のために、新しい選択と新しいケアとを創造するのだ（Erikson, E.H. 1969, p.395；括弧内筆者）。

ここに見られる「新しい選択と新しいケアを創造する」というのは、具体的にはガンディーの実践した「戦闘的非暴力」ないし「サティアーグラハ（真理の力）」を指している。それはインドにもたらされた新しい「相互性」の儀式である。エリクソンは、ガンディーがいったいどのようにして、それを創造したと考えていたのだろうか。

エリクソンによれば、現実の重みを無化することを通してであるという。それは「自分を忘れる」ことや「死を忘れること」と対立するものである。エリクソンは、まず、ガンディーが、青年時代に英国留学をし、アフリカで長く弁護士として働いたという事実から、彼の人生には文化的な「多面性」があると指摘した上で、次のように述べる。

文明や文化、様式、そして様々な主義の歴史的パレードを俯瞰する者は、それらが我々人間の多くの者に、栄光があると同時にしかし惨めなほどもろい—不死のアイデンティティ、決定的な身分、集合的威厳—の感覚をもたらしているということを見通し、我々は無であるという真理の核に直面する。そして、語るに不思議なことに、そこから力を得る（Erikson, E.H. 1969, p.396）。

エリクソンは、ここで、一般に儀式や社会様式（モード）によって維持されている諸々の社会的現実—エリクソンの理論上では心理社会的なものすべて—が、歴史的、相対的なものにすぎないと看破し、そしてそれゆえ、我々人間は「無」であると知ることが、「真理の核」であると明示している。そして、他ならぬガンディーこそ、その「無」の「真理」に直面し、そしてそこから力を得たと、エリクソンは推察するのである。

さらに、エリクソンは、ガンディーが「無」の「真理」を認識したうえで新たに創り出した「現実（actuality）」——実際にはそれも「無」なのだが——を、他の人にとっても現実（アクチュアル）であるように行為したことに、儀式創造者としての姿を見るのであ

る。ここでエリクソンがいう「現実」は、「論証的に正しい事実」としての「現実(factuality, reality)」ではなく、「行動において事実上、真実であると感じられるもの」の意味である(Erikson, E.H. 1969, p.396)。そうした意味で、「現実」は、絶対的な事実ではなく、相対的、関係的な、しかし主観的にはそれが「真実」であると感じられるような現実感覚を示すものである。そして、エリクソンは新たな「相互性」の儀式を創造するガンディーを、「宗教的現実家(the religious actualist)」と呼び、次のように説明している。

> 宗教的現実家は、不可避的に宗教の改革者となる。なぜなら、他ならぬ彼の情熱と力とが、彼を現実化させた(actualize)ものを、他の人々にとっても現実(actual)であるようにさせたがるからだ。つまりこれは、制度を創造し、再生させることを意味し、無を制度化することを意味している(Erikson, E.H. 1969, p.399)。

エリクソンは、ガンディーの中年期におこった一つのストライキ事件、アーメダバードの事件を、この研究の中心に据えている。そして、この事件に関与した多くの人物にインタヴューを申し込み、この事件がガンディーにとってどのような意味をもっていたのか、またこの事件に関与した人たちにこの事件がどのような意味を与えたのかということを、明らかにしていった。そのなかで、23歳のときにこの事件に関与し、インタヴューの時点ではインドの内務大臣であった人物、グルザリラール・ナンダは、次のように述べたと、エリクソンは書きとめている。

> 彼は付け加えてこういった。あのアーメダバードのエピソードの最もすぐれた重要性は、和解において、あたかも儀式のように、まったく宗教的な信頼が出現し、人々がそれを身につけることができたということである、と(Erikson, E.H. 1969, p.86; 傍点筆者)。

エリクソンは、このアーメダバードの事件に、ガンディーが「戦闘的非暴力」もしくは「サティアーグラハ(真理の力)」という新しい儀式を創造しえた契機を見ているのである。そうした意味で、ここでは、ジェネレイティヴィティに関して、社会様式(モード)に従う保守的な側面を強調するのではなく、新しい社会様式(モード)、新しい「相互性」の型をも生み出していく極めて創造的な側面が、ガンディーを通して描かれたといえよう。

さて、*Gandhi's Truth* における考察は、一方では60年代までに展開された3つの系を、ヒンドゥー文化とガンディーの人生の両者において確認しながら、そして統合的に発展させたものということができるだろう。エリクソンは「親密性」と「自分を失う能力」がジェネレイティヴィティの前提となることを、ヒンドゥー文化の人生段階においても確証したといえる。そして、ジェネレイティヴィティの特徴として、「世界の維持」や「現実に奉仕すること」が挙げられ、それと関連して「死を忘れること」という新しい視点が付与されたのである。また他方では、ガンディーのように自分にとって現実であるものを他人にも現実であるようにする力のある者が、新しい「相互性」の型を創造するということが、これまでにはなかったジェネレイティヴィティの新たな要素、すなわち創造的側面として示されたといえよう。

しかし、*Gandhi's Truth* においては、以上述べてきたようなジェネレイティヴィティや成人の、そして「儀式化」や「相互性」の肯定的な要素ばかりが論じられているわけではない。これまでのエリクソンの理論の展開にとって不協和音となるような新たな要素もまた明らかになったのである。それは、第一に世代サイクルにおける負の側面の世代継承、そして第二に「相互性」における暴力の不可避性である。

第二節　ジェネレイティヴィティの錯綜—マハトマへの手紙

＜呪いの世代継承＞

第一の点については、エリクソンがガンディーと彼の息子との関係について論じた箇所で明らかになる。すなわち、エリクソンは、ガンディーの個人的な親子関係のなかに負の遺産の世代継承を見ているのである。ガンディーは、しばらく離れて暮らしていた息子のデヴァーダス（当時10代）に次のような書簡を宛てたという。

私はいつもおまえのことを考えています。私はおまえが非常な熱意をもち、何かに関与しうることを知っています。もしおまえがここにいたなら、あらゆる瞬間に真理の至高の不思議と力とを目にしたでしょう。これこそ私がおまえにのこすことのできる遺産のすべてです。私が信じているように、それは尽きざる遺産です。その価値を知る者にとって、それは計り知れないほど貴重です。その誰もが、他のどんな遺産をもつことも望むことも求めないでしょう。私は、おまえがその価値

をすでに知っていて、それを愛情で慈しむだろうと思います。私は昨夜、おまえが、私の信頼を裏切り、金庫から証書を盗み、それを換金する夢をみました。おまえはそのお金を全部悪のために使いました。私はそれを知ることになって、驚き、たいそう惨めに感じました。ちょうどそのとき私は目を覚まし、それが全部夢であったことが分かりました。私は神に感謝しました。この夢は、私のおまえに対する愛情(attachment)を物語っています。もちろん、おまえはこの愛情を欲しています。この現世において、いつかそれが完全に消え失せてしまうだろうなどと心配する必要はありません。私は最大の努力を傾けてすべての人に等しい愛(love)をもとうとしています。しかし、私はおまえからそれ以上のものを希望しています（Erikson, E.H. 1969, p.319）。

父の信じる価値を、息子にも信じてほしいという強い要求と、独白にも似た夢の話、父の愛情への信頼をうながし、また父への愛を求める結びの文。そして、ガンディーもまた末の息子であり、10代のころ兄の腕輪から金(gold)を盗み取り、それをちょっとした借金の返済にあてたことで、父に罪を告白した体験があるという。この書簡に対して、エリクソンはこう問いかけている。

ガンディーが息子に向かって、自分は目覚めてからその夢が本当でなかったので喜んだという理由によって、その夢は父親としての愛情を物語る、と書くなら、息子は、なぜ父親は自分を、まず悪に支配された裏切り者、盗人として夢見たのか、と問うてよいはずである。父親としての愛情は「全く」消え去らないだろうというなにやら訳の分からない保証と、彼が息子から要求する「何かそれ以上のもの」という曖昧な言い方とを併せると、その夢は次のようなことを意味する。ガンディーは、自分自身の息子たちからもっとも多くのものを要求し、もっとも悪いものを予想している――つまり、彼は息子を、自分の中の最悪のものと結びつけているのである（Erikson, E.H. 1969, pp.319-320）。

この見解は、精神分析学的解釈の立場からなされるものであるが、エリクソンの分析によれば、ガンディーは自分の息子を「自分の中の最悪のものと結び付けている」という。エリクソンは別の箇所で、次のようにも述べている。

ガンディーのような精神構造をもつ人間にとって自分の子どもは、ガンディー自身の不完全な自己鍛錬と、自らの実存的な人生計画のおける明晰さの不足とを体現する、生きた告発者であった（Erikson, E.H. 1969, p.149）。

エリクソンは、父親としてのガンディーと子どもたちとのこうした関係を、「世代継承という冷厳な事実」（Erikson, E. H. 1969, p. 129）として解釈している。それは、ガンディーと彼の父親との間に生じたコンプレックスが、「呪い」として次の世代関係のなかに継承されたということであった。たとえば、ガンディーの父は、ガンディーに時期尚早の――彼自身が決定能力をもつより前に――結婚を強いた。それによってガンディーは息子をもうけたが、後には性交渉を一切絶つようになる。このことについて、若いうち（10代）の結婚はインドの風習としてはごく普通のことであるが、エリクソンは精神分析学の立場から、これを子どもの「不可侵性」が侵された例として挙げている。これに関して、エリクソンは次のように述べている。

> 我々はまた、それがなければ子どもたちが充分に発達しないような指導を怠ったり、あるいは彼らの準備が未だできていないうちに彼らに決定を押し付けたりするときにはいつも、子どもに「暴力をふるい」、彼らの中に内的な怒りをかき立てていることになります。これを例証するのに、あなたの生活史にまさるものはありません。あなたのあまりにも早い結婚は、あなたに暴力をふるったからです（Erikson, E. H. 1969, p. 248）。

このようにエリクソンは、ガンディーの父子関係に「呪い」の連鎖を見ているのであるが、それは、エリクソンの成人観と大きく異なっている。

> 幼児期の呪いが行為によって克服されるとき初めて、その者は成人になったといえる（Erikson, E. H. 1969, p. 133）。

エリクソンは、かつて、幼児期の「罪悪感」や「呪い」、トラウマなどは、行いや反省によって啓蒙しうるものであり、そうした啓蒙によって成人へと導かれた人物が、「相互性」を生み出しうると考えていた。*Childhood and Society*（改訂版）の終章に彼が述べたことに依拠すれば、「啓蒙の地ならし」を終え「思慮分別」を備えた成人（Erikson, E. H. 1963, p. 417）が、次世代の人間と相互形成的な関係を築いていくことが心理社会的進化であった。しかし他方で、エリクソンは彼自身が「偉大」と認め、新たな「相互性」の型を創造しえ

た人物として高く評価するガンディーにおいてさえ、自分自身の「呪い」を啓蒙することができずに、「呪い」をそのまま次世代へと連鎖させていることを、明らかにしてしまったのである。

ガンディーの息子への手紙に見られるように、ガンディー自身は、これを息子への愛情であると理解し、また息子にとって必要であると納得している。これは、「自分を失う能力」の負の側面を示しているといえよう。つまり、自分を省みることなく「現実に奉仕する」がゆえに、成人には、無反省に自己の負の遺産を次世代に伝達するという側面があるということである。

これを再びエピジェネティック・チャートに関連づけて説明すれば次のようになろう。すなわち、ここまでに明らかにしてきたエリクソン理論の枠組みにおいては、「成人期」の左側に連なる空白においては、それまでの発達過程で獲得された「徳」が「成人期」のレベルで新たに統合され再構成されて次の世代に示されると考えられた。しかし、「成人期」のこの段階において、過去の発達段階での葛藤が解決されぬまま、そのまま、次世代にこの未解決な葛藤が伝承されてしまうことがありうるということである。この場合、「成人期」の段階の左側の軸と、それに先行するそれぞれの発達段階から上に伸びた軸が交差する空白のなかに、未解決の葛藤が含まれているということになるだろう。すなわち、ジェネレイティヴィティの段のすべての空白（図3のcおよびc'）に、次世代との関係における自己の人生の再構成のなかで、失調傾向や暴力性といった負の側面が現れてくる可能性があるということである。それは1960年代までのジェネレイティヴィティ概念の展開に付加された新たな不協和音であるといえよう。

＜創造的ジェネレイティヴィティのジレンマ―非暴力のなかの密かな暴力＞

新しい「儀式」の創造者としてのガンディーにも、拭いがたい負の側面を見ることができる。*Gandhi's Truth* において、エリクソンがガンディーの中年期のありように見るのは、伝統的な「儀式施行者」としてのガンディーではなく、新しい「儀式」を創造した革新的な成人ガンディーであった。このことは、「世界の維持」といったジェネレイティヴィティの保守的な側面でなく、創造的側面を強調するものであろう。しかしながら、エリクソンは、ガンディーの創造的ジェネレイティヴィティにおいて生み出された新たな「相互性」の型自体のうちに潜む危険性を指摘している。つまり、エリクソンはガンディーが創造し自ら実践した新たな「相互性」の型である「戦闘的非暴力」や「サティアーグラハ（真理

の力）」のなかに、「非暴力」という名の、他者への暴力的侵入を見出したのである。

ガンディーがとった「非暴力（真理の力）」は、彼が、ときには敵対や蔑み、憎しみを向けられながらも、他者との間に新たな「相互性」の型を創造し、「儀式化」してゆくための方法であった。エリクソンはこの方法に、全人類的な新しい成人性のへの糸口として「相互性に参与しそれを支えつつ、その関係を意識化してゆく力としての相対性(relativity)」（柳沢昌一 1985, p. 404）を読みとっている。他者への残酷性に敏感であり、かつ自らを相対化しうることを識る者として行為すること。それは関係のもつ暴力性を意識して、なおかつ相手にかかわろうとするときの、人間が他者との間に新たな「相互性」を生み出そうとするときの、一つの方法である。

しかし、エリクソンは、次のように述べる。

> 私は、あなた（ガンディー）が真実を主張なさっているまさにそのときにある種の不実を、また、言葉全体があり得べからざる純潔さを映し出しているときに何か不純なものを、とくに、あなたが非暴力を表向き論じられているときに、追い払われたはずの暴力を、かすかに感じ取った（Erikson, E. H. 1969, p. 231）。

たとえば、ガンディーは幼い妻に教養を強要した。彼は自分の家に貧しい人々を住まわせていたが、妻カストゥルバが控えめな不満をもらしたとき、黙って彼女にドアを指さした（いやならば出ていけ、と）、家に住む不可触賤民の汚物を喜んで始末するよう妻に命令したことがあった、集団生活においてガンディーが決めた規則を破った少年への見せしめとして、少年がからかった少女の髪のおさげを切った。このような日常における些細な、しかしその当事者にとっては、ガンディーとのアクチュアルで相互的な関係の破綻、「非暴力・不服従」というインドにおいてすでに成立し機能していた「相互性」の型の破棄を意味するような暴力のエピソードがここでは挙げられている。そして、エリクソンはこれらのすべてを、ガンディー自身が情熱をもって真実を主張し、純潔を表現し、非暴力を論じていたときに、見出したのであった。先に挙げたガンディーの実の息子へ書簡に見られる態度にもまた、愛情という名の一方的な押しつけを見ることができよう。エリクソンは、ここに、インドの父と呼ばれたガンディーが示した、家族や身近なものに対する無自覚で無邪気な残酷性、成人の拭いがたいアンビヴァレンスを指摘するのである。

そして、こうした矛盾のために、この本を書くことは不可能ではないかと思ったことが

何度もあると、エリクソンは告白している（Erikson, E.H. 1969, pp.230-231）。このような拭いがたいアンビヴァレンスについては、第三章でもふれたように、エリクソン自身が成人から子どもに向けられる愛情のなかに指摘してもいた。しかしながら、「高みに達した人物」としてガンディーのサイコヒストリー研究に着手した（Erikson, E.H. 1969, pp.230-231）エリクソンは、その徹底した自己反省と自己超越を意味する「高み」においても、他者への拭いがたい暴力性があるということ、「相互性」が暴力と分かちがたく結びついてもいるという現実認識とともに何度も筆を止めたのである。

エリクソンは、「相互性」という概念について、ここで見直しを余儀なくされたといえるだろう。少し整理してみるなら、エリクソンにおいて「相互性」は、1950年代においては子育てに見出された親子（とりわけ母子）の素朴な関係であった。1960年代に「世代サイクル」の視点が導入され、また心理社会的発達段階がライフサイクル論として編みなおされたときには、社会様式（モード）のなかの「儀式」によって再生されていく、世代サイクルとライフサイクルを連動させる要、人間の心理社会的進歩を支える歯車であった。「相互性」は、次世代の成長発達を促すと同時に、成人が次世代からの挑戦に応えて自分自身をも成長させていく、そうした相互形成的な関係であり、互いに絡み合う二つの世代における「徳」の形成を支えるものである。そして、それは関係性のアンビヴァレンスを克服する「儀式化」によって、支えられているものであった。しかし、ガンディーの研究を進めるうちにエリクソンが明らかにしたのは、ガンディーの創造した「相互性」は、他者への暴力と表裏一体であったということ、「儀式」の創造と他者への暴力が、無自覚に同時に行われるものであり、そうした意味で「儀式」もまた、関係のアンビヴァレンスを完全には克服するものになりえないということである。

ここには、「相互性」、ジェネレイティヴィティ概念、ひいてはエリクソンの発達段階構想自体が孕む矛盾が現れているように思われる。エリクソンは、この「成人期」のサイコヒストリー研究のなかで、成人として「相互性」を生み出す側に回ったとき、すなわち、社会や文化を生み出す側にまわったときのガンディーにおける創造性と暴力との矛盾を描き出したといえるが、そうした意味で、*Gandhi's Truth* における「成人期」の考察は、「葛藤と危機」を乗り越えることで自我発達が進みゆくという、心理社会的発達段階の枠組みに再考を迫るものでもあったということができるだろう。

＜「私はポリアンナではない！」＞

日本でエリクソンを積極的に紹介してきた精神科医の小此木圭吾は、エリクソンが *Gandhi's Truth*(1969)を執筆していたと思われる時期に、精神分析家の集まりのディナーの席で、彼が感情的にいらだって「私はポリアンナではない！」という趣旨のことを発言したということに触れている。エリクソンのこの発言の背景には、小此木によれば、1960年代のとりわけ *Insight and Responsibility* (1964)以降、エリクソンが「閉ざされた精神医学臨床領域を越えて、広く、社会諸科学領域に浸透」し、「基本的信頼感」や「希望」や「愛」などについて積極的に語る「人間学者、社会思想家」、もしくは「哲学者」として世のなかに知られるようになったことがあるという。そうしたエリクソンに対して、臨床家たちからは批判とも疑問ともつかぬ「エリクソンはポリアンナ（人々の善意やよい面しか見まいとする少女のこと）だ」という評価が広がっており、エリクソンはそうした見解に異議を表明したのであろうと小此木は推測している（小此木圭吾 1974、111-112 頁）。小此木は、エリクソンが実際は単純なポリアンナ的発想をもつものではないことを例証したうえで、しかしながら、なお、エリクソンを含めた臨床家はポリアンナであると述べざるを得ないとして、エリクソンも含めた臨床家のジレンマを次のように表している。

> “かかわること”は“犯すこと”であり、誘惑することである、と自らの棘に気づきながら、そしてその棘で相手を傷つけることをおそれ、自戒しながら、それでもなお、かかわり、助ける努力を泊めることができない。（中略）臨床家エリクソンが、このジレンマを私たちと共有する点に、さらにより深いレベルでの臨床家エリクソンの“業”のようなものがわたしにはみえてならないのである（小此木圭吾 1974、123頁）。

推測の域を出ないが、エリクソンが「私はポリアンナではない」と叫んだのは、ガンディーの非暴力のなかの暴力に気がつき、筆を止めざるを得なかったこととも関係があるのかもしれない。1960 年代までのエリクソンは、非対等な関係性に不可避なアンビヴァレンスや暴力は、精神分析の努力によって、成人の「徳」である「ケア」によって、あるいは「儀式化」によって乗り越えられるものであり、またそうであるべきだと考えていた。しかしながら *Gandhi's Truth* において、関係性のアンビヴァレンスが、個人の啓蒙によっても、社会様式（モード）の機能によっても完全に解決することができないことが明ら

かになった。それによって、エリクソンは、人類はジェネレイティヴィティやケアや「儀式化」によって進化してゆく、という単純で楽観主義的なパースペクティヴを自ら否定せざるを得なくなったのである。

エリクソンは、創造性と暴力とが裏腹の関係にあることを知りながら、いかにしてこの矛盾を解決しようとしていたのだろうか。あるいは、そもそもこの矛盾を解決しようとしていたのだろうか。

エリクソンは、少なくとも *Gandhi's Truth* の中盤における「ガンディーへの私信」の章では、ガンディーの息子への暴力性を進歩のために不可避のものとして捉えている。

> 我々はすでに、大人と子どもの出会いの中に、人間をその非合理な暴力から癒そうとする者全員に対する恐るべき反抗を、見出しています。この治療にとって最も大切なのは、――あなたの文脈においても、我々の文脈においても――、あまりに容易に道徳的報復に走りたがる道徳的な大人が、暴力を用いないで教育する術を習得することです。つまり彼は、相手の不可侵性を――もし、相手が子どもであっても、そして、その場合にはとくにそれを――認識した上で教育することを学ばなければいけません。しかし、身体的残酷さを避けるだけでは不十分です。なぜなら、それは事実上、あらゆる力を犠牲にするという見せかけのもとにあらゆる憤りを捨てるという親の自己抑制につながり、それは、われわれの学んだところによると、進歩とは呼べないものだからです（Erikson, E.H. 1969, p.248）。

こうしたエリクソンの立場は、単純な楽観主義を否定するものであるという点で「私はポリアンナではない」という彼の言葉と一致するものといえるだろう。しかし、おそらくこうした態度は、ジェネレイティヴィティにおける創造性と暴力とのジレンマの解決を、やはり進歩主義的傾向に添って目指そうとしているように思われる。

以上のように、第四章では *Gandhi's Truth* においてガンディーの人生に照らし合わせることで、ジェネレイティヴィティに関して60年代にまでに展開された議論が、新たに統合的・発展的にとらえられた面と、その矛盾点や盲点を露呈してしまった面があることを見てきた。「相互性」や世代サイクルを支える儀式を施行する者としての成人には、「自分を忘れる」とともに「死を忘れ」、「世界を維持」し「現実に奉仕する」という側面があるということ、しかし、その無反省さゆえに、負の側面の世代間継承の問題が未解決の

まま残されるということ、創造的ジェネレイティヴィティは必ずしも暴力性やアンビヴァレンスを克服するものではないということ。これらの問題群は、エリクソン理論の３つの系の調和的統合をポジとすれば、ちょうどネガの関係になっているといえよう。新たな「相互性」の型を創造した偉大な人物ですら、他者への暴力性を拭い去ることができなかったという矛盾。「成人期」において過去の人生段階における諸葛藤を克服し、様々の「徳」を統合できないままでも、悪循環という意味でジェネレイティヴィティが成立してしまうという矛盾。そして、こうした諸矛盾は、その後の 1970 年代および 1980 年代における著作に影をおとしつつ新たな展開をもたらすことになるのである。

第五章　ジレンマとの取り組みと分裂——1970年代と1980年代

第一節　「儀式化」のジレンマとの取り組み

Gandhi's Truth 以降のエリクソンは、1970年代に歴史、遊び、世代サイクルといったテーマで講演を行い、その講演内容をそれぞれ数年後に出版するという著述スタイルをとっている。それらのなかで、彼は成人やジェネレイティヴィティについても触れている。以下の3点について見ていく。

講演（1972）Play and Vision, in: *Toys and Reasons*(1977；邦訳『玩具と理性』2000)
講演（1973）*Dimensions of a New Identity*（1974；邦訳『歴史の中のアイデンティティ』1979)
シンポジウムでの発表(1975) Reflections on Dr. Borg's life cycle, in: *Adulthood* (1978)

＜拒否性＞

Toys and Reasons（1977；邦訳『玩具と理性』2000）に収められた1972年のハーヴァード大学での講演をまとめた論文Play and Visionは、エリクソンのこれまでの理論をある程度理解している聴衆を前提にして構成されているといえよう。それは、本研究で跡付けてきたジェネレイティヴィティ概念を中心とする心理社会的発達段階の理論や、ライフサイクル、世代サイクル論、「儀式化」、「擬似種化」などの概念だけではなく、「アイデンティティ」概念や幼児の遊びの研究、「ものの見方」（すなわち「ヴィジョン」）の歴史性に関する問題なども含む、総括的なものとなっている。エリクソンの著作のなかでは、とりたてて注目されることの少ない文献であるが、成人やジェネレイティヴィティに関する見解については重要な転回点を示す論文である。

エリクソンは、この論文中で、「成人期に関する私自身の理論を一部修正する必要を認めた」と述べた上で、以下のように続けている。

しかし私自身のなかでの検討から、ジェネレイティヴィティに（正常にあるいは病

理的に）付随するものとして私が述べた停滞の発達を考える際に、そのなかで致死性が有する重要性を十分強調してこなかったことが分かった。というのは人間におけるジェネレイティヴィティの停滞は、一つの特殊な拒否性の生起を、つまりその個人が属する「種族」――人類の特定の亜種とか彼が伝播させたい価値体系――に逆らうものに対する残忍な抑圧や破壊の生起をもたらすからである。この破壊性は、高きものの名を借りて自分の子どもに道徳的または身体的虐待を加えること（子どもが突如として異人種に見えてくる）や、より広範なコミュニティの一部の子孫（劣等な種族に属すると思える）に対する虐待となって現れてくることがある。この破壊性はまた、戦争あるいは他の形態の絶滅行為（人間でありながら突如として人間以下の人間と見えてくるものに対するそれ）として、周辺的に、広範囲に渡って集団的な形での現出を見るのである（Erikson, E. H. 1977, p. 59）。

ここに示されているように、エリクソンは、ジェネレイティヴィティの対極として提示してきた「停滞」を再検討する必要に気がついた、という。かつて「停滞」が、「肉体的精神的出会いにおいて自分を失う」ことがなく、出会えないこと、世界や他者との関係性から疎外されているという、いわば消極的・受動的状況を指していたのと対照的に、ここで「拒否性」は、出会いにおいて他者の否定が生起すること、積極的・能動的な攻撃性として提示されている。この点にエリクソン理論における大きな変化があるといえる。このことは、「成人期」についてのみならず、心理社会的発達段階の枠組みそのものが、問い直されていることを意味しているといってよいのかもしれない。それは次のような理由による。すなわち、それまでのエリクソンの心理社会的発達段階論では、各段階の失調的傾向は社会からの疎外という意味で消極的・受動的特徴を備えており、他方、調和的傾向は他者や社会との関わりという積極的・能動的特徴を備えていた。それに対して「拒否性」の概念が導入されたことにより、次世代に対する積極的・能動的関わりにも負の作用がありうるということが明らかになるからである。

さらにまた、「高きものの名を借りて自分の子どもに道徳的または身体的虐待を加えること」の部分は、ガンディーと息子との関係がエリクソンの念頭にあったことを思わせる。ここではなお、ガンディーの創造的な仕事と、息子に対する暴力性とのジレンマが解決されたわけではない。しかし、このジレンマを前にして筆を置くというのではなく、このジレンマに積極的に向き合おうとする姿勢が現れているように思われる。

＜遊戯性＞

エリクソンは、この論文で、「攻撃性」は人間に本来的に備わっているものであると述べている。

基本的かつほとんど無邪気な「攻撃性」は、生き生きしている活動のすべてにおいて、そしてまた遊び心に満ちている状態において、表現されている（Erikson, E.H. 1977, p.56）。

しかしエリクソンによれば、この「攻撃性」の暴走を抑止するものがあるという。

人間的実存の基本的事実として、個人は、成長し発達するために自由な活動領域を欲するが、しかし彼は最初から、文化的背景のしきたりを行動のなかに吸収し良心に取り入れることを通して、彼の攻撃性つまり「～に向かって-行くこと(ad-gression)」の限界を学習しなければならない。人間は動物のように自然の歯車のなかに本能的に組み込まれてはいない。それゆえ、文化的背景が相互交渉の境界や規則を与えなくてはいけない。そして、その境界や規則が、いくらかの自由を保障してくれる統合的な世界観をすべての人に与え、また、ある者には特別に裁可された方法での強奪を認めてもいるのである（Erikson, E.H. 1977, pp.56-57）。

ここでエリクソンは、「攻撃性」を調停し克服する機能を「文化的背景」に求めている。それは、「儀式化」、社会様式（モード）、あるいは「文化的統一体」と呼ばれてきたものと同じものであると見なすことができる。しかし、上述のように「儀式化」には、偏狭な「擬似種化」という負の側面を再生産するという働きもあった。こうした働きを抑止するものとしてエリクソンが提示するのが「遊戯性」である。

人生のあらゆる段階において、遊戯的であることは生き生きとしていることの要因であり、その欠如が特殊な形の致死性を引き起こす。このことを明確な事実として認識するならば、儀式化された相互交渉のパターンの存続に明白な価値があることも認められるだろう（Erikson, E.H. 1977, p.58）。

つまり、「遊戯性」のあるところでは、「儀式」は本来の機能において「攻撃性」を調停する。しかし、「遊戯性」の欠如によって、「儀式」は攻撃を促進し、正当化し、破壊をもたらすものにもなりうるのである。エリクソンは、このように、「遊戯性」の概念を導入することで、「儀式化」が孕む負の側面の問題にひとまず理論的には対応しえたといえるだろう。

なお、こうした展開は、1980年代において、エリクソンが心理社会的発達段階に、能動的かかわりの負の側面として「不協和特性」の項目を新たに設けたことに直接関連していると思われる（Erikson, E.H. 1982[1997], pp.32-33）。そこでは、各発達段階において「徳(virtue)」に対立する項目として、順に「引きこもり」、「強迫」、「制止」、「不活発」、「役割拒否」、「排他性」、「拒否性」、「侮蔑」が付加されるのである（図５）。

このようにエリクソンは、「遊び」や「儀式」などをテーマとしながら、新たに明確になった矛盾や事実を心理社会的発達理論に組み込む努力をする一方で、自分の関心事をある方向に限定させていく傾向も示している。この1972年の論文のなかには次のような一文が挿入されている。

我々は、人間が自分自身に対して抱くヴィジョンの個体発生的起源を知りたいのだ（Erikson, E.H. 1977, p.86）。

この明確で分かりやすい主張は、その後のエリクソンの著作活動に如実に表れている。とりわけ、成人やジェネレイティヴィティに関して、エリクソンは「相互性」や「世代サイクル」といった視点からではなく、「人間が自分自身に対して抱くヴィジョン」、すなわち「アイデンティティ」形成の視点から論じるようになるのである。

＜成人性の追求？＞

1973年に行われたジェファソン講演での内容を出版した著書 *Dimensions of New Identity*（1974；邦訳『歴史の中のアイデンティティ』1979）で、エリクソンは「成人の世紀？」と題する最終章で次のように述べている。

私が若かったころ、子どもの世紀について盛んな議論がありました。この議論はも

う終わったのでしょうか？その議論が静かに時代に溶け込んでしまったならいいのですが。それ以来、我々は青年の世紀というべきものを経てきましたが、ところでいつ成人の世紀は始まってくれるのでしょうか？この点については、答えられていない問題がいくつか残っているように思えます。しかし、青年と子どもに関する我々の知識が（彼らにとっても我々にとっても）断片的なものであるのは、我々が青年や子どもにどうなってほしいのか、あるいは我々自身がどうありたいのか、どうあればよかったのかということさえ、分からないからではないでしょうか。その点がはっきりしないため、我々は寛容であったとしても厳格であったとしても、漠然とした罪悪感を覚えるのです。そして、罪悪感を感じていると、寛容でありすぎたり、厳格でありすぎたりします。統計的な証拠やチェックリストは青年や子どもにとっての良し悪しを明示しますが、それらは彼らが自分自身のあり方を模索するという最も重要な点において、役に立ちはしないということを、我々は直視したほうがいいでしょう（Erikson, E. H. 1974, pp. 121-122）。

「成人の世紀？」という章題は、エレン・ケイ（Ellen Key Karolina Sofia 1849-1926）の『児童の世紀』を思い起こさせるものである。エリクソン自身、この本が巻き起こした20世紀初頭の児童中心主義について触れ、それにならって成人性を追求する世紀の到来について言及している。エリクソンは、我々人間が「どのように生きるべきか」という問いに応える存在としての成人性の追求を示唆しているようにも見える。章題にも疑問符がつけられているように、彼の講演は、そうした必要性を断言するのではなく、聴衆に問いかけ、理解を求める形をとっている。しかしながら、エリクソン自身がそうした志向性をもっていたことは明確である。

私は、我々にとって成人ということが何を意味し、それが未来の社会の成人自身にいかなる意味を持っているのかという問題に、誰もが直面しているのだと思います。責任のある成人たちが、これから生まれてくる子どもたちのために自分たちがいかなる理想を体現できるのか、あるいは子どもたちにいかなる選択肢を与えることができるのか分からなかったり、あるいはそういったことに関心を払わなかったりするならば、この世に生まれてきた子どもたちには、それならば何のために、自由な合意のもとに選んで自分たちを生んだとのかと問う権利が大いにあるからです（Erikson, E. H.

1974, pp. 121-122）。

ジェネレイティヴィティに関して、エリクソンが優生学的見解を表明していることはすでに述べた。ここでは、選ばれて生まれる子どもへの普遍的ジェネレイティヴィティとして、この世でいかに生きるべきかという明確な指標や選択肢、すなわち「アイデンティティ」の基盤を子どもに与えることが、「選択した者」としての成人の当然の責務であると、彼は主張したのである。

この責務が講演のなかで果たされることはなかったが、エリクソンはここで、「私は今、成人について研究するグループにたまたま属しています」（Erikson, E. H. 1974, p. 122）と述べ、その後この研究成果が著作として出版されることを示唆するに終わっている。

＜異世代関係における自己の探求―映画『野いちご』の解釈＞

この講演のなかで予告された著作、すなわちエリクソンを編者とするその書 *Adulthood*（1978）では、エリクソンは次世代に対し「いかに生きるべきか」を提示できる成人性の追求をすることはなく、映画『野いちご』（*Wild Strawberries* イングマール・ベルイマン 1957）をもとに老年期の考察を行った論文を載せている。この映画は、主人公の老人が死期を前にして自分の人生を振り返るものであり、老人と若い世代との異世代関係がストーリーの柱となっている。

エリクソンは、この映画のなかに、まず経験の反復と再構成という「ライフサイクル」のテーマを見出している。老人が若い世代との関係のなかで自分の人生を振り返り、生き方を見直し、そのことが老人の子どもたちとの関係性に変化をもたらす。死期を目前にして、自分の人生から自由になること、次世代に生きる希望をもたらすこと。このように、老人が自己の経験の反復と再構成をすることが次世代との関係のなかで生じ、またそれが次世代にも影響を及ぼすことを描き出している点で、この作品およびエリクソンの解釈の主題の一つは「異世代関係」にある。

しかしもう一つの主題は、明らかに自己の探求、「アイデンティティ」の探求にある。すなわち、主人公の老人が気にかけているもの、「ケア」しているもは、第一に「自分」であり次世代の人間ではない。むしろ、若い世代の人間のほうが――とりわけ息子の嫁が――老人に語りかけ、老人に回顧と反省と生成をうながす役目を担っている。それは、彼女たち夫婦の生殖の問題、つまり老人の息子が子どもを欲しないことの原因を父子関係に

見て取った、彼女の必死の語りかけであった。そうした「異世代関係」に支えられながら、老人は死期を前にして自己を探求することができるようになるのである。それがこの作品『野いちご』においてエリクソンが描き出したテーマであった。

なお、この著作 *Adulthood*(1978)全体の構成は、イスラム、日本、インドのラージプート族、ロシア、アメリカなど各文化における成人性に関する論稿、医学的視点、キリスト教的視点、歴史的視点、世俗的視点など各学問領域からの成人性に関する論稿などから成っている。総合文化的、学際的な成人性考察が所収されている本書において、エリクソンはただ一人、老年期を中心とした考察を、映画というフィクションの解説として行っていることになる。もちろん、そのなかで、エリクソンもまた、老年期における自己の探求が異世代との関係に引き起こすダイナミズム、また異世代間関係において自己を振り返り、再構成する精神活動について詳細に述べているのではあるが、この映画のなかで彼が示してきた「成人期」のジェネレイティヴィティの特徴をもっともよく体現しているのは、むしろ老人の息子の妻の方なのである。彼女の行為は、成人が次世代のみならず、先行世代にもジェネレイティヴィティを向け、「ケア」をもって接するということを明らかにしている。しかし、エリクソンが主題として扱ったのは、むしろ、老人のライフサイクルの再構成、異世代関係における自己の探求であるように見えるのである。それはいったい何を意味するのだろうか。

この問いに答える前に、さしあたりここでは、この作品の解釈をエピジェネティック・チャートに関連づけておこう(図 3)。すなわち、「老年期」の段階の空白においては、老年期の「統合　対　絶望」の葛藤（d）とともに、この段階における新たな自己探求（e）が、異世代関係や、自分が行ってきたこと、生み出してきたこと（f）の振り返りとして、相互に関連しあいながら進みいく様子が細かく描かれているといえよう。

第二節　ジェネレイティヴィティ概念の分裂

80 年代にも、エリクソンはジェネレイティヴィティについて積極的に考察している。以下は、この時期の主な著作である。

1980 年(a)の論稿 Themes of Adulthood in the Freud - Jung Correspondence

(邦訳「フロイト-ユング往復書簡における<大人であること>という主題」1991)

1980年(b)の論文 On the Generational Cycle

1981年のインタヴュー記事 On Generativity and Identity

1982年の著作 *The Life Cycle Completed* (邦訳『ライフサイクル、その完結』1989)

この時期には、新たに「自己生成」という意味がジェネレイティヴィティに加えられている。このことは、先の節の末尾に提示した問いに対する回答を示唆しているように思われる。すなわち、1980年代におけるエリクソン理論の展開から遡って見れば、映画『野いちご』の解釈において描き出された老人の自己探求は、その後に論じられるジェネレイティヴィティの「自己生成」の側面を先取りしたものと見なすことができる。さらに言えば、同じくこの映画の解釈のなかで、それまで――「自己生成」の意味が付加される以前――に形成されてきたジェネレイティヴィティ概念の内容に合致するのが、むしろ老人の息子の妻の方であったこともまた説明できるように思える。というのは、1980年代にいたって、ジェネレイティヴィティ概念の内容が、関係性の調停や「相互性」の創出に関わる女性と「自己生成」に取り組む男性というように、性別に即して分裂することになるからである。

以下、これらの問題について、とりわけジェネレイティヴィティ概念について決定的な分裂が明示された1980年 (a) の論稿について、詳しくみていこう。共著 *Themes of Work and Love in Adulthood* 、フロイトの「愛すること働くこと」という言葉をタイトルに入れた本書において、エリクソンは Themes of Adulthood in the Freud - Jung Correspondence (邦訳「フロイト-ユング 往復書簡における<大人であること>という主題」) という論稿を載せている。これは、フロイトとユング (Carl Gustav Jung 1875-1961) の1906年から1914年の8年間の往復書簡を中心的題材として、成人のテーマを分析・解釈したものである。

このフロイト-ユング往復書簡集の内容については、エリクソンがこの往復書簡の編纂者の次のような表明を引用しているので、それを見てみよう。

> 1906 年以降のフロイトとユングの関係がいかに進行したかについては、本書に収録された書簡がすべて語りつくしている。いわく、相互の尊重、信頼、次第に高まり行く好意、専門上の情報や学問的認識の頻繁な交換、精神分析運動のにわかに慌しくなりだした実務、家族の消息に関する親身な情報交換、同学の士や反対者たちについ

ての時として辛らつで機知に富んだ評価、そして次第にあらわになってきた意見の食い違い、誤解、傷つけられた感情の発生、最後に決別へと導かれるのが、その主たる内容である（Erikson, E.H. 1980b, p.47）。

エリクソンは、「間違いなく、こうしたことすべてが成人期の問題である」という。そして、こう続けている。

私はこれまで、成人の中年期に生産性や創造性と同じく生殖性を含むジェネレイティヴィティの危機を考えてきたのであるから（Erikson 1950）、この二人の双方の人生にとってこの時期がもつ相対的な意味が、この往復書簡にどのように反映しているのかを明らかにしなくてはならない（Erikson, E.H. 1980b, p.45）。

そして、エリクソンは、この往復書簡を交わした時期の二人の年齢に注目する。このとき、フロイトが50代、ユングが30代であった。エリクソンは、彼らの関係は父子の異世代関係にあたるとして、フロイトがユングに、自らの「後継者」、精神分析という仕事を「仕上げる者」として期待を寄せ、フロイトや精神分析への忠誠を強要したこと、またその一方で、父が息子の裏切りを恐れるというライウス・コンプレックスをユングに投影していたことに注目している（Erikson, E.H. 1980b, pp.50-61）。この点は、フロイト-ユングの関係とその破綻の解釈としては目新しいものではないが、エリクソンにとっては、異世代関係、とりわけ父子関係の暴力性やアンビヴァレンスの観点からガンディーについて考察した点を、フロイトにおいて再確認し、また精神分析学的視点からより明確化したといえる。

また、エリクソンは、人間の進化過程においてシンボルや儀式に隠されてきたものに、フロイトとユングの両者が「儀式化」されていない素朴で徹底的な注意を向けたと指摘している。そのために、彼らは互いの正気を危険にさらすこととなり、そしてそれが彼らの関係破綻の一要因であるとエリクソンはいう（Erikson, E.H. 1980b, pp.50-61）。エリクソンによれば精神分析は自己啓蒙を人間に課す新領域で、したがって彼は精神分析が社会的・歴史的・文化的文脈を捨象する傾向があると見ていた。しかし、また一方で、フロイト-ユングの関係においてもなお、当時の社会的・歴史的・文化的文脈として、君主制の揺らぎ、精神分析をめぐる動き、第一次世界大戦などが不可欠な要素として二人の関係の基

底にあるということも、明証している（Erikson, E.H. 1980b, pp.45.）。こうした指摘は、社会様式（モード）の重要性を再主張するものである。

このような、アンビヴァレントな父子の異世代関係ならびに社会様式（モード）の重要性の指摘は、これまでのエリクソンの見解と本質的に異なるものではない。エリクソンは、さらに、当時30代であったユングと、そしてフロイトの30代にも目を向けてジェネレイティヴィティに関する新しい考察を展開していくのである。

＜自己生成と創造的親密性＞

エリクソンによれば、フロイトと書簡を交わしていたころのユングは30代で、ちょうど家庭をもち、子どもをもうけていた。そして、エリクソンは、フロイトもまた30代に遅い結婚をしたときに、ベルリンの耳鼻科医ヴィルヘルム・フリース（Wilhelm Fliess）と親しく書簡を交わしていたことに注目し、フロイト-フリース間の「もう一つの書簡」を考察対象に取りあげている（Erikson, E.H. 1980a, p.46-50）[20]。そして、フロイト、ユングの両者とも、それぞれの30代に性的パートナーではなく創造性を刺激しあう親密な他者（ユングにとってはフロイト、フロイトにとってはフリース）を必要としていたと主張するのである。その上で、エリクソンは、ジェネレイティヴィティについて「自己生成」という新しい要素を加えることを宣言する。

> 私はここで、ジェネレイティヴィティのもう一つ別の要素を付け加えなければならない。こうした往復書簡においては、戦略的な意味をもつのであるが、それは自己生成（self-generation）である。多かれ少なかれ自意識的な、そして多弁的な態度（創造的な人間だけがこうしたことについて語る自分の言葉をもっているからであるが）、すなわち、自己生成とは、自分自身のアイデンティティを今のまま引き受けてゆきつつ、同時にそのアイデンティティを新しいものとして新しい関係に位置づけてゆくことへのケアを意味している。（中略）こうした更なる発展を相互に支えあうことが、友人関係のもつ心理社会的な中心機能である。それは、互いにナルシスティックな鏡になることを意味するとともに、それこそが双方に、創造的活動に必要な自己愛を割り当て、しかも親しみをもった批判によって、その自己愛を必然的な限界のうちに収

(19)フロイト-フリース間の書簡で、フリースからフロイトに宛てられたものは、フロイトが破棄したため、フリース宛のフロイトの書簡のみが後に公表された（Erikson, E.H. 1980b, p.49.）。

めさせるものである。こうしたお互いに甘やかしあう関係には、友人関係そのものを脅かす傾向があるが、そのことをこれらの往復書簡において見てゆこう（Erikson, E. H. 1980a, p. 48）。

ここでジェネレイティヴィティ概念から失われたもの、それは「親密性」の前提であった「自己を失うこと」であり、新たに付加されたもの、それは「自己生成」という意味である(21)。1960年代にはジェネレイティヴィティは、「親密性」において「自己を失い」、「相互性」において次世代を生み出しつつ自らも形成されることを意味していた。しかし、ここに見られるように1980年代においては、ジェネレイティヴィティは、むしろ次世代との関係のなかでも「自己を失う」ことなく、自己を継続発展させること、つまり「自己生成」することという意味において理解されるのである。

その際、かつて否定的に評価されていた事態が逆に肯定的に評価されているということは看過できない。ここに述べられているフロイトとユングの間の親密な関係は、かつてエリクソンが「二人の孤独」と呼んだ、閉鎖的な「親密性」として特徴づけることができる。エリクソンは、フロイトもユングもそれぞれの30代において「創造的親密性」をもって関わることのできる「友人関係を熱烈なまでに必要としていた」（Erikson, E. H. 1980a, p. 47.）と述べ、それが「二人の孤独」と形容されうるものであっても、彼らの創造的な「自己生成」としてのジェネレイティヴィティに不可欠であったと主張するのである。

エピジェネティック・チャートで見るならば、「成人期」における「アイデンティティ」や「親密性」、すなわち図3の**b**、**g**の解釈が、大きく変化したことが分かる。「アイデンティティ」（**g**）については、「自分を失う能力」や、「自分への関心を忘れること」として特徴づけられていたものが、それまでのアイデンティティを引き続き受け継ぎなが

---

(21) 1982年の *Life Cycle Completed* においても、こうした傾向が示されている。ここではジェネレイティヴィティは次のように定義されている。「ジェネレイティヴィティは生殖性、生産性、創造性を包含するものであり、自分自身のさらなるアイデンティティの発展に関わる一種の自己生成も含めて、新しい存在や新しい製作物や新しい観念を生み出すことを表している」(Erikson, E.H. 1982, [1997]p.67)。この定義もまた、ジェネレイティヴィティが世代サイクルの枠組みから切り離され、1950年代の定義へと回帰したかのように見える。

ら新しいアイデンティティを模索していく「自己生成」という解釈に変化している。「親密性」（b）については、以前は真の「親密性」が強調され、そうした関係性が次世代や社会組織などへと広がることに特徴があったのに対して、ここでは「二人の孤独」という閉鎖的な「親密性」―かつては、ジェネレイティヴィティの発達を阻止するものとされていたもの―を、「自己生成」に不可欠な「創造的親密性」として解釈する方向が打ち出されている。

＜女性化されたジェネレイティヴィティ＞

エリクソンは、さらに、この「創造的親密性」を「男性的親密性（male intimacy）」と言い換えて、次のように述べる。

> しかし、こうした男性的親密性は、若い妻との間にジェネレイティヴな（やきもちを含んだ？）競争心を引き起こすものでもあるだろう。フロイト夫人は、長い婚約期間の後、いよいよ子どもを生み育てる使命を遂行しようとしており、まさに彼らの往復書簡が始まった翌年に長女を生み、さらに三人の息子と二人の娘を続けて生んだのである（Erikson, E.H. 1980a, pp.47）。

> 停滞感がジェネレイティヴィティの対概念であるとすれば、特に創造的で生産的な男性が、人生のこういった時期に職業的義務と結婚生活の義務のために（相対的に）停滞することを危惧する姿は、我々の目にもよく触れるものである（Erikson, E.H. 1980a, pp.47）。

ここで、エリクソンは「自己生成」を成人男性の創造性や生産性と結びつけ、生殖性と対比させている。生殖性は明らかに女性の役割として振り分けられている。そしてさらに、他者との関係において「自分を失う」ことを前提とするジェネレイティヴィティに関する言及もまた、「女性的行為」として特徴づけられる。往復書簡のなかで、エリクソンは成人男性であるフロイトとユングを「創造的親密性」と「自己生成」のもとにとらえているのとは対照的に、ユングの妻、エンマ・ユング（Emma Jung）には全く異なるまなざしを向け、「自己を失い」、「現実に奉仕し」、「他者への気遣いを押し広げていく」態度を見出しているのである。ここでは、1960年代までに展開された「世代サイクル論」の枠内に

位置づけられるようなジェネレイティヴィティ概念が、エンマという成人女性の役割として割り当てられている。彼女は、フロイトとユングの仲がお互いの家族までも巻き込んで険悪になった頃、フロイトに幾度か書簡を宛てており、それもこの書簡集のなかに収められている。エリクソンが注目しているエンマの手紙から、いくつかの文を抜き出してみよう。

「先生はその点について何一つ語ってはくださいませんでしたので、一度徹底的にお話しくだされば、先生にも夫のためにもよろしいのではないかと思えてなりません。それとも何かほかに原因があるのでしょうか。もしそうでありましたら、どうぞ先生、私にお伝えくださらないでしょうか。」

「どうぞ私のこの振舞いを、差し出がましいものとおとり下さいませんように。また、かつてお話しされたような、先生のご好意をいつも台無しにしてしまう女性の一人に、私をお考えになりませんように。」

「先生がカールに寄せてくださる御信頼を、私どもがどれほど嬉しく、また名誉に思っているかご想像いただけるかと思います。でも時折、先生はカールを信頼しすぎているのではないかと思うこともございます。先生は、必要となさるよりもっと立派な後継者と完成者をカールに見ておられるのではないでしょうか。」

「私はただ次の点をおうかがいしたかっただけです。つまり、ご子息の身体的な症状も何らかの形で心理的条件と結びついているのではないか、たとえば抵抗力が弱まることになるのではないかという点です。」（Erikson, E. H. 1980a, pp. 67-68）

このようなエンマの努力もむなしく、フロイトとユングは周知のごとく決裂を迎える。しかし結末がどうであれ、エリクソンはこれをエンマのジェネレイティヴィティの表現として次のように見ている。

男たちは妻が子どもを生み育てることに専心するのと競うようにして自らの創造的関心事を追求したが、エンマ・ユングは明らかにフロイトを救おうとし、またフロイトの子どもたちを救いたいと願っており、なかんずく、彼女が夫に対するフロイトの陰湿な攻撃と見なしたことから、夫を救い出したいと思っていたのである。ともあれ、彼女の勇敢な女性的ふるまいは、不朽の観念に向けられるよりむしろ、現在生き

ているが死すべき運命にある者たちの発達上の必要にささげられたジェネレイティヴィティの表現であった（Erikson, E.H.1980a, p.68）。

夫とフロイトとの関係への懸念、夫、フロイトの子ども、そしてフロイト自身を心配する気持ちから、フロイトへ直接働きかけるために何度も書簡を送るという行為のなかに、その行為を支えるエンマの前向きな心の動きを見て取ることができる。自分の行為がフロイトに否定され、事態の悪化という結果になったとき、彼女は後悔や「罪悪感」や「劣等感」そして「不信感」のなかで「停滞」する気持ちになったとしても不思議ではない。しかしながら、夫やフロイト、そして両家の子どもたちの痛みを思い、希望的な関心を抱き続ける力としての「ケア」を、そして、彼らにかかわらずにはいられなかったエンマのジェネレイティヴィティをここに見ることができる。そしてエリクソンは、「現在生きているが死すべき運命にある者たちへの発達上の必要に向けられた」エンマのジェネレイティヴィティを、フロイトやユングの創造的関心事と対比させて、「女性的ふるまい」とみているのである。

＜「拒否性」の受容＞

エリクソンは、以上のようにジェネレイティヴィティを男女の性に即して振り分けると同時に、ジェネレイティヴィティは「誰」や「何」に向けられるかということが問題になるものであるとして、以下のように述べる。

むろん、ジェネレイティヴィティとは、何を気遣い、誰を大切にするかということがすでに決められていて、その上で我々が何や誰を世話しうるのか、世話するべきなのかを常に監視することが要求されるものである（Erikson, E.H. 1980a, pp.47）。

この点は、1982年の *The Life Cycle, Completed* において、「拒否性」と社会様式（モード）の重要性の指摘と関連させて、以下のように述べられている。

事実、人間は「ある程度、明確な拒否性をもちながら」選択をしなければ、（何ものかに対して）ジェネレイティヴでありかつケアに満ちているという状態には成り得ない。それゆえに倫理や法や洞察は、その集団における拒否性の許容範囲を定義し、

一方、宗教的ならびにイデオロギー的な信念体系が、より広範な共同体単位に対する、より普遍的な配慮(care)の原理を唱道し続けなければならないのである（Erikson, E.H. 1982 [1997] (22), p.68）。

このように、ジェネレイティヴィティが「拒否性」と相克不離の関係にあり、エリクソンがそのアンビヴァレンスや暴力性の調停や昇華を社会様式（モード）に求めたことは、前節で見てきた通りである。「拒否性」については、すでに1970年代に概念化されていたが、少なくとも1972年の時点では、「拒否性」はなお「遊戯性」によって克服されるべきものとして理解されていた。しかしながら、エリクソンは、フロイト-ユングの往復書簡ならびにフロイト-フリースの書簡において、フロイトやユングの示した「拒否性」を、「自己生成」や「創造性」に不可欠なものとしてそのまま受容する姿勢を見せている。

エリクソンは、まずフロイトとフリースの「創造的親密性」が最後には悲劇的な関係破綻を迎えたことを指摘し、その点に両者の「拒否性」を見ている。彼らは、「友情の結末において、相手だけではなく過去の自分も拒否し」（Erikson, E.H. 1980b, p.50）、書簡の破棄に同意していたほどであったという。

また、エリクソンはフロイトとユングについて、二人があたかも父と長男であるかのような関係を強めたのと同時に、書簡において彼らが他の精神分析家たちへの批判や差別、中傷を繰り返していたことに「拒否性」を指摘している。エリクソンは彼らの書簡から、こうした批判や差別、中傷を相当数抜き出して列記している。その中からフロイトとユングのコメントをそれぞれ一つだけ挙げてみよう（Erikson, E.H. 1980b, pp.59-60）。

「私たちの仲間には多種多様な人種が混ざっているのは極めて興味深いことだと思います。しかし、ジョーンズはケルト人ですから、結果的には我々のようなゲルマン人や地中海人種を完全に理解できるとはいいかねるわけです。」（フロイトからユングへ）

---

(22) エリクソンの1982年の著作 *the Life Cycle Completed*（1982 邦訳；村瀬孝雄・近藤郁夫訳『ライフサイクル、その完結』みすず書房 1989）に関して、本研究では、82年の原書が入手不可能であったため、1997年に妻のジョアンによって新たな章が加筆された増補版（Erikson, E.H. & Eriksson. M. 1997 *The Life Cycle Completed: Extended Version*, W. W. Norton, 村瀬孝雄・近藤郁夫訳『ライフサイクル、その完結＜増補版＞』みすず書房 2001）に基づいて引用した。増補版のエリクソンの執筆箇所のうち、とくにジェネレイティヴィティに関して、邦訳を照らし合わせた限りではほとんど変更がなく、82年のエリクソンの言明とみても問題はないと考えることができる。

「同僚A[アブラハム]のもつ特異性に対して、公然と軽蔑せざるを得ません。すぐれた資質と有徳にも関わらず、彼はとうてい紳士とはいえません。ほかの人なら見過ごせることでも、私の目には最悪と映るのです。」（ユングからフロイトへ）

エリクソンは、このようにして書簡に登場する人物のほとんどが、フロイトとユングの個人的感情から「精神分析という新しい特別な種族に適しているかどうか」を試されており、そしてそれは「（どんなに公平に見ても）無礼な仕方でなされていた」と述べる。そして、「私は、こうしたこと全体を説明するために、喜んで一つの威厳ある概念、すなわち成人の＜拒否性＞を導入しよう」というのである（Erikson, E.H. 1980b, p.59）。

とりわけ、エリクソンは、フロイトの書簡から多くの中傷や差別的発言のコメントを抜き出している。フロイトがユングを正当な精神分析の継承者として育てようとする意向が、「擬似種化」や「拒否性」と背中合わせであったことを見出しているといえるだろう。しかしながらこうした考察は、ジェネレイティヴィティの矛盾として位置づけられてはいないようである。エリクソンはこの論稿において、ここで「領土性（territoriality）」という概念を新しい「成人の重要なテーマ」として提示し、フロイトもユングも、「国際的な精神医学を超えて、人間的な世界の自覚というものを征服することに駆り立てられていた」、「征服者タイプの典型」であると述べている（Erikson, E.H. 1980b, p.62）。

そして、彼らの志向がとりわけ宗教や神話に関する見解を巡って異なる方向へ向かったことについて、エリクソンは「二人のジェネレイティヴな目標が決定的に分離し、執念深い拒否性を後に残すことになった」（Erikson, E.H. 1980b, p.70）と指摘しながらも、彼らのその後の人生を考えれば、「この往復書簡の大部分において、両者とも大いにケアしたことを、私たちは認めなければならない」（Erikson, E.H. 1980b, p.73）と述べるのである。こうした見解は、フロイトとユングの「拒否性」を彼らの創造的な仕事に不可欠な要素としてみるものであり、「拒否性」は、弁証法的に創造性へと止揚していくものとして解釈されていると見ることができよう。

この点に関して、*Life Cycle Completed*（1982）においては、「拒否性」という事実を受容することの重要性が主張される。エリクソンは次のように述べるのである。

何者をも拒否せず、排斥し得ないという無能力は、極端な自己－拒否と自己－排

斥に行き着かざるをえない(あるいはその結果としてしかありえない)(Erikson, E. H. 1982[1997], p. 71)。

拒否性を単に抑止しただけでは、自己ー拒否が生じてくる恐れが十分にある(Erikson, E. H. 1982[1997], p. 70)。

こうした言明は、人間が自己を確立すること、「アイデンティティ」を形成することを前提としたうえで、そのための不可避な事実として「拒否性」を受容するものである。エリクソンは、「拒否性」という否定的傾向が成人に不可避であるだけでなく、必要でもあると認め、フロイトとユングの往復書簡の解釈において、「拒否性」を創造的な仕事に昇華していく道筋として、偉大な精神分析家たちの「成人期」を描き出そうとした。

ここでエリクソンは、創造性ないし「自己生成」と、「相互性」との二つの要素を男女の性に即して完全に切り離したといえる。このような展開から振り返ってみれば、エリクソンが映画『野いちご』において、主人公を、過去や現在のアンビヴァレントな関係性を統合的に再構成して「自己生成」する成人男性として解釈し、主人公の息子の嫁を、周囲の関係に「相互性」をもたらすべく努力する存在—エンマと同じく「女性的ふるまい」のジェネレイティヴィティを体現する存在—として解釈していたことは明らかである。

こうした考察において、「拒否性」や暴力性、関係性のアンビヴァレンスが自己の創造性へと止揚されていく道筋は示されているが、他方、「女性的ふるまい」のなかで、そうした不協和的な要素がどのような様相を表すのかという点について、エリクソンは言及していない。ジェネレイティヴィティに関して、*Gandhi's Truth* の段階では、自己の創造性と暴力性とが「相互性」における未解決のジレンマとしてとどまっていたのに対し、1980年代において、エリクソンは「自己生成」と「相互性」とを男女の役割に振り分けることによって切り離し、それによってジレンマからの脱出をはかったということができるだろう。

以上、第五章では、1970 年代以降のエリクソンが、*Gandhi's Truth* において明らかになったジェネレイティヴィティの矛盾点や盲点を理論に組み入れるべく、「拒否性」という概念を作り出し、能動的なかかわりの負の側面を心理社会的発達理論に組み込み、「儀式化」に「遊戯性」という概念を結びつけることによって、一応の理論的再構成を行った

ことを明らかにした。その後、エリクソンは、映画『野いちご』において異世代関係を新たなアイデンティティ形成の契機としてとらえ、フロイト-ユングの往復書簡の解釈において、ジェネレイティヴィティを、「拒否性」を止揚していく「自己生成」の側面と生殖性や関係性を志向する「女性的ふるまい」の側面とに分裂させていった。

これらは、エリクソンの理論的関心が、「相互性」や世代サイクルを生み出す存在としての成人やその要としてのジェネレイティヴィティ概念ではなく、「成人期」や「老年期」におけるアイデンティティ発達に向けられていることを示すものだろう。そうした視点において、「親密性」については過去の議論において否定的に見られていた「二人の孤独」の関係が「創造的親密性」としてとらえ直され、映画『野いちご』の中の息子の妻やユングの妻エンマにおいては、1960代までの世代サイクル論の枠内におけるジェネレイティヴィティ概念が適用され、女性的役割として位置づけられたのである。

Gandhi's Truth において明らかになった、「相互性」における創造性と暴力性のジレンマについて、エリクソンは、フロイト-ユング往復書簡の解釈においてジェネレイティヴィティの創造性の側面と「相互性」の側面とを切り離し、分裂させ、それぞれを男女の性役割に振り分けることによって、このジレンマからの脱出を試みたということができるだろう。

結論

本研究では、1950 年から 1980 年代に至るまでの、エリクソンのジェネレイティヴィティ概念の形成過程を見てきた。基本的にエリクソンの研究を時系列にそって考察したが、それぞれの年代においては、以下のような過程があったことが明らかになった。

まず、50 年代と 60 年代においては、フロイトの理論を脱性化する方向で「親密性」との関連性が明確化されていく第一の系（50 年代）、ライフサイクル論の枠組みのなかで異世代間の「相互性」と「徳」の形成の関係が理論化されていく第二の系（60 年代）、そして「儀式化」概念が導入され、成人発達における社会様式（モード）の重要性が再確認されることになる第三の系（60 年代）として特徴づけることができた。この３つの系は、単に時系列的な整理ということだけではなく、エリクソンの視点がジェネレイティヴィティに関して、個体発生的発達から関係発達へ、そして社会様式(モード)という新たな軸の設定というように変化し、それとともに概念内容が全体としてより多様かつ複雑になっていったことを示している。全体から振り返ってみるなら、この時点で、ジェネレイティヴィティ概念については、ひとまず理論的な完成が見られたといってもよいだろう。

しかしながら、1969 年の *Gandhi's Truth* においてガンディーの人生に照らし合わせることで、ジェネレイティヴィティに関して 60 年代にまでに展開された議論は、新たに統合的・発展的にとらえられると同時に、その矛盾点や盲点を露呈することにもなった。統合的・発展的にとらえられた点としては、「相互性」や世代サイクルを支える儀式を施行する者としての成人には、「自分を忘れる」とともに「死を忘れ」、「世界を維持」し「現実に奉仕する」という側面があることが明示された。しかし、その無反省さゆえに、負の側面の世代間継承の問題が未解決のまま残されるということ、創造的ジェネレイティヴィティは必ずしも暴力性やアンビヴァレンスを克服するものではないということも明らかになった。これらの問題群は、エリクソン理論の３つの系の調和的統合をポジとすれば、ちょうどそのネガとして、新たな「相互性」の型を創造した偉大な人物ですら、他者への暴力性を拭い去ることはできないという矛盾を示すものである。さらに、「成人期」において過去の人生段階における諸葛藤を克服し様々の「徳」を統合していなくても、悪循環という意味でもジェネレイティヴィティは成立してしまうという、社会進化論的傾向に矛盾する結論も導かれた。

70 年代以降のエリクソンは、まず *Gandhi's Truth* において明らかになったジェネレイ

ティヴィティの矛盾点や盲点を理論に組み入れようとした。「拒否性」という概念を作り出し、能動的なかかわりの負の側面を心理社会的発達理論に組み込み、「儀式化」に「遊戯性」という概念を結びつけることによって、一応の理論的再構成が行われた。しかしながら、エリクソンは、その後の著作において、再構成したはずの理論にほとんど依拠していない。むしろ、人生後半の自己探求、自己の創造性という観点から、ジェネレイティヴィティに新しい要素がつけ加えられていく。

エリクソンは、ジェファソン講演において、理想を体現する成人性の追求を示唆し、映画『野いちご』の解釈においては、異世代関係を新たなアイデンティティ形成の契機としてとらえる視座を打ち出した。フロイト-ユングの往復書簡の解釈においては、ジェネレイティヴィティに「自己生成」という新たな要素を付加した。80年代のエリクソンの関心は「相互性」や「世代サイクル」から、自己のアイデンティティ探求に移っていったが、このような変移とともに、かつてジェネレイティヴィティへの発達を阻止するものとして否定的にとらえた「二人の孤独」の関係は「創造的親密性」としてとらえ直され、「自己生成」と「拒否性」との弁証法的な関係が明示される。*Gandhi's Truth* において明らかになった創造性と暴力性のジレンマについては、フロイトやユングの示した「拒否性」を彼らの「自己生成」および創造的な仕事の重要な契機として位置づけ、統合的な視点のもとにとらえようとした。アンビヴァレンスやジレンマが拭い去れない生殖性や関係性志向的なジェネレイティヴィティについては、それらを女性的なものとみなして切り離し、ジレンマを脱そうとしたといえる。50年代、60年代を通して考察されてきた、「相互性」や「世代サイクル」の要としてのジェネレイティヴィティは、80年代において女性的ジェネレイティヴィティとして示されることになったのである。

エリクソンの発達理論が男性中心的で性に関してステレオタイプ的であることは、すでにGilligan(1982)を中心にフェミニズムからも多くの批判が寄せられている。たしかに、彼が一貫して、予定調和的な「相互性」の原型を母子関係に求め、負の世代間伝達の相克的な関係を父子関係においてのみ考察している点には、ステレオタイプ的な役割解釈が反映されているといえ、また最終的にジェネレイティヴィティを男女の性に振り分けている点にも、そうした傾向が見られる。

しかしながら、ジェネレイティヴィティに関してのみ考えるなら、エリクソンがこの概念についてはじめから男性中心的な発想をしていたとはいえない。概念形成の過程を見る限り、少なくともはじめは脱性化する方向で議論が展開されていた。そして晩年に、解決

しえない関係性のアンビヴァレンスやジレンマから脱する理論的手立てとして、性差が利用されたのである。そこでは性差に関する理論的な根拠はいっさい示されておらず、エリクソン自身のもつ素朴な性イメージが反映されているにすぎない。

このことから考えるなら、エリクソンのジェネレイティヴィティ概念の形成過程の結論がステレオタイプ的な性差の強調にあるとみなすことは適切ではないだろう。エリクソンの議論展開にはそうした方向性を指摘することはできるが、しかしその問題の根底には、*Gandhi's Truth* において明らかになった、異世代間の関係性において解決しえないジレンマがあるという事実、また「相互性」には創造性と暴力性とのジレンマが生じるという事実、このことに関する問題が未解決のまま横たわっていたというべきである。

本研究は、臨床的関心からではなく、理論研究として、概念の形成過程を再構成するものであった。エリクソンは、ジェネレイティヴィティについて、性、親密性、世代サイクル、徳、社会進化、儀式化、創造性、自己生成、アンビヴァレンス、ジレンマ、拒否性、暴力性など、さまざまなファクターから考察を展開したが、それに応じて、ジェネレイティヴィティ概念の内容が多様化し、またこの概念をとらえる文脈が複雑化していった過程が明らかになったということができる。そのなかでも、とくにこれまでのジェネレイティヴィティ研究でほとんど言及されていない点として、ジェネレイティヴィティの「自己の死を忘れる」という側面、「儀式化」などの社会様式（モード）との本質的な関係性、ジレンマをめぐるエリクソンの模索等を改めて確認できたと言えよう。

ジェネレイティヴィティに関するエリクソンの問題意識については、エリクソン自身の人生の過程が反映しているとみることもできるだろう。とくに、60年代は「徳」の形成や「世代サイクル」の構造、成人の次世代に対する責任などについて議論が展開されたが、これはエリクソンがアメリカ合衆国で知識人として認められ、ハーヴァード大学に職を得て、積極的に学生の育成にあたっていた時期と重なってもいる。彼が障害を持って生まれた息子を見捨てていたことは、60年代にジェネレイティヴィティ概念が社会進化論的、優生学的傾向を帯びていったことと結びついているのかもしれない。また、エリクソン自身が80代という高齢にあった80年代では、彼の問題意識は「相互性」や「世代サイクル」よりも、人生後半のアイデンティティ探求へと移り変わっていった。もちろん、エリクソンの理論構築過程を彼の人生過程と安易に結びつけることには慎重になる必要がある。しかし、ジェネレイティヴィティ概念の形成過程に限っていえば、上記のように、この概念の形成過程はエリクソン自身の人生過程とある程度の関連性を示していると考えられよう。

エピジェネティック・チャートの空白解釈においては、エリクソンのテキストの内容を位置づけてみるというアプローチによって、とくに60年代までの考察において、彼の提示した心理社会的発達項目が相互に関連しあい、暫定的なバランスを保ちながら再構成され、積み上げられていくものであるということを視覚的にとらえることができた。また、テキストとチャートを往復し、空白の意味は多様な視点から解釈しうるものであるという可能性も明示できたといえよう。

本研究で明らかになったジェネレイティヴィティ概念の形成過程は、葛藤や危機やジレンマを解決しえず、統合しえないジレンマを抱えた存在としての成人、社会の形成や維持、次世代の育成にあたって矛盾を抱え込まざるをえない成人の姿を、結果として描き出しているといえるだろう。そうした意味で、本研究は、ジェネレイティヴィティ概念が単純に成人の幸福感や生きがいを表すものではないことを明示するものである。これは、エリクソン理論の予定調和的なイメージを覆すものであると思われるが、しかしながら、エリクソン自身は社会様式（モード）や男女の性役割などに問題の解決を求めることで、このジレンマから脱しているとも言える。この点の是非を含めて、さらに考察を深めていくためには、彼の理論形成を歴史的観点からとらえることや、あるいはジェネレイティヴィティ概念を具体的に臨床的観点から検討することが必要となってくる。理論研究としての本研究は、そうした発展的研究の基礎を成すものであるといえよう。

引用文献ならびに参考文献一覧

Aubin, Ed de St. & MacAdams, D.P. & Kim, T. 2004 *the Generative Society*, American Psychological Association

Browning, D. 1978 A Normative Image of Man, *Childhood and Selfhood*, Associated University Press

Capps, D. & Capps, W.H. & Bradford, M.G. 1977 *Encounter with Erikson: Historical Interpretation and Religious Biography*, Scholars Press

Coles, R. 1970 *E. H. Erikson: the Growth of His Work*, An Atlantic Monthly Press Book, 鑪 幹八郎訳『E.H.エリクソンの研究 上・下』ぺりかん社 1980

Coles, R. 2000 *The Erik Erikson Reader*, W. W. Norton

deMause, L. 1982 *The Evolution of Childhood*, Foundations of Psychohistory, 宮澤康人他 訳『親子関係の進化 子ども期の心理発生的歴史学』海鳴社 1990

Emmons, R.A. 1999 *The Psychology of Ultimate Concerns: Motivation and Spirituality in Personality*, The Guilford Press

Erikson, E.H. 1937 Configurations in Play— Clinical Notes, *A Way of Looking at Things*, Schlein, S. 1987, W. W. Norton

Erikson, E.H. 1950 *Childhood and Society*, W. W. Norton, 草野栄三良訳『幼年期と社会』日本教文社 1956

Erikson, E.H. 1958 *Young Man Luther*, W. W. Norton 大沼隆訳『青年ルター』1974 (絶版) 西平 直訳『青年ルター』みすず書房 2003

Erikson, E.H. 1959 Identity and The Life Cycle, W. W. Norton 小此木啓吾訳『自我同一性』誠信書房 1973

Erikson, E.H. 1962 Reality and Actuality, *Journal of American Psychoanalysis Association*, Vol. X, No. 3, pp. 451-473.

Erikson, E.H. 1963 *Childhood and Society* (2nd Ed), W. W. Norton, 仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房 1973

Erikson, E.H. 1964 *Insight and Responsibility*, W. W. Norton, 鑪 幹八郎訳『洞察と責任』誠信書房 1971

Erikson, E.H. 1966 The Ontogeny of Ritualization in Man, *A Way of Looking at Things*, Schlein, S. 1987, W. W. Norton

Erikson, E.H. 1968a *Identity: Youth and Crisis*, W. W. Norton, 岩瀬庸理訳『アイデンティティ青年と危機』金沢文庫 1973

Erikson, E.H. 1968b Life Cycle, *The International Encyclopedia of the Social Sciences 9*, Macmillan and Free Press, p. 286-292.

Erikson, E.H. 1969 *Gandhi's Truth*, W. W. Norton, 星野美賀子訳『ガンディーの真理 1・2』みすず書房 1973

Erikson, E.H. 1974 *Dimensions of a New Identity*, W. W. Norton, 五十嵐武士訳『歴史の中のアイデンティティ ジェファソンと現代』みすず書房 1979

Erikson, E.H. 1976 Reflections on Dr. Borg's life cycle, *Adulthood*, W. W. Norton

Erikson, E.H. 1977 *Toys and Reasons*, W. W. Norton, 近藤邦夫訳『玩具と理性』みすず書房 2000

Erikson, E.H. 1978 *Adulthood*, W. W. Norton

Erikson, E.H. 1980a Themes of Adulthood in the Freud-Jung Correspondence *Themes of Work and Love in Adulthood*, Harvard university Press, 西平 直訳 「フロイトーユング 往復書簡における<大人であること>という主題」『みすず』366, 368, 369, 1991

Erikson, E.H. 1980b On the Generational Cycle, *International Journal of Psychological Analysis*, Vol. 61, pp. 213-223.

Erikson, E.H. 1981 On Generativity and Identity, *Harvard Educational Review*, vol. 51-2, pp. 249-269.

Erikson, E.H. 1982 *The Life Cycle Completed*, W. W. Norton, 村瀬孝雄・近藤郁夫訳『ライフサイクル、その完結』みすず書房 1989

Erikson, E.H. 1986 *Vital Involvement in Old Age*, W. W. Norton, 朝長生徳・朝長梨枝子訳『老年期』みすず書房 1989

Erikson, E.H. & Erikson. J.M. 1997 *The Life Cycle Completed: Extended Version*, W. W. Norton, 村瀬孝雄・近藤郁夫訳『ライフサイクル、その完結<増補版>』みすず書房 2001

Erikson, K. 2004 Reflection on Generativity and Society: A Sociologist Perspective, *The Generative Society*, Aubin, de St. & MacAdams, D. P. & Kim. American Psychological Association

Erikson. J.M. 1988 *Wisdom and the Senses*, W. W. Norton

Evans, R.I. 1967 *Dialogue with E. H. Erikson*, Harper and Row, 岡堂哲雄中園正身訳『エリクソンは語る—アイデンティティの心理学—』新曜社 1981

Franz, C.E. & White, K.M. 1985 Individuation and attachment in Personality development: Extending Eriksson's theory, *Journal of Personality*, Vol. 53, pp. 224-256.

Friedman, L.J. 1999 *Identity's Architect*, Scribner, やまだようこ・西平 直監訳『エリクソンの人生 上・下』新曜社 2003

Gilligan, C. 1982 *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Harvard University Press, 生田久美子他 訳『もうひとつの声』川島書店 1986

広井良典 1997『ケアを問いなおす―〈深層の時間〉と高齢化社会』筑摩書房

Kotre, J. 1984 *Outliving the Self*, W. W. Norton

鯨岡 峻 1999『関係発達論の構築』ミネルヴァ書房

鯨岡 峻 2002『＜育てられるもの＞から＜育てるもの＞へ』NHK ブックス

木田元・阿部美哉他 監修 2001『20 世紀思想家事典』誠信書房 Edited by Devine, E. & Held, M. & Vinson, J. & Walsh, G. 1985 *Thinkers of the Twentieth Century: A Biographical and Critical Dictionary*, St. James Press

Lifton, R.J. 1976 *The Life if the Self : Toward A New Psychology*, Basic Books,『現代、死にふれて生きる』渡辺牧・水野節夫訳 有信堂 1989

MacAdams, D.P. & Aubin, Ed de St. 1998 Generativity and Adult Development, American Psychological Association

MacAdams, D.P. & Logan, R.L. 2004 What is Generativity? *The Generative Society*, Aubin, Ed de St. & MacAdams, D. P. & Kim, T., American Psychological Association

Mayeroff, M. 1971 *On Caring*, Harper & Row, 田村真・向野宣之 訳『ケアの本質―生きることの意味』ゆみる出版 1987

森 昭 1977『人間形成原論 遺稿』黎明書房

西平 直 1985「E.H.エリクソンの virtue 概念－発達的視点と規範性の問題」『教育学研究』第 52 巻第 2 号, pp. 214-223.

西平 直 1993『エリクソンの人間学』東京大学出版会

Noddings, N. 1984 *Caring: A Feminine Approach to Ethics & Moral Education*, University of California Press, 立山善康他 訳『ケアリング』晃洋書房

岡本祐子 2002 編著『アイデンティティ生涯発達論の射程』ミネルヴァ書房

小此木啓吾 1974「臨床家エリクソンのジレンマ」『現代思想』第 2 巻第 3 号, pp. 111-124.

Roazen, P. 1976 *E. H. Erikson The Power and Limits of A Vision*, The Free Press, 福島章・大沼隆・高原恵子訳『アイデンティティ論を超えて』誠心書房 1984

讃岐幸治・田中毎実 1995『ライフサイクルと教育』青葉図書

Schlein, S. 1987 *A Way of Looking at Things: selected papers from 1930 to 1980*, W. W. Norton

田中毎実 1996a「人間形成論の内容的展開の試み－ライフサイクル論と相互形成」岡田渥美編『人間形成論－教育学の再構築』玉川大学出版会

田中毎実 1996b「教育責任の人間形成論のために」岡田渥美編『教育責任に関する人間形成論的総合研究』文部科学省科学研究費補助金平成5･6･7年度（総合研究A）研究成果報告書

田中毎実 2003『臨床的人間形成論へ　ライフサイクルと相互形成』教育思想双書3　勁草書房

谷村千絵 1999「E.H.エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する考察―ライフサイクルとかかわりのダイナミズム―」『教育哲学研究』教育哲学会 第80号, pp. 48-63.

谷村千絵 2000「E.H.エリクソンの＜care＞概念に関する考察―他者への関心と自己へのまなざし―」『大阪大学教育学年報』大阪大学人間科学部教育学研究室 第5号, pp. 1-13.

谷村千絵 2003「『必要とされること』の位相―小学校でのアシスタント・ティーチャー体験を通して―」『大阪大学教育学年報』大阪大学大学院人間科学研究科教育学系 第8号, pp. 75-86.

Wakefield, J.C. 1998 Immortality and the Externalization of the Self: Plato's Unrecognized Theory of Generativity, *Generativity and Adult Development,* MacAdams, D. P. & Aubin, Ed de St., American Psychological Association

鷲田清一 1999『「聴く」ことの力―臨床的哲学試論』ＴＢＳブルタニカ

やまだようこ 1999「喪失と生成のライフストーリー」『発達』第79号、ミネルヴァ書房

やまだようこ 2000『人生を物語る』ミネルヴァ書房

やまだようこ 2001「エリクソンの子どもたちと生成継承性」『教育学年報８　子どもの問題』世織書房

Yamada, Y. 2004 The Generative Life Cycle Model: Integration of Japanese Folk Images and Generativity, *The Generative Society,* Aubin, *Ed* de St. & MacAdams, D. P. & Kim, T. American Psychological Association, pp. 97-112.

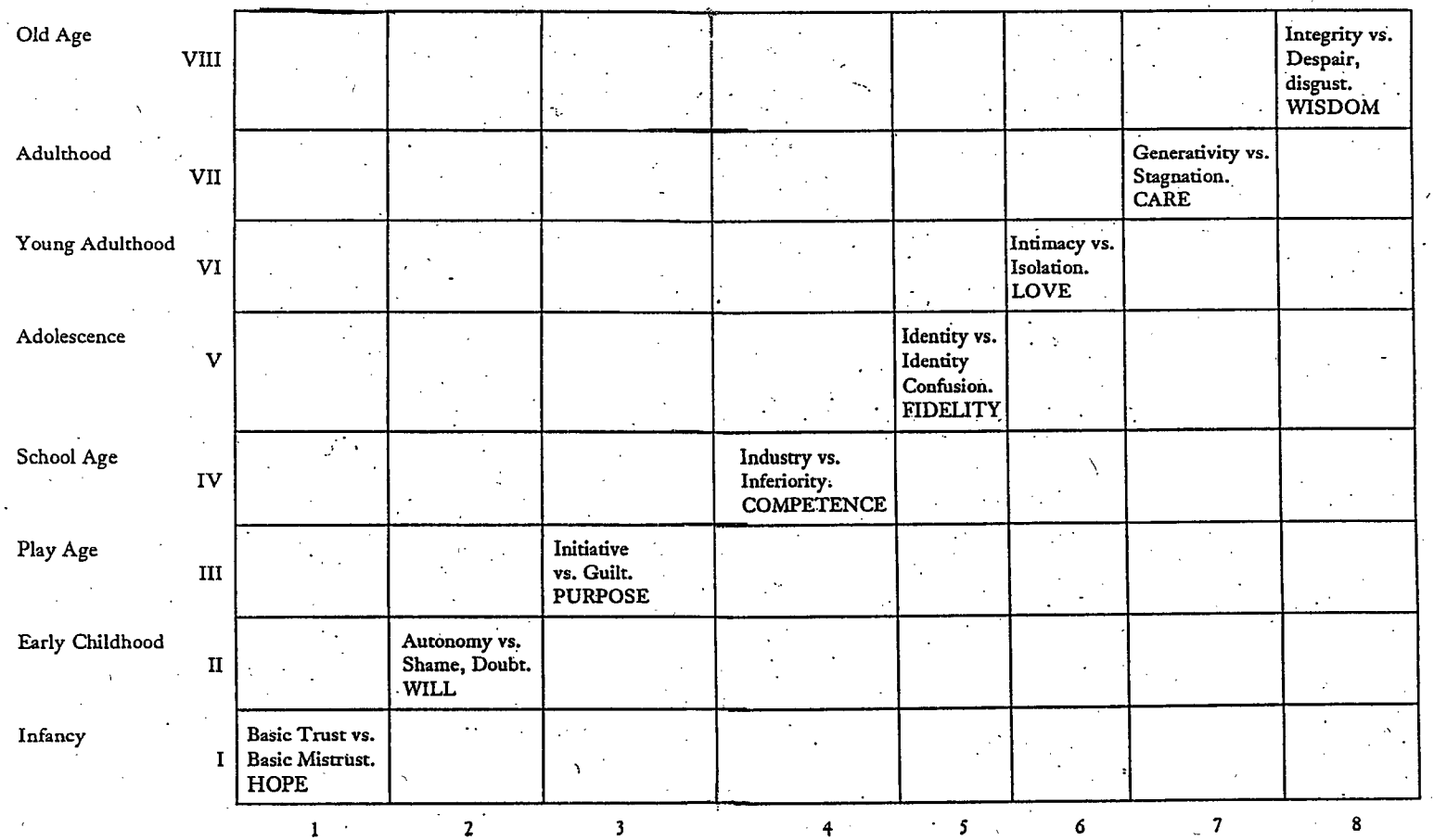
柳沢昌一 1985「E.H.エリクソンの心理社会的発達理論における「世代サイクル」の視点」『教育学研究』第52巻第4号, pp. 396-406.

巻末図表

図 1-1　Epigenetic Chart
図 1-2　エピジェネティック・チャート
図 1-3　1937 年のチャート
図 1-4　ジョアンの織物
図 2　フランツ／ホワイトによるエリクソンのエピジェネティック・チャートの応用
図 3　作業チャート
図 4　Ontogeny of Ritualization「儀式化の個体発生」
図 5　心理社会的発達の理論的概観図

図1-1 Epigenetic Chart

Lifecycle Completed（1997）所収



		1	2	3	4	5	6	7	8
Old Age	VIII								Integrity vs. Despair, disgust. WISDOM
Adulthood	VII							Generativity vs. Stagnation. CARE	
Young Adulthood	VI						Intimacy vs. Isolation. LOVE		
Adolescence	V					Identity vs. Identity Confusion. FIDELITY			
School Age	IV				Industry vs. Inferiority. COMPETENCE				
Play Age	III			Initiative vs. Guilt. PURPOSE					
Early Childhood	II		Autonomy vs. Shame, Doubt. WILL						
Infancy	I	Basic Trust vs. Basic Mistrust. HOPE							

図 1-2 エピジェネティック・チャート

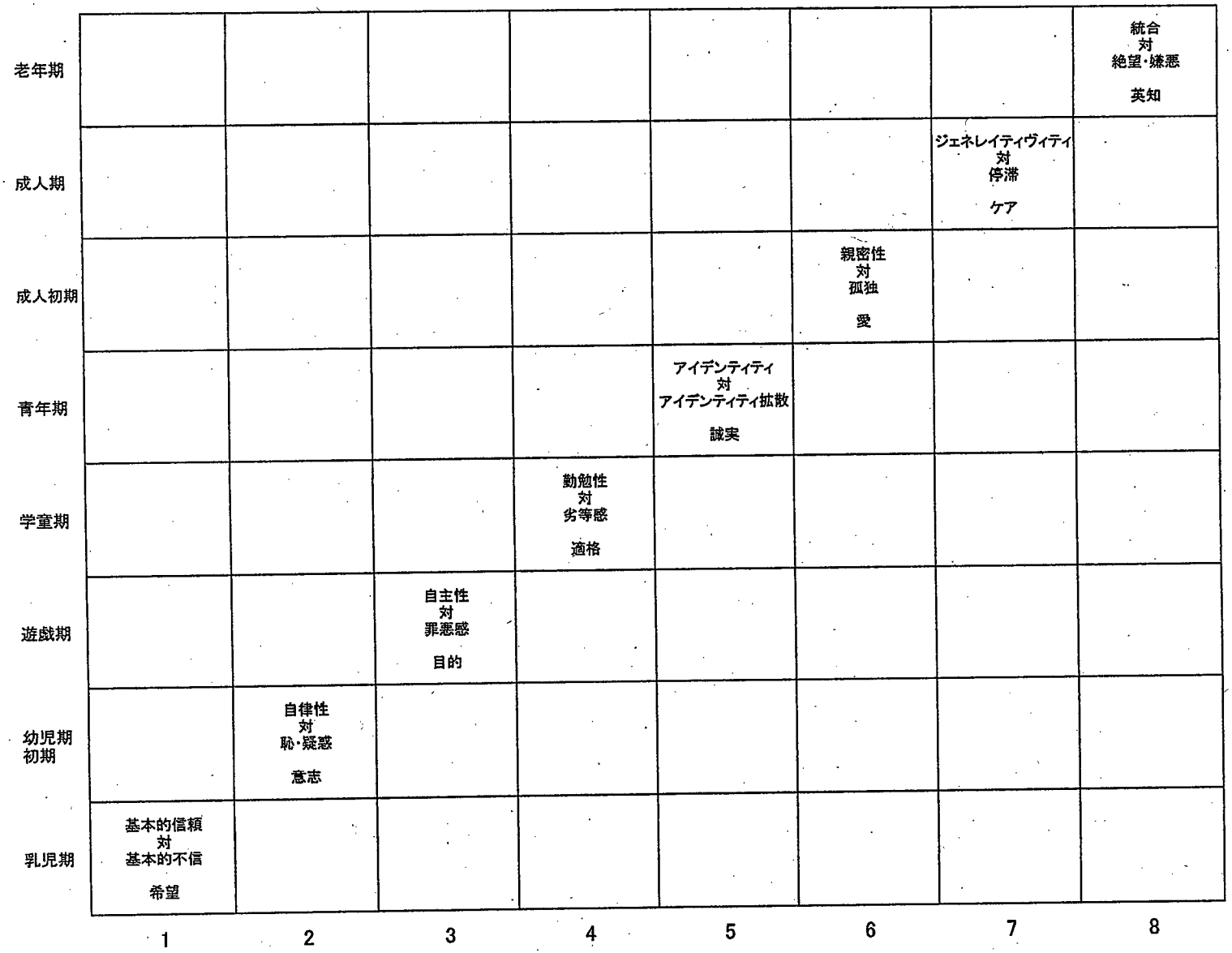


図 1-3　1937年のチャート

Configulations in Play — Clinical Notes (1937) 所収

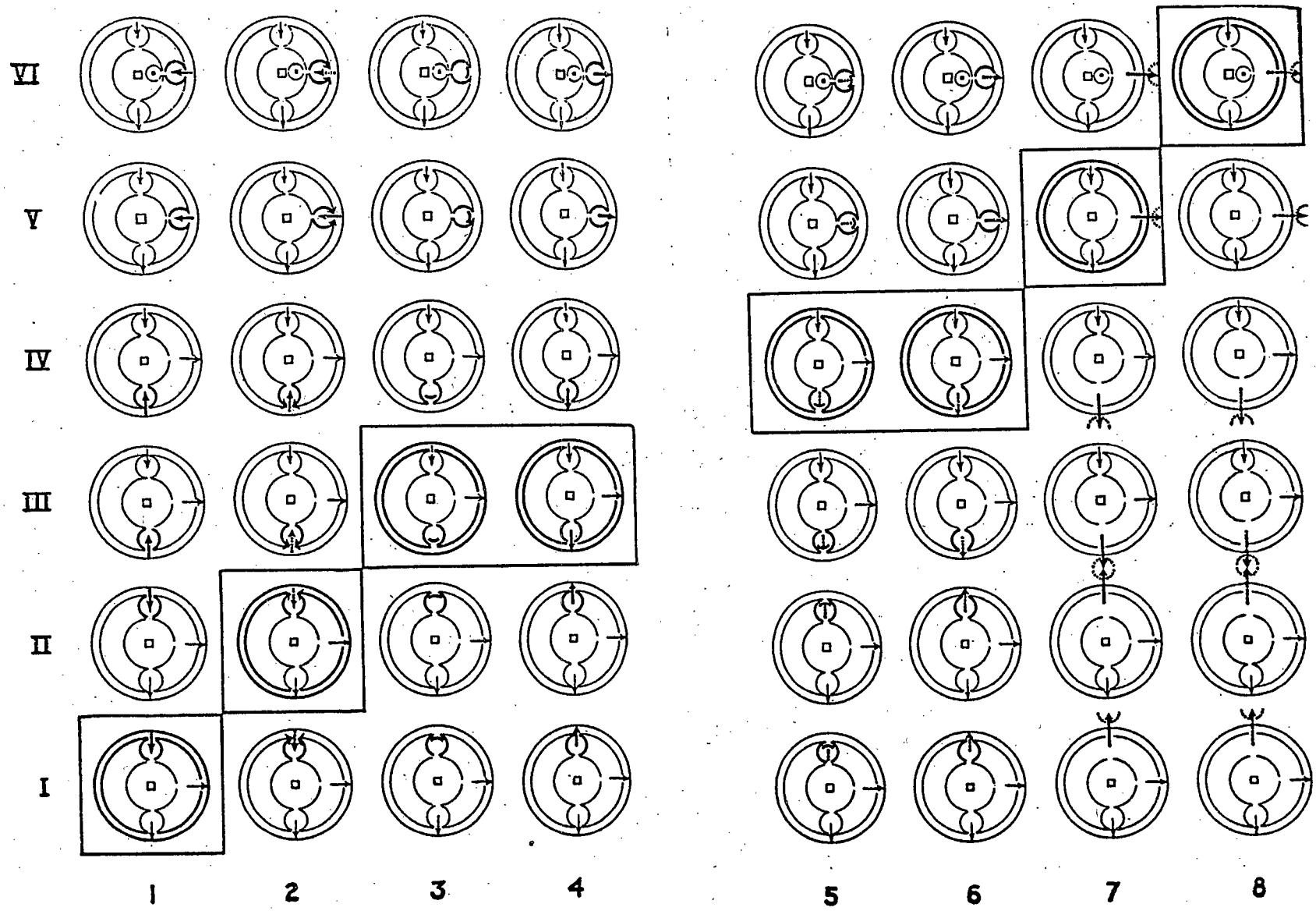


図 1-4　ジョアンの織物

Erikson,J.M *Wisdomand the Senses*(1988)所収

図2

フランツ／ホワイトによるエリクソンのエピジェネティック・チャートの応用
愛着の発達経路及び他の発達段階での愛着感覚の顕在化を示すためのもの

Franz,C.E. & White, K.M. Individuation and attachment in personality development:Extending Erikson's theor (1985)

日本語版　岡本祐子編著『アイデンティティ生涯発達理論の射程』(2002) 所収

心理社会的危機の標準的な年代	1	2	3	4	5	6	7	8
1 乳児期	信頼 対 不信				一極性 対 早熟な自己分化		受容と原始的同一化 対 生物学上の親の拒否	
2 幼児前期		自律性 対 恥・疑惑			両極性 対 自閉		安全なアタッチメント 対 ナルシシズム	
3 幼児後期			自主性 対 罪悪感		遊戯的同一化 対 (エディパルな) 空想アイデンティティ		想像的遊戯性と同一化 対 制止	
4 学童期				勤勉性 対 劣等感	労働同一化 対 予定アイデンティティ		自己の発展可能性の感覚・僚友関係 対 義務依存	
5 青年期	時間的展望 対 時間的拡散	自己確信 対 アイデンティティ混乱	役割実験 対 否定的アイデンティティ	達成の期待 対 労働麻痺	アイデンティティ達成 対 アイデンティティ拡散	性的アイデンティティ 対 両性的拡散	指導性の分極化 対 権威の拡散	イデオロギーの分極化 対 理想の拡散
6 成人前期					連帯 対 社会的孤立	親密性 対 孤立	社会的ネットワークへの位置付け 対 隠遁	
7 成人中期	共生または依存 対 引きこもり	社会的関係における満足 対 自己執着	価値平等性の感覚・コンパニオンシップ 対 嫉妬・憤怒	共同性・世界共有感覚 対 自己拘束	相互依存・耐性 対 全体主義 (過剰なまたは過小な同一化)	公共性 対 偽親密性	世代性 対 自己陶酔 (停滞)	人間的結合 対 人間性の拒絶
8 老年期								統合性 対 絶望

図3 作業チャート

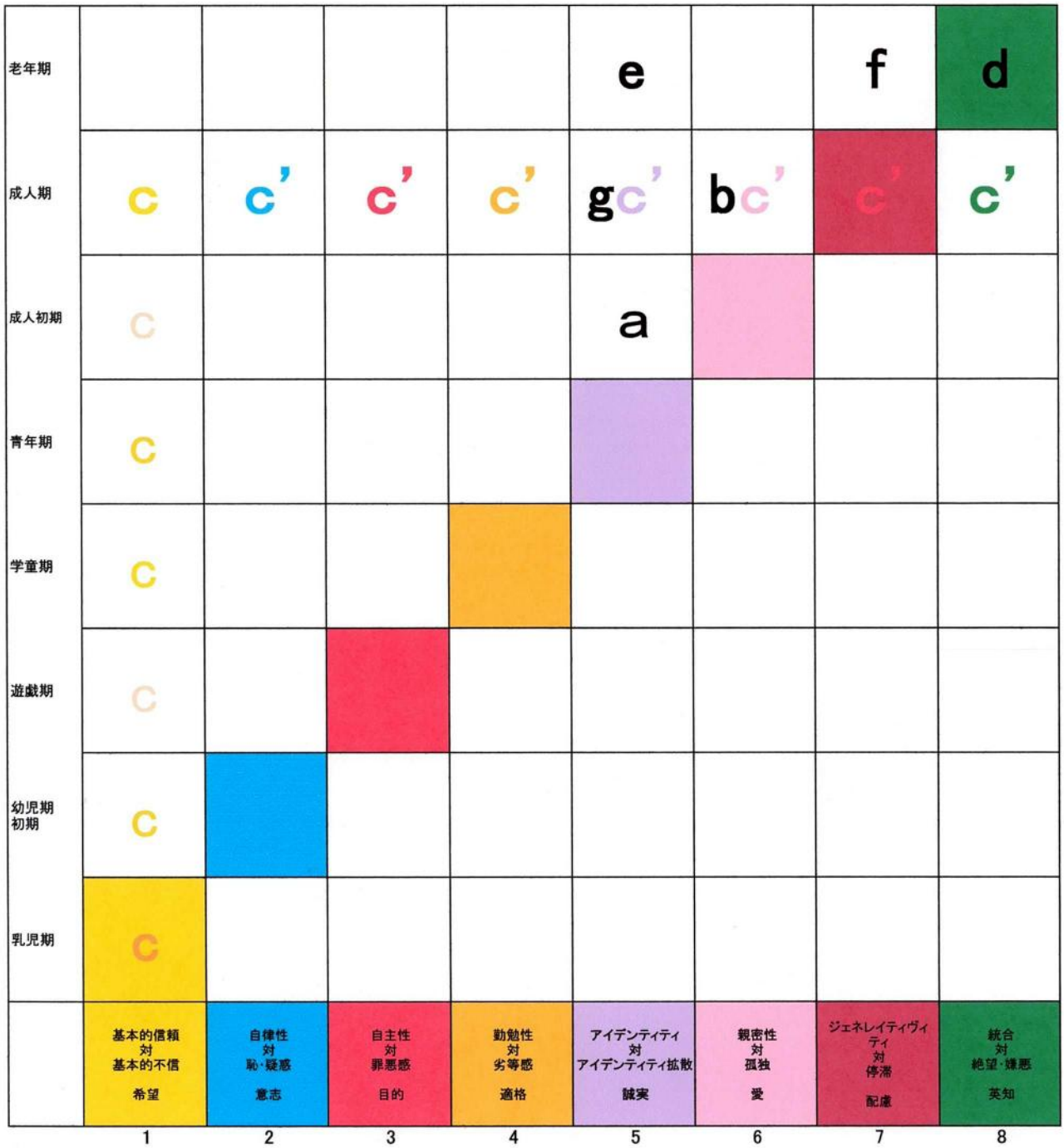

老年期
成人期
成人初期
青年期
学童期
遊戯期
幼児期
初期
乳児期
e
f
d
c
c'
c'
c'
gc'
bc'
c'
c'
c
a
c
c
c
c
c
基本的信頼
対
基本的不信
希望
自律性
対
恥・疑惑
意志
自主性
対
罪悪感
目的
勤勉性
対
劣等感
適格
アイデンティティ
対
アイデンティティ拡散
誠実
親密性
対
孤独
愛
ジェネレイティヴィティ
対
停滞
配慮
統合
対
絶望・嫌悪
英知
1
2
3
4
5
6
7
8

図4　Ontogeny of Ritualization「儀式化の個体発生」　　Toys and Reasons（1977）日本語版『玩具と理性』（1981）所収

infancy	mutuality of recognition					
early childhood	↓	discrimination of good and bad				
play age	↓	↓	dramatic elaboration			
school age	↓	↓	↓	rules of performance		
adolescence	↓	↓	↓	↓	solidarity of conviction	
elements in adult rituals	NUMINOUS	JUDICIOUS	DRAMATIC	FORMAL	IDEOLOGICAL	GENERATIONAL SANCTION

乳　児　期	相互的認知					
幼児期初期	↓	善悪の区別				
遊　戯　期	↓	↓	演劇的彫琢			
学　童　期	↓	↓	↓	遂行のルール		
青　年　期	↓	↓	↓	↓	信念の共同一致	
成人の儀式における諸要素	ヌミノース的	裁　判　的	演　劇　的	形　式　的	イデオロギー的	世代継承的裁　可

図5　心理社会的発達の理論的概観図

日本語版『ライフサイクル、その完結』（1997）所収

発達段階	A 心理・性的な段階と様式	B 心理・社会的危機	C 重要な関係の範囲	D 基本的強さ	E 中核的病理 基本的な不協和傾向	F 関連する社会秩序の原理	G 統合的儀式化	H 儀式主義
I　乳児期	口唇－呼吸器的，感覚－筋肉運動的（取り入れ的）	基本的信頼 対 基本的不信	母親的人物	希　望	引きこもり	宇宙的秩序	ヌミノース的	偶像崇拝
II　幼児期初期	肛門－尿道的，筋肉的（把持－排泄的）	自律性 対 恥，疑惑	親的人物	意　志	強　迫	「法と秩序」	分別的（裁判的）	法律至上主義
III　遊戯期	幼児－性器的，移動的（侵入的，包含的）	自主性 対 罪悪感	基本家族	目　的	制　止	理想の原型	演劇的	道徳主義
IV　学童期	「潜伏期」	勤勉性 対 劣等感	「近隣」，学校	適　格	不活発	技術的秩序	形式的	形式主義
V　青年期	思春期	同一性 対 同一性の混乱	仲間集団と外集団：リーダーシップの諸モデル	忠　誠	役割拒否	イデオロギー的世界観	イデオロギー的	トータリズム
VI　前成人期	性器期	親密　対　孤立	友情，性愛，競争，協力の関係におけるパートナー	愛	排他性	協力と競争のパターン	提携的	エリート意識
VII　成人期	（子孫を生み出す）	生殖性 対 停滞性	（分担する）労働 と （共有する）家庭	世　話	拒否性	教育と伝統の思潮	世代継承的	権威至上主義
VIII　老年期	（感性的モードの普遍化）	統合　対　絶望	「人類」 「私の種族」	英　知	侮　蔑	英　知	哲学的	ドグマティズム

謝辞

本研究の執筆にあたって、大阪大学人間科学研究科教育人間学研究室の藤川信夫先生に、非常なお力添えとご指導を頂きました。藤川先生には「論理」という道具の使い方を、職人技をもって教えていただいたと思います。また、エリクソンのテキストと適切な距離がとれずに右往左往する筆者に対し、常に冷静なコメントを下さいました。藤川先生からのそうした助言がなくては、この研究はとうてい論文という形になり得なかったと思います。本当に、ご指導ありがとうございました。

教育人間学研究室の現助手中戸義雄先生、研究室の先輩である田中毎実先生、山崎洋子先生、岡部美香先生には、叱咤激励を頂きましたが、また同時に、あたたかく見守ってもいただきました。ご心配をおかけしましたが、本当にありがとうございました。教育人間学研究室の院生のみなさん、学部生のみなさんにもありがとう。

元指導教官で現日本大学教授の平野正久先生にも、ご指導を頂きました。とくに、筆者が行き詰っていたとき、今現在の自分の考えを言葉にしてみることに意味があるといって下さったことは、大きな励みになりました。本当に、ありがとうございました。

2003年12月24日

谷村千絵

E・H・エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する考察

——ライフサイクルとかかわりのダイナミズム——

谷村千絵

一、問題と目的

今世紀アメリカで活躍した精神分析家E・H・エリクソン(Erik H. Erikson 1902-1994)は、人の一生を連続する八つの局面(stages)でとらえている。「ライフサイクル(life cycle)」という名とともによく知られるその理論は、わが国でも生涯発達概念を支える代表的な理論といえよう。なかでも、ライフサイクルの五番目の局面である「青年期」の「アイデンティティ(identity)」概念は、エリクソン以後、社会学、心理学、教育学をはじめ様々な分野で、人間という存在を解き明かすための鍵概念として活用されてきた。とりわけ発達心理学や教育学においては人間の成長発達の基軸として理解され、「青年期」に限らず生涯を通して発達し続けるものであることが指摘されてきた。(1)

しかしながら、アイデンティティのみを重視しすぎると「ライフサイクル自体があまりにも自分中心的なものになりうる」とエリクソンが危惧を示しているように、(2)アイデンティティ中心にライフサイクルをとらえると、人生(ライフ)は個人的に直線的に進みゆくものとしてイメージされやすい。これではエリクソンが人の一生を「サイクル」としてみる、その「サイクル」の含蓄が十分にとらえられているとはいえないだろう。エリクソンは、人生は人との(あるいは世界との)かかわりによってサイクルを成し、それによって「世代サイクル(generation cycle)」が紡がれてゆくということを示している。とりわけ、「成人期」のジェネレイティヴィティ(generativity)からライフサイクルをとらえるならば、かかわりのサイクルの中に人生があり、アイデンティティもまたその中にあるものとしてとらえられていることが明らかとなるだろう。そこでは、人生は個人のものとして直線的に進むものではなく、自他が複雑に絡み合って紡がれてゆくものとしてイメージされているといえる。

ジェネレイティヴィティ概念はアイデンティティほど注目されてこなかったが、アメリカでは一九七九年に神学者ブラウニングが理想的人間像を示す概念として着目しているほか、(3)近年では発達心理学の分野で研究が増え、成人の幸福感(wellness)と非常に高い関

連性があることが実証されている。[4] 日本においては、生涯発達研究でエリクソンのライフサイクル論が取り上げられる際に「成人期」の発達を示すものとして言及されることも少なくなく、[5] また、世代を超えるかかわりを示している点で、人間の有限な人生に意味を与える概念として取り上げているものもある。[6] ところが、これらの研究においてジェネレイティヴィティは、アイデンティティ発達の延長線上にある「発達課題」[7]としてとらえられていたり、そこに描かれるかかわりは予定調和的であったりと、個人中心の直線的な人生というイメージが拭い去られているとは言い難い。人にかかわるとは（あるいは世界にかかわるとは）どういうことか、どのような葛藤があるのか（あるいはないのか）、なぜ人生（ライフ）がサイクルを成し世代サイクルが紡がれてゆくのか、ということを解き明かす概念として注目されることは、ほとんどないのである。

ここで、エリクソンの研究の根幹を貫くテーマの一つが、予定調和的には進まないかかわりの葛藤であることを強調しておこう。彼の理論的基盤となった初著 ***Childhood and Society*** において、エリクソンは大人と子どもの関係に「非対等性（inequality）」と「搾取可能性（exploitivity）」を指摘し、人生はこの関係を所与のものとして始まることを明らかにしている。[8] また、アイデンティティに関するサイコヒストリー研究として有名な ***Young Man Luther*** においては、ルターとその父親のアンビヴァレントな関係が考察のポイントになり、[9] そして中年期の人間を考察の対象にした ***Gandhi's Truth*** においては、ガンディーの打ち出した「戦闘的非暴力」という方法、あるいは「真理の力」という信念はいわゆる「聖人」のものではなく、ガンディーが自らの生活史においてかかわりあった人々との現実的な葛藤と切り離せないものであることが示唆されている。[10] また、アメリカ大統領ジェファソンを取り上げた講演では、ジェファソンのかかわった現実世界の多面性が「多元的アイデンティティ」の形成を可能にし、それが大統領としての偉業に結びつくものであったことを指摘している。[11] 人や、世界にかかわることから生じる葛藤が人生の原動力となって、ライフサイクルと世代サイクルが生成する。エリクソンのこうした考察は、彼のジェネレイティヴィティ概念の核心に触れるものであるといえよう。

本稿では、かかわりはアンビヴァレントな葛藤を生じるものであるという仮説的前提に立って、ジェネレイティヴィティ概念を明らかにしたい。そのことによって、ライフサイクルと世代サイクルが生成する構造が解明され、人生は個として直線的に進みゆくのものではなく、様々な他者とかかわる現実の中で複合的に紡がれてゆくものとして描くことができると思われるからである。

二、概念形成の過程と訳語について

まず、ジェネレイティヴィティ概念の形成過程を整理しておこう。

エリクソンは初著 *Childhood and Society* (1950) から、最後の著作 *Vital Involvement in Old Age* (1989) をまとめるまでのおよそ四〇年間、幾度もライフサイクル論を語りなおすという形で研究を進めている。[12] ジェネレイティヴィティは、その過程とともに意味内容が大きく変化している概念である。

エリクソンが本格的に著作活動を始める五〇年代、ジェネレイティヴィティに関しては「成人期」の一つ前の局面「若い成人期」で詳細に論じられる「性器性 (genitality)」と「親密性 (intimacy)」との関連から、概念の基本的な枠組みが示される。具体的には「子どもを生む」ことだとする記述にとどまり、彼の理論的関心においてまだ周辺的なものであった。しかしながら、「子どもがいても、さらには子どもをほしがっていても、必ずしもジェネレイティヴィティの表出とは限らない」[13]ということも明言され、六〇年代に入って「世代サイクル (generation cycle)」の視点が導入されるとともに、この概念の具体的な意味内容は飛躍的に広げられる。「生殖性 (procreativity)」、「創造性 (creativity)」、「生産性 (productivity)」といった三つの側面が明確にされ、さらに「教えること」や「世界を支え保つこと (the maintenance of the world)」がキータームとして強調されるようになる。[14] ガンディーやジェファソン大統領、フロイトとユングなどを取り上げ[15]、大人を主題とする研究が進められるのもこの時期からである。七、八〇年代になると、アイデンティティ発達と関係のある「自己生成 (self-generation)」に考察が及び、世代サイクルやジェネレイティヴィティを中心に取り上げた論文が発表される。[16]

さて、このように徐々に練り上げられていった概念と関係するのが、訳語の問題である。〈generativity〉という言葉はエリクソンの造語であるが、〈generate (生む)〉、〈generative (生殖の)〉、〈generation (生殖、世代)〉などが語源であろうことは容易に想像がつく。そのためか、エリクソンの主な著書の翻訳書を中心に、ほとんどにおいて「生殖性」と訳すことが定着している。たしかに、ジェネレイティヴィティ概念の出発地点が「子どもを生むこと」であったので、当初の解釈としては「生殖性」も妥当であったといえるだろう。しかし、生殖を示す場合には後に〈procreativity〉という言葉が別に充てられており、上述した概念の広がりはこれではとらえきれない。近年のいくつかの研究論文等においては、「生成力」「生み出す力」「世代性」「世代継承性」「生成世代性」等、独自の訳出が様々に試みられているようである。[17] だが、ここに挙げたものだけを見ても、人の「力」としてとらえるもの（「生成力」「生み出す力」）と、世代が生成・継承されてゆく事実に重点をおくもの（「世代性」「世代継承性」「生成世代性」）とでは微妙な意味の違いがあり、共通理解を欠いている状況といえるだろう。

ここで、エリクソンのライフサイクル論の各局面を表している術語は、「曖昧さ (some ambiguity)」[18]やとらえ難さが特質であるという

ことを確認しておこう。エリクソンは自分の術語について、人の「感覚(sense)」をとらえるものと説明し、すべてに〈a sense of〉を付して理解するよう明言している。[19] 西平が『エリクソンの人間学』において指摘しているように、エリクソンの術語は、「現実の曖昧さを処理し、説明するために使われたのではなく、むしろ、その曖昧さとつきあい続けるための手掛かりとして」、「操作的(operational)」というより「発見的(heuristic)」・「喚起的(evocative)」な機能をもつのである。[20] この術語に触れたとき、自らの「ある感覚」に、たとえばアイデンティティという名前を与えて対象化し、おそらくはそれによって自己洞察を深めてゆく、そこにエリクソンの術語としての意義がある。

先に述べたように、ジェネレイティヴィティは子どもを生むこと(生殖性)、文化を生み出すこと(創造性)、仕事をすること(生産性)、人を教えること、育てること等々、様々な要素を含んでいる。またエリクソンは、ジェネレイティヴィティの局面を「現実的な局面('real' stage)」と呼び、[21] 次のような話を例として用いている。「死を目の前にしたある老人に、妻が囁きかけ、彼を看取るべくそこに集まった家族の名前を伝えると、目を閉じて横たわっていた彼はやおら起きあがって『それでは誰が、いったい誰が店の番をしているんだ?』と尋ねた。」[22] このときの老人のリアリティをとらえる言葉としての「ジェネレイティヴィティ」は、どのように訳したらよいのだろうか。この話からは、死、人生、世代といった観念とは一見無縁の、あまりにも日常的で現実的な生活感覚がジェネレイティヴィティであることがうかがえるだろう。

本稿では、原語の発音のカタカナ表記を用い、ジェネレイティヴィティという術語をいわば一つの入れ物としておく。人が人にかかわること、人が人や文化を生み育ててゆくという「現実的」なことについて、早急に観念的になるよりも、この術語にこめられた喚起的機能を生かし、言葉とリアリティとの往復運動を重視したいからである。

三、アイデンティティ・親密性・ジェネレイティヴィティ
——他者へのかかわりと自己へのまなざし——

ジェネレイティヴィティに関するエリクソンの端的な説明は、前節の概念形成の過程で見たとおりだが、それだけではこの術語のもつリアリティをとらえたとは言い難い。一九八一年のインタビュー記録 "On Generativity and Identity" においてエリクソンは、かつてのアイデンティティ概念のように概念それだけに注目することは適切ではなく、一つの概念をライフサイクル論の他の諸要素や全体との連関から考察すること、とりわけジェネレイティヴィティに関してはアイデンティティと親密性との関係から考察する事が大切であると示唆している。[23] アイデンティティ・親密性・ジェネレイティヴ

ィティの三つは、ちょうどライフサイクル論の後半「青年期」「若い成人期」「成人期」に対応するが、本稿ではこの文脈から考察を進めていきたい。

アイデンティティとは何かという問いに答えるのは容易ではないが、これまでに積み重ねられてきた研究に依拠し、ここでは端的に「自分が自分であるという感覚」ととらえておきたい[24]。そして、親密性の概念は人間の性を重視したフロイトの理論が核心にある。フロイトは「正常な人 (normal person) にできなければならないこと」を問われたときに、「愛することと働くこと」と答えたという。エリクソンはフロイトのこの答えも重視し、人間の性による交感こそ他者との親密な関係の原型であるという[25]。「オルガズムというクライマックスの体験において、二人の相互調整 (mutual regulation) が最高の経験へとつながる事実そのものが、男と女、事実と幻想、愛と憎しみなどの諸対立から生じる敵意や潜在的憤怒を、何らかの形で緩和する」[26]。性的に親密な関係のありかたに、敵対しやすい二者が各々の「相互調整」によって二項対立を緩和するという、動的なかかわりの原型をみるのである。そして、ここには性器性を超える「愛」があるとしている。その愛は、必ずしも男女の関係に限られていない。たとえば、「親しい友人関係、身体的な格闘、教師から感化される経験、自己の深みからの直感の経験」などにも、「相互調整」のダイナミズムとある種の愛が通底しているという。このように、人間の性の問題を、性器性を超える愛の問題に発展させていることは、性器性と密接に連関する概念であるジェネレイティヴィティ概念が「子どもを生むこと」だけではなく、創造性や生産性、教えることなどに広がっていったことと無関係ではないだろう。

さて、「真の親密性は、現実に融合している複数のアイデンティティ (identities) であると同時に、対比によって際だっているアイデンティティ (identities) でもある」[27]と述べられているように、親密性は他者との完全な融合ではない。アイデンティティの感覚があるがゆえに交じり合うことができ、そして交じり合うがゆえに、お互いのアイデンティティがより際だつ、その相互調整のプロセスなのである。エリクソンはこうした親密性のある関係においては、必ず「自己放出 (self-abandon)」[28]が要求されているという。また、自己放出が可能になるのは「アイデンティティが申し分ない形で形成途上にある場合に限られる」ともいう[29]。「自分が自分であるという感覚」があるからこそ、他者との関係において自分を放出することができる。自己放出は、自分を捨てて無にすることを意味していない。「自分」をもったうえで、自分で「自分」を突き放すこと、結果として自分の対象化を意味するといったほうが適切であろう。それがあるからこそ、より「際だつアイデンティティ」があるのである[30]。

ところで、自分が自分であるというアイデンティティの感覚がなくとも、一見親密な関係はあるという。例えば、「無差別な」相手

との「無差別に」親密な関係、「きわめてステレオタイプ化した形式的な人間関係」、「二人の孤独 (isolation à deux)」とエリクソンがよぶ「お互いがお互いの唯一の子ども」となって「自己の甘やかし (self-indulgence)」を許し合う閉じた「協力関係」などである。[31] このような擬似的親密性には、安定こそあれ、明確に孤独を感じるほどに自分が自分であるという鋭い感覚はない。世界に直接かかわるダイナミズムから一歩退いた状態といえるだろう。エリクソンのライフサイクル論では、世界とのかかわりの中で引き起こされる葛藤と危機を、順に「基本的信頼 対 基本的不信」「自律性 対 恥・疑惑」「自主性 対 罪悪感」「勤勉 対 劣等感」「アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散」「親密性 対 孤独」「ジェネレイティヴィティ 対 停滞」「統合 対 絶望」と表している。それぞれの葛藤の危機をのりこえると、次の局面のダイナミズムに移ってゆく、というのがライフサイクル論解釈の定石であるが、しかし、危機的状況は去るにしても、葛藤のダイナミズムそれ自体が解消してしまうことはない。自分が自分であるという感覚は、自己へのまなざしによってこれらの感覚を意識にのせることにある。さらには、かかわりのアンビヴァレントな感覚、とくに「基本的不信」「恥・疑惑」「罪悪感」「劣等感」「アイデンティティ拡散」「孤独」「絶望」[32] などの「(自我) 違和的 (dystonic)」[33] な感覚が、過去の傷にも触れるものであることを含めて、このダイナミズムを自分のものとして受け止めるということである。擬似的親密性は、自己へのまなざしを回避し、このすべてから身を退いた状態といえるだろう。

アイデンティティ・親密性の文脈は、他者とのかかわりにおいて自己へのまなざしを失わないことを指す。ここには、「ジェネレイティヴィティの発達」[34] において「より核心的になる葛藤」が内包されているという。[35] 人や世界にかかわるダイナミズムとその葛藤と危機とを自らに引き受けていくことがジェネレイティヴィティに関係している。ジェネレイティヴィティは「危機を通しての発達 (critical development)」なのである。[36]

四、かかわり方の伝達
――「自分に固執しない能力」と相互性――

エリクソンは、ジェネレイティヴィティ局面が発達しないことについて、「最終的にその理由は、ある確信の欠如、すなわち、子どものときに自分は共同体において歓迎され、そして信頼される存在になると確信する、いわゆる『種への信用 (belief)』の欠如に見いだされる」とする。[37] 「基本的信頼 対 基本的不信」の危機が、信頼感が十分に不信感を包み込む形で解決する体験がなければ、自分が世界にかかわること全てに「裏切られる」恐怖が伴い、かかわることそのもの、ジェネレイティヴィティそのものが回避の対象になってしまうのである。

そして、人が人や世界にかかわることを止めて防衛的になるとき、ジェネレイティヴィティの本質が逆に浮かび上がってくる。「ジェネレイティヴィティのまさに本質は、弱さの限定的な症状が次世代において……過度の疎外（estrangement）として見いだされるということを示している」[38]。自己防衛的な大人に倣って、子どもがあるかかわりをあらかじめ回避するなら、彼らはその現実と自分との間に直接的な感覚をもちえず、世界から「疎外」されてしまう。現実との距離をうめられないでいるこの疎外を、エリクソンは「人が自分の人生に『生き生きとかかわる』機会を少なくするような弱さの発達（mal-development）」[39]と呼んでいる。そして、これが世代間伝達によって形成されるというのである。ジェネレイティヴィティの本質は、人や世界へのかかわり方そのものが伝達されることにあるといえるだろう。

無論、これは様々な具体的行為を通して伝達されるものである。子どもを生み育てること、文化を創造すること、仕事をすること等、人や世界にかかわって現実的に社会を動かし生活を生み出してゆく、その生きざまが「かかわり方の伝達」になる。そして、様々な現実問題に対応し、危機を乗り越える中でジェネレイティヴィティはより「発達」してゆくのである。

さて、親密性に自己放出が要求されたのと似て、ジェネレイティヴィティにはかかわりに身を投げ出すための「自分に固執しない能力（the ability to lose oneself）」が不可欠であるという[40]。この「自分に固執しない能力」は、ある年齢に達すればひとりでに芽生えてくるというものではない。エリクソンは、「大人になった人間は必要とされることを必要とする」というが[41]、「自分に固執しない能力」は、自分という存在を必要とされるからこそ喚起される力である。この洞察は、彼の次のような観察に基づいている。

「この弱くうつろいやすい小さな存在（赤ん坊）は、家族全体を動かす。赤ん坊は、家族にコントロールされると同時に、その家族をコントロールし育てている。実際、家族は赤ん坊によって育てられながら、赤ん坊を育てているといえるだろう。」[42]

一方が他方の存在に自分の生命さえゆだねるという非対等な関係性において、非対等でなければ引き出せない力というものがある。エリクソンは、「私たちみなが親しく交わるようにさせる基本的な条件は、生まれたばかりの子どもがもつ飾らなさ（nakedness）と無力さとである」ともいうが、かかわりに自分を投げ出す「自分に固執しない能力」は、「丸裸（nakedness）」の状態で自分を必要とする非対等な他者によって引き出されるのである。エリクソンは、非対等な関係性ゆえの「相互性（mutuality）」を重視し、「最近は、子どもが大人に依存していることについて脚色された主張があるが、それは往々にして年長の世代が若い世代に依存していることを隠してしまう」とも指摘している[43]。すなわち、自分に固執しない能力とと

もにあるジェネレイティヴィティは、成熟すればひとりでに現れるというものではなく、自分を必要とする存在に「依存して」引き出されるのである。

五、「ジェネレイティヴィティ 対 停滞」

「自分に固執しない」と訳した〈lose oneself〉には、熟語として「我を忘れる」や「熱中する」という意味がある。ひとたびかかわりに向き合えば、自分をかまわず、情熱的、献身的に自分の存在を必要とするもののために奉仕する、という一面がジェネレイティヴィティにはある。*Gandhi's Truth*では、次のように表現されている。

「アーメダバードのストライキの時、ガンディーは四八歳で、実際に中年のマハトマであった。彼はすぐ次の年にインドの父として台頭する。人生の中年期は、私がジェネレイティヴィティという術語で包括してきた普遍的な人間的欲求と人間的強さの支配下にある、という事実は、このことからも強調されるものである。[44]」

中年期のガンディーは精力的であった。エリクソンはそれを、「普遍的な人間的欲求と人間的強さ」であるジェネレイティヴィティの「支配下にある(under the dominance)」と見ている。ジェネレイティヴィティは、人間を突き動かす圧倒的な勢いをもつものとしてとらえられていることが分かるだろう。「自分に固執しない」で、精力的に現実に対応し、あるときは社会主義者、あるときは保守主義者、軍国主義者、平和主義者、またあるときは西洋的行動主義者、東洋的神秘家等々、様々に分裂した顔を見せるガンディーに、エリクソンはこう問いかけているほどである。「多様な形態をもつこの人には、はたしてしっかりした中心があったのだろうか?」と。また、このようなガンディーを「宗教的現実家」とも呼んでいる。[45]

このように、困難や責任をふりかけてくる現実に熱意をもって対応することで、ほとんど分裂しそうな多様な形態が一人の人間のうちに同居していた例として、エリクソンの研究からは他にジェファソン大統領を挙げることができよう。ガンディーもジェファソンも、「自分に固執しない」で、自分の生きる社会を維持し理想に導こうとする——すなわち、「世界を支え保つこと」の——自負と情熱をもっていたのである。

ところで、このようなジェネレイティヴィティの情熱は自己や他者を見失わせることもある。人や世界とかかわるのではなく、それらを自分の情熱を満たすためのモノにしてしまう恐れもあるのだ。ジェネレイティヴィティを向けられる相手が、その圧倒的なエネルギーに飲み込まれてしまうこともある。しかし、他者の他者性を自覚しないジェネレイティヴィティは、単なる自己肥大であろう。ゆえに、「大人になった人間は、必要とされることを必要とする」と同時に、「彼が生み出してきたものから発せられる挑戦、今は『育てられ』、保護され監督されなければならないが、しかし、彼を越

えてゆくものから発せられる挑戦を求めている」[46]とエリクソンはいう。ジェネレイティヴィティは、「危機を通しての発達（critical development）」といわれていたが、この〈critical〉を読み替えて「批判を通しての発達」と解釈することもできるだろう。ジェネレイティヴィティは、情熱に身をまかせるだけでなく、自己への批判や挑戦を余儀なくされてこそジェネレイティヴ（生成的）であり得るのだ。

「生成的（generative）に豊かになることに失敗すると、……擬似的親密性の脅迫的要求という形か、自己像への一種脅迫的な耽溺（preoccupation）という形のいずれかで、以前の局面への退行が生じ、いずれも広く停滞感が付随する」[47]。停滞感に沈むとき、人はかかわりを回避し、ある意味で子ども以上に「子ども」になるといえよう。しかし、ジェネレイティヴィティの対極にあるこのような停滞感は、一方でジェネレイティヴィティにとって補完的役割をも有している。それは、エネルギッシュにつきすすむジェネレイティヴィティに対して、他者の他者性を確認させ、自己を見つめ直す鎮めの効果をもつということである。エリクソンは、大人は「過度になる危険にさらされている」という[48]。ジェネレイティヴィティだけに突っ走ると他者や自己を見失ってしまう。停滞感にだけ沈んでいると、世界とのかかわりをもてなくなってしまう。「ジェネレイティヴィティ 対 停滞」はかかわりのダイナミズムを生み出すと同時にその調子に絶えず目配りをする、いわばかかわりのバロメーターとでもいえよう。「ジェネレイティヴィティ 対 停滞」のバランスのなかでなお〈lose oneself〉する情熱は、相手を飲み込むものではなく、「生成的に豊かになること」を成功に導く力になるのである。

エリクソンはジェネレイティヴィティの具体的行為の一つとして取り上げている「教えること」について、次のように説明している。

「人は教えることを必要とする。それは教えられることを必要とする者のためにだけではなく、自分のアイデンティティを満足させるためだけでもない。事実は語られることによって、論理は証明されることによって、真実は明らかにされることによって生き続けるからである。それゆえ、教える情熱は教える職業に限定されない。成熟した大人は、自分にとって大切なことを説明するときや、暗中模索の探求をしている人に自分が理解されるときに感じる充足感を知っている。」[49]

なぜ、人は教えるのか。それを必要としているものが目の前におり、それをすることが自分のアイデンティティに適うからという以上に、人から人へと事実が「語り」なおされ、論理が「証明し」なおされ、真実が「明らかに」しなおされるそのサイクルの中で、「生き続ける」ものがあるからである。事実や論理や真実そのものに普遍的な価値があるのではない。それらをゆるやかに含みつつも、語りなおし、証明しなおし、明らかにしなおしてゆくそのプロセス。そのプロセスに人間が生きていく営みがある。教える情熱とは、こ

のプロセスを育む気持ちであり、「成熟した大人の充足感」とは、「教えること」によって、世界へとかかわる自分のやり方が相手が世界へかかわる扉となったときの、生きていく営みが一つとなって連鎖したときの充足感なのである。

本稿では、エリクソンのサイコヒストリー研究の中から、例として偉業を成し遂げた人物を取り上げてた。しかし、ここで「教える情熱は教える職業に限定されない」といわれているように、「生きていく営み」であるジェネレイティヴィティはあくまで日常的で現実的な営みのうちにこそあるものなのだ。ガンディーやジェファソンが偉大であるのは、エリクソンによれば、その日常的で現実的な営みにおいて「彼らにとって最も関心のある事柄を、彼の時代の関心事とする能力」においてなのである。(50)

六、アイデンティティの漸成と「サイクル」

他者とのかかわりの中で自己へのまなざしを失わないこと、それがすなわち、アイデンティティ・親密性・ジェネレイティヴィティの文脈からみた葛藤の核心であった。そして、親密性が〈融合すると同時に際だつアイデンティティ(identities)〉と表されたのに対して、あえて喩えるならば、ジェネレイティヴィティは〈継承されると同時に新しく生成されるアイデンティティ(identities)〉ということができるのではないだろうか。

世界へのかかわり方を伝達するということは、自分の存在の根を相手のものとして相手の中にも植え付けるという側面をもつ。自分のアイデンティティがある部分ではそのまま相手のアイデンティティとなる。けれども、それは相手が自分で世界にかかわるときの、すなわち独自のアイデンティティを生成してゆくときの土台や扉にもなりえる。そして、エリクソンがジェネレイティヴィティのうちに「さらなるアイデンティティの発達にかかわる一種の自己生成(self-generation)」をみているように、(51)〈lose oneself〉(自分を捨てる)という逆説的な行為から生成される新しいアイデンティティもある。一つのアイデンティティが次のアイデンティティを生む土壌になるこのかかわりのサイクルのなかで、自己と他者のそれぞれの人生が紡がれてゆくのである。

ライフサイクルは「アイデンティティの漸成(epigenesis of identity)」ともいわれていることを確認しよう。(52)「漸成」とは、あるまとまりが様々な面をその都度生成させながら全体としても生成してゆく、そのプロセスのことである。(53)「アイデンティティの漸成」は一つのアイデンティティを追求するプロセスを指すのではなく、アイデンティティが多方面に分化しながら綜合されてゆくプロセスを表現するものといえるだろう。とくに、ジェネレイティヴィティとともにあるアイデンティティにこそ、この「漸成」という言葉が当てはまると思われる。目の前のかかわりに開かれてあること、現実に

常に対応するということ、そうしたあり方にこそ「自分に固執しない能力」とともにジェネレイティヴィティがあり、そのなかで〈lose oneself〉された自分のアイデンティティは、過去の複雑さ、現実の多面性、他者の多様性に対応して種々に揺らめき、それでいてそのダイナミズムを力にして一つのまとまりを失うことなく、「漸成」してゆくのである。

ここで、「アイデンティティのアイデンティティ」について、触れなければならない。多様に揺らめき分裂するいくつものアイデンティティを「全て自分である」と感じるそのアイデンティティとは何なのか。一人の人間がいくら多くの役割をこなしたとしても、やはりそのアイデンティティは一つではないのか。

この問題は、もう一つの大きな危機である「中年期の危機」にも関係していると思われる。「自分に固執しない」で日常の現実に対応する日々において、時折人は「我に返って」自己や死や人生を直視することもある。自己の存在の基盤をあらためて問う、このような危機において、「アイデンティティのアイデンティティ」、すなわち分裂したアイデンティティを綜合する確固たるアイデンティティの模索が始まるのではないだろうか。そしてこの危機の到来は、はたして現実的なジェネレイティヴィティの限界を意味するのだろうか。

やまだは、中年期の「死の受容」とジェネレイティヴィティを結びつけ、「人間が永遠に生存できるものではないという悟りのもとに、自分の死後も引き続きなされていくような社会的貢献を生み出す創造的働き」としてジェネレイティヴィティをとらえている。[54] また、エリクソンの晩年の著である *Vital Involvement in Old Age* には、老人のジェネレイティヴィティは現役の側面を有しつつも「生きた証を遺す」意味をもつことが描かれており、映画『野いちご』がこの視点から解釈されている。[55] そして、アメリカの実証的研究では、ジェネレイティヴィティは大人の「贖い (redemption)」の意味があるという興味深い考察がなされている。[56] 自己の死に直面し、世代サイクルという大きな流れの一部に自分を感じるとき、私たちはたしかにジェネレイティヴィティを通して自分の生の意味を感じることができるだろう。エリクソンがいうように、このとき「私とは、私の死後も生きのびるもののことである」。[57]

しかしながら、分裂するエネルギーを秘めたアイデンティティを綜合する「アイデンティティのアイデンティティ」や、自分の死後に残る生きた証、自分の人生の意味や「贖い」は、「自分に固執しない」で現実と格闘した時間の密度に比例して、自分の胸の内に刻まれるものだろう。あらかじめ自らのアイデンティティを補い満足させるものとしてジェネレイティヴィティを考えることはできない。先に見てきたように、自己目的化したジェネレイティヴィティはジェネレイティヴ（生成的）ではなくなってしまう。

エリクソンは、人間の発達段階としてアイデンティティとジェネ

レイティヴィティの間に親密性をおいた。そして、アイデンティティ・親密性・ジェネレイティヴィティの文脈においてこそジェネレイティヴィティをとらえることができる、と考えた。親密性の強調は、ジェネレイティヴィティには現実の人や世界とのかかわりが必要であることを示唆するものである。エリクソンが強調したかったのは、現実の人や世界にかかわることからしか人生の意味は引き出せない、ということなのではないだろうか。

ジェネレイティヴィティ概念から見えてくる人生の地平は、かかわりのなかに自分の生きざまが立ち現れるとき、次世代形成の基盤が創られ、同時に自己生成の源が得られるという、そのかかわりのサイクルである。「ジェネレイティヴィティ 対 停滞」のダイナミズムが繰り広げられるとき、一つの人生が別の人生を生み出すサイクルが生じる。ライフがサイクルを成すと同時に、世代サイクルが一つのものとして噛み合って廻るのである。その交点において自己と他者とは不可分であり、それを契機にして別個のアイデンティティが生成されてゆく。ときにはその関係が身動きのとれないほど緊密になったり、激しい反抗心や深い停滞感から溝ができたりもするだろう。しかし、その一点においては絶ち切れてしまうことはない「縁」をもつ不思議なつながりの中で、人はアイデンティティを様々に「漸成」させながら生きている。

人生は個として直線的に進みゆくばかりでは、いずれ停滞してしまう。現実にかかわる手だてを失えば、「生きた証」も「贖い」もない。様々な他者とかかわる現実の中で、私たちは凭れ合い、支え合いながら人生を複合的に紡いで生きている。エリクソンによるジェネレイティヴィティ概念は、このような視点から人生を描き出す、ライフサイクル論の要といえるだろう。

(1) 岡本祐子『中年からのアイデンティティ発達の心理学』ナカニシヤ出版、1997, 等

(2) E. H. Erikson : "On Generativity and Identity", *Harvard Educational Review*, vol. 51, No.2, 1981, pp.249-69, p.251.

(3) Don Browning : "A Normative Image of Man" *Childhood and Selfhood*, Associated Univ. Press, 1978.

(4) Dan P. Mc Adams and de St. Aubin : *Generativity and Adult Development*, American Psychological Association, 1998, Cheryl L. Bradley, James E. Marcia : "Generativity-Stagnation : A Five-Category Model", *Journal of Personality* 66 : 1, February, 1998, pp.39-64.

(5) 梅本堯夫・麻生誠編『教育学講座3 発達と環境』学習研究社、1979. ハイメ・カスタニエダ・長島正編『ライフサイクルと人間の意識』金子書房、1989. 南博文・やまだようこ

編『講座　生涯発達心理学5　老いることの意味　中年・老齢期』金子書房　1995, 等

(6) やまだようこ「人生半ばに生きる」『発達』54、ミネルヴァ書房、1993, pp.20-8.

(7) ライフサイクル論は発達課題説として紹介されることも多いが、各局面を「一回限りで獲得される達成事項として仮定すること」は避けるべき「誤用」だとするエリクソンの言明は意外に知られていない。(E. H. Erikson : *Childhood and Society*, W. W. Norton, 1963, p.274. 仁科弥生訳『幼児期と社会1』みすず書房、1977, p.352)

(8) 「本書では、人間の人生において、大人と子どもの非対等性が長く引き延ばされているという存在事実の一面、それが技術や文化の享受と発展に寄与していると同時に、搾取可能性を助長してもいるということに関する洞察の原点を、精神分析の実践と理論に求めて、その論証を試みてきた。」(E. H. Erikson : *Childhood and Society*, W. W. Norton, 1950, p.377. 『幼年期と社会』(後) 草野栄三良訳、日本教文社、1956, p.172)
なお、引用は、翻訳書を手がかりにその都度自分で訳出を試みた。(以下においても同様である。)

(9) E. H. Erikson : *Young Man Luther*, W. W. Norton, 1958, 『青年ルター』大沼隆訳、教文館、1973.

(10) E. H. Erikson : *Gandhi's Truth*, W. W. Norton, 1969, 『ガンディーの真理』(1, 2) 星野美賀子訳、みすず書房、1973.

(11) E. H. Erikson : *Dimensions of a New Identity*, W. W. Norton, 1973, 『歴史的アイデンティティ』五十嵐武士訳、みすず書房、1979.

(12) 正確には五〇年代は「人間の八つの局面」と表されていて、「ライフサイクル」と呼ばれるようになるのは六〇年代からである。

(13) E. H. Erikson : *Identity and The Life Cycle*, W. W. Norton, 1959, p.103. 『自我同一性』小此木啓吾訳編、誠心書房、1973, p.122.

(14) 柳沢は、エリクソンが「相互性(mutuality)」の視点を構造化させてゆく過程で、六〇年代に「世代サイクル(generation cycle)の視点を確立し、以降、それがライフサイクル論の骨格となったことを明らかにしている。また、同時にジェネレイティヴィティが「生殖」よりむしろ教えることを中心に考えられ始めたという点も指摘している。(柳沢昌一「E・H・エリクソンの心理社会的発達理論における『世代サイクル』の視点」『教育学研究』52, 4, 1985)

(15) E. H. Erikson : "Themes of Adulthood in the Freud-Jung Correspondence", *Themes of Work and Love in Adulthood*,

Harvard Univ. Press, 1980.

(16) E. H. Erikson : "On The Generational Cycle" *Int. J. Psycho-Anal.* 61, 1980, pp.213-23., Erikson : "On Generativity and Identity", 1981.

(17) それぞれの訳語の出典については、順に柳沢昌一「E・H・エリクソンの心理社会的発達理論における『世代サイクル』の視点」『教育学研究』52, 4, 1985（「生成力」）、田中毎実「人間形成論の内容的展開の試み――ライフサイクル理論と相互形成――」『人間形成論――教育学の再構築』岡田渥美編、玉川大学出版部、1996（「生み出す力」）、馬場禮子・永井撤共編『ライフサイクルの臨床心理学』培風館、1997等（「世代性」）、将来世代総合研究所『いまなぜ世代継承性なのか』将来世代国際財団、1999（世代継承性」）、やまだようこ「喪失と生成のライフストーリー」『発達』79、ミネルヴァ書房、1999（「生成世代性」）

(18) E. H. Erikson : *Identity and The Life Cycle*, p.109. 邦訳 p.132.

(19) Ibid. p.58. 邦訳 p.61.「私がしたことは、誰もが一度は経験したことがあり、したがって、現在それを痛烈に経験している人のなかに認められるような何ものかに、最も明確な名前を与えたということなのである。」（E. H. Erikson : *Identity Youth and Crisis*, W. W. Norton, 1968, p.18.『アイデンティティ』岩瀬庸理訳、金沢文庫、1973, p.7.）西平の説明によればアイデンティティは、「その最も中核の意味合いにおいては、アイデンティティの感覚であり、それは、研究者の視座から見た言葉ではなく、生きた本人の感覚を、内側から、存在感の次元において、自我親和的に受け入れたところに成り立つ感覚＝実感として、理解されてくる」ものである。ジェネレイティヴィティについても、同じことがいえるだろう。（西平 直『エリクソンの人間学』東京大学出版会、1993, pp.215-21. 第九章 第三節「アイデンティティの感覚」）

(20) 西平 直『エリクソンの人間学』p.59.

(21) E. H. Erikson : *Lifecycle, Completed*, W. W. Norton, 1997, P.66.（本書は初版（1982）を、エリクソンの没後、妻のジョーンが増補版として出版したものである。エリクソンの叙述部分については一九八二年版と変わらない。）『ライフサイクル、その完結』村瀬孝雄・近藤邦夫訳、みすず書房、1989, p.87.

(22) Ibid. p.66. 邦訳 p.87. 例話は筆者が要約した。

(23) Erikson : "On Generativity and Identity", p.262.

(24) アイデンティティを、他者によって証明される「存在証明」であると同時に、自分で感じる「独自性」であるという二重の意味をもつものと理解すれば、ここでは厳密には「他者に対して自分が自分である感覚」といえるだろう。アイデンテ

ィティ概念については、多くの研究がなされているが、中でも『エリクソンの人間学』（西平 直 1993）は、概念の多義性を丁寧にきりわける鮮やかな議論が展開されており、学ぶべきものが多かった。

(25) Erikson : *Childhood and Society*, 1950, p.229. 邦訳(中) p.133-4.

(26) Ibid. p.230. 邦訳（中） p.135.

(27) Erikson : *Identity : Youth and Crisis*, p.135. 邦訳 p.177.

(28) Erikson : *Childhood and Society*, 1950, p.229. 邦訳（中）p.133.

(29) Erikson : *Identity : Youth and Crisis*, p.135. 邦訳 p.177. エリクソンは「真に二人でいること（True twoness）の条件として、人はまず自分自身にならなければならない」という。（Erikson : *Identity and the Life Cycle*, p.101. 邦訳 p.120.）

(30) 「自己」、「自分」の概念的な区別について。ここでは暫定的に、「自己」は対象化した自分、「自分」は自己を包み込んで今そこにあるもの、日常的に「自分」というときの「自分」ととらえている。

(31) Erikson : *Childhood and Society*, 1963, p.226. 邦訳（1） p.343. 〈a deux〉は仏語で、「二人の、二人による、二人のための」という意味にも読める。

(32) ここで、「老年期」の「絶望」を含めているのは、私たちは人生のどの時期においても自分の問題として、あるいは自分の祖父母に共感するなどして、これを感じると考えられるからである。ライフサイクルを図式化した漸成図式（エピジェネティック・チャート）は、いずれの感覚も危機的状況の時に限られないということを、空白の升目で表しているという。（Erikson : *Childhood and Society*, 1963, pp.272-3. 邦訳 (1) pp.350-1.）

(33) Erikson : *Lifecycle, Completed*, p.55. 邦訳 p.71.

(34) Erikson : *Childhood and Society*, 1963, p.266. 邦訳 (1) p.343.

(35) Erikson : *Childhood and Society*, 1950, p.231. 邦訳（中）p.137.

(36) Erikson : *Childhood and Society*, 1963, p.266. 邦訳 (1) p.343.

(37) Erikson : *Identity and The Life Cycle*, p.103. 邦訳 p.123.

(38) Erikson : "The Human Life Cycle" *The International Encyclopedia of the Social Sciences*, 1968, p.291.

(39) E. H. Erikson : *Vital Involvement in Old Age*, W. W. Norton, 1986, p.40.『老年期　生き生きしたかかわりあい』朝長正徳・朝長梨枝子訳、みすず書房、1990, p.40. エリクソンにおいて、「人が生き生きすること」と「人間の強さ」とはほぼ同義であり、エリクソンのいう「発達」はこの二つを意味している。〈maldevelopment〉の〈mal〉という接頭語は、本来の道から外れて「誤った」「病的な」「悪性の」という意味である。エリクソンのいう「発達」の本来の姿から外れた

ものとして〈maldevelopment〉を考えるなら、それは人間が生き生きしないこと、強さよりも「弱さ」が肥大化して展開してゆくことである。よって、意訳ではあるが本稿では〈maldevelopment〉を「弱さの発達」と訳出してみた。

(40) Erikson : *Childhood and Society*, 1950, p.231. 邦訳（中）p.138. 〈lose oneself〉は、熟語として「我を忘れる」、「没頭する」、「夢中になる」という意味があるが、直訳するなら「自分を失う」、少し意訳するなら「自分を手放す」などとも考えられるであろう。ここでは、文脈上「自分自身に振り回されやすいが、そうはしないこと」の意味をもつものとして、「自分に固執しない能力」と訳出してみた。なお、この能力は非常に重要視されており、エリクソンはこれを強調するためにこそ「ジェネレイティヴィティ」という語を創造したという。

(41) E. H. Erikson : *Insight and Responsibility*, W. W. Norton, 1964, p.131.『洞察と責任』鑪幹八郎訳、誠心書房、1971, p.129.

(42) Erikson : *Childhood and Society*, 1963, p.69. 邦訳(1) p.82.（ ）内は筆者。

(43) Erikson : *Childhood and Society*, 1963, pp.266-7. 邦訳 (1) p.343.

(44) Erikson : *Gandhi's Truth*, p.395. 邦訳 (2) p.245.

(45) Ibid. p.396. 邦訳 (2) p.246.（傍点は筆者）

(46) Erikson : *Insight and Responsibility*, p.131. 邦訳 pp.129-30.

(47) Erikson : *Lifecycle, Completed*, p.67. 邦訳 p.89.

(48) Erikson : "On Generativity and Identity", p.255.

(49) Erikson : *Insight and Responsibility*, p.131. 邦訳 pp.129-30.

(50) Erikson : *Gandhi's Truth*, p.395. 邦訳 (2) p.245.

(51) Erikson : *Lifecycle, completed*, p.67. 邦訳 p.88.

(52) Erikson : *Identity : Youth and Crisis*, pp.91-141. 邦訳 pp.113-86.

(53)「漸成原理は……成長するものはみなグランドプランをもち、グランドプランから各部分が発生し、どの部分もそれが優勢になる特別な時機があって機能的な複合統一体の形になるまで（変化が）続いていく、という考えを指している。」Erikson : *Identity : Youth and Crisis*, p.92. 邦訳 p.114.（ ）内は筆者。この原理は胎生学によるもので、注の (32) でも触れているがライフサイクル論を貫いている原理である。

(54) やまだようこ「人生半ばに生きる」p.24.

(55) Erikson : *Vital Involvement in Old Age*, 1986.

(56) Dan P. Mc Adams and de St. Aubin : *Generativity and Adult Development*, American Psychological Association, 1998.

(57) Erikson : *Identity : Youth and Crisis*, p.141. 邦訳 p.186.

（大阪大学・大学院）

大阪大学教育学年報 第5号（2000年）
Annals of Educational Studies Vol .5

E. H. エリクソンの<care>概念に関する考察
— 他者への関心と自己へのまなざし —

谷 村 千 絵

【要旨】
本稿では、アメリカの精神分析家E.H.エリクソンのライフサイクル論における<care>概念について考察する。<care>は、エリクソンがライフサイクル論の第7番目の局面「成人期」の「人間的な強さ」（あるいは<virtue>）として提示した概念である。人間的な強さは、ライフサイクル論の各局面に「～対～」で表されている葛藤や危機を乗り越える力であり、<care>は、成人期の「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」の葛藤と危機を乗り越えるとされている。従来、この概念は「世話」「はぐくみ」と訳され、具体的に大人が子どもや周囲の人間の世話をすることを指す概念であると考えられてきた。しかしながら、エリクソンは<care>をまず「関心」であるという。さらに、「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」のダイナミズムから考えるならば、<care>は、他者への関心と自己へのまなざしとが交差する内面的なプロセスを示すといえる。このような<care>の核心は、日本語においては「配慮」という言葉で表現できるのではないだろうか。その検討も含めて、この概念の特質を明らかにすることが本稿の目的である。

1、問題と目的

アメリカの児童精神分析家 E. H. エリクソン(Erik H. Erikson 1902-1994)は、人間の人生を8つの局面(stages)でとらえるライフサイクル論でよく知られている。ライフサイクル論においては、各局面が「～対～」の葛藤と危機としてとらえられており、それを乗り越える力が「人間的な強さ(human strength)」（あるいは<virtue>）という概念で表されている[1)]。本稿が注目するのは、「成人期」の局面における人間的な強さとされている<care>である。

ライフサイクル論の成人期の局面は「ジェネレイティヴィティ　対　停滞 (generativity vs.stagnation)」と表されており、ジェネレイティヴィティが停滞を上回る形でこの葛藤の危機が乗り越えられるとき、<care>が獲得されると説明されている。<care>は、わが国では従来「世話」や「はぐくみ」と訳されてきたことからもうかがえるように、子どもや周囲の人間の世話をすることに関係している。端的に述べるならば、子どもを育て周囲のものの世話をするということを、大人の人間的な強さとしてとらえる概念がエリクソンの<care>であるということができよう。

しかしながら、エリクソンのいう<care>は、単純に具体的な「世話」という行為を指し示すだけの概念とはいえない。というのも、エリクソンのいう<care>は、「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」の葛藤と危機という<care>する側の内的なプロセスと分かち難く結びついて考えられているからである。<care>については、「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」の葛藤と危機から考察し、具体的な世話という行為を含みつつ、その背後にある心理的なプ

ロセスをふまえる概念として解釈する必要があるだろう。多くのテキスト等においてエリクソンの<care>が説明される際、たしかに、「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」の葛藤と危機に言及しないものはない。しかし、耳慣れない用語である「ジェネレイティヴィティ」(エリクソンの造語) が何を指しているのか、「停滞」とは何が停滞することなのか、そしてジェネレイティヴィティが停滞を乗り越えるとはどういうことなのか、という詳細な考察には立ち入らぬままに、「～ 対 ～」を乗り越えるという図式化された説明だけで<care>をとらえていることがほとんどである。その結果、<care>に関しては理解が表面的になり、世話という具体的行為に限定されているというイメージが拭えない。

本稿では、「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」の葛藤と危機のプロセスに注目して、エリクソンの術語としての<care>概念を明らかにしたい。このプロセスを重視することによって、エリクソンの<care>概念は、必ずしも具体的な世話という行為に限られず、それを支える人間の内面の動きをとらえるものであることが明らかになると思われるからである。そのような考察によってこそ、エリクソンの術語としての<care>概念は、大人を葛藤と危機という内面において描き出すものとして、明らかになるのではないだろうか。

このような視点からとらえるとはいえ、<care>はもちろん、具体的な世話という行為を全く含まぬ、抽象的な概念であるというわけではない。たとえば、「<care>は、･･･人や物や観念を『世話する(take care of)』ことに、幅広くかかわること(widening commitment)である」(E.H.Erikson,1982,p.67.邦訳pp.88-89.) というような表現にみられるように、<care>は、たしかに「世話」することでもある。問題は、それが<care>の全てであるかのように理解されることにあるといえよう。そして、この問題はおそらく、先に触れたジェネレイティヴィティ概念の解釈のされ方に由来していると思われる。ジェネレイティヴィティは、当初エリクソンによって「子どもを生むこと」として説明されたため、<care>はそれを受けて、専ら子育てをすることと理解されたのではないだろうか。ところが、エリクソンがジェネレイティヴィティを子どもを生むことに限定していたのは1950年代においてであり、1960年代には彼の思索の深まりとともに、ジェネレイティヴィティは、ライフ（人生）がサイクルを成し世代サイクルが紡ぎ出されてゆく契機を示す概念として、生殖に限らず、「創造性」、「生産性」、「教えること」、「世界を支え保つこと」、「自己生成」等の内容をも含む、多面的なものになってゆく。<care>はちょうどこの1960年代に提示されていることからすれば[2)]、当然、内容が展開された後のジェネレイティヴィティと関連づけてとらえられるべきであろう。

こうした経緯をふまえた上で、本稿では、子どもを生むことに限定されない「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」の葛藤と危機から、<care>について考えてみたい。

2、エリクソンによる< care >の定義

「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」の考察にはいる前に、まず、エリクソンが<care>をどのように定義していたのかを確認しておこう。「人間的な強さ」について初めて本格的に論じた論文「人間的な強さと世代サイクル(“ Human Strength and the cycle of Generations”)」において、彼は、<care>に関しては簡結に次のようにまとめている。

「<care>は、愛や、必然や、あるいは偶然によって生み出されたものに対する、広がり続ける関心(concern)である。<care>は、放棄できない義務感に伴うアンビヴァレンスを克服する。」(Erikson,1964,p.131.邦訳p.129.)

<care>が<concern>という語でとらえ直されていることに注目したい。そして、このことに関連して、エリクソンが大人の「人間的な強さ」を表すものとして<care>という言葉を選んだ理由を述べている次の文章も見てみよう。

「私には、一つの言葉が必要でした。そして私が考えた言葉のすべての中で、<care>はもっとも強力だと思いました。私は『英語で話す』ように育ったのではないので、辞書が私の伴侶でした。そして慣用句もまた、考慮に入れなければなりません。<care>は、第一にある種の懸念を意味します。しかし、私はもっと肯定的な意味合いをもつと考えます。あることに『気が向く(care to do)』、ある人、あるものを『気づかう、大切にする(care for)』、保護や注意を必要とするものを『世話する(take care of)』、そしてものが破壊『しないように注意する』ということを含めた意味で、<care>という語を使っています。」(Erikson,1967,p.66.)

ここでエリクソンも指摘しているように、<care>という語は元来「懸念」、「心配」、「気苦労」、「憂慮」などを表す。前述の<concern>に加え<anxiety,worry>などが類語で、そのいずれにも「懸念、心配」などの意味が共通している。ところが、エリクソンの<care>は、心配や憂慮には限定されないという。「義務感に伴うアンビヴァレンスを克服する」前向きな力であり、「肯定的な意味合い」を有するというのである。エリクソンが<care>において強調している点は、「生み出されたもの」に対して、心配や憂慮を併せもちながらも、肯定的なイメージをもって「気にかける」こと、前向きな関心(concern)をもつ心の動きだといえるだろう。さらに、日常語としての<care>、すなわち<care>の慣用句が重視されていることから、この術語は観念的な理想をではなく、人間の日常的な営みのうちにあるものを表していることがうかがえる。

<care>は、大人にある種の義務を感じさせる存在 —子どもであったり、老人であったり、部下であったり、後輩であったり、あるいは患者であったり —に対して、前向きな関心をもつ日常的な心の動き、といえる。そして、その動きは、「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」の葛藤と危機の考察を通してより明らかになってくるのである。

3、「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」のダイナミズム

ジェネレイティヴィティは、先述したように幅広い意味を包含する概念であるが、それらをまとめると「人やものや文化を生み出し、世界を支えてゆくこと」といえるだろう。そして、エリクソンが「大人は必要とされることを必要とするようになっている」[3]というように、この局面は自分が「必要とされる」ことを契機に「自分に固執しない能力(the ability to lose oneself)」が喚起されることから始まるとされている[4]。ジェネレイティヴィティは、自分のことよりも他者の必要に応え、様々なことを生み出してゆく、「我を忘れる(lose oneself)」ほどエネルギッシュな「駆動力(driving power)」ということができる[5]。そして、このジェネレイティヴィティは、次のように「停滞」と表裏一体であるという。

「生成的(generative)に豊かになることに失敗すると、･･･擬似的親密性の脅迫的要求という形か、自己像への一種脅迫的な耽溺(preoccupation)という形のいずれかで、以前の局面への退行が生じ、どちらにしても停滞感が充満する。」(Erikson,1982,p.67.邦訳 p.89.)

相手のためと考えて行ったことが失敗に終わるとき、自分の意図した行為が何も生み出さないとき、人は落胆し、意識的にしろ無意識的にしろ、劣等感や罪悪感、無力感や不信感に打ち沈むことだろう。自分を必要以上に責めたり弁護したりするかもしれず（自己像への耽溺)、あるいは、一切の不信感等を否認して擬似的な親密性を保とうとするかもしれない(擬似的親密性の脅迫的要求)。いずれにせよ、これらは「自分に固執しない」状況とは逆に、自分のうちに閉じこもって他者への関心を失ってしまう状況といえる。本質的にはかかわりを回避して閉じこもり、ある意味で子ども以上に「子ども」になるといえよう。こうした「停滞」から抜け出すために、大人はやはり「必要とされることを必要とする」とエリクソンはいう[6]。人は「必要とされること」によって救われ、他者の他者性を認識し直すことができるからである。停滞感の中でなお、自分を必要とする他者への関心をもち続けていくということは、単にジェネレイティヴィティが停滞を上回るというより、むしろ「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」がどちらかに振り切れてしまうことなく、個人の内面でダイナミズムを形成するということである。「愛や、必然や、あるいは偶然によって生み出されたものに対する、広がり続ける関心(concern)」としての<care>は、このダイナミズムを形成する力であるといえよう。

ここで、「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」の危機は、一般に理解されているような、一度乗り越えれば解決するという類の危機とは異なるということも確認しておく必要がある。この局面は、日常的に「必要とされること」に応え、様々な現実に向き合ってゆく長い期間の局面として描かれている[7]。エリクソンが、ジェネレイティヴィティの発達を「危機を通しての発達(critical development)」と呼んでいるように、危機は何度も訪れ、そのつど目の前にいる他者への関心を持ち続ける力としての<care>が試される。現実とぶつかって「停滞」に沈まずにはいられない人間を、ジェネレイティヴなかかわりへと向かい合わせる力が<care>なのである。他者に積極的に介入してゆくジェネレイティヴィティのベクトルと、一

切のかかわりから引きこもる停滞のベクトル。この相反する二つのベクトルを結びつける<care>は、「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」がダイナミズムを成している状態そのものといえる[8]。

エリクソンが「大人」を対象とした生活史研究において、強い関心を示しているカール・ユングの妻、エンマ・ユングをみてみよう。彼女は、フロイトとユングの仲がお互いの家族を巻き込むほど険悪になった頃、フロイトに数回の書簡を宛てている。エリクソンが注目しているそれらの書簡から、エンマの苦心がうかがえる文をいくつか抜き出してみよう。

「先生はその点について何一つ語ってはくださいませんでしたので、一度徹底的にお話しくだされば、先生にも主人のためにもよろしいのではないかと思えてなりません。それとも何かほかに原因があるのでしょうか。もしそうでありましたら、どうぞ先生、私にお伝えくださらないでしょうか。」
「どうぞ私のこの振舞いを、差し出がましいものとおとり下さいませんように。また、かつてお話しされたような、先生のご好意をいつも台無しにしてしまう女性の一人に、私をお考えになりませんように。」
「先生がカールに寄せてくださる御信頼を、私どもがどれほど嬉しく、また名誉に思っているかご想像いただけるかと思います。でも時折、先生はカールを信頼しすぎているのではないかと思うこともございます。先生は、必要となさるよりもっと立派な後継者と完成者をカールに見ておられるのではないでしょうか。」
「私はただ次の点をおうかがいしたかっただけです。つまり、ご子息の身体的な症状も何らかの形で心理的条件と結びついているのではないか、たとえば抵抗力が弱まることになるのではないかという点です。」(Ibid.pp.67-8.邦訳 369,pp.70-1.)

エンマがこのような書簡を根気強く送り続けたにもかかわらず、確かな証拠はないがフロイトからの返答は否定的で感情的であったようである。そしてエンマの努力もむなしく、フロイトとユングは周知のごとく決裂を迎えるのであるが、しかし結末がどうであれ、エリクソンはこれをエンマのジェネレイティヴィティの表現として次のように見ている。

「男たちは妻が子どもを生み育てることに専心するのと競うようにして自らの創造的関心事を追求したが、エンマ・ユングは明らかにフロイトを救おうとし、またフロイトの子どもたちを救いたいと願っており、なかんずく、彼女が夫に対するフロイトの陰気な攻撃と見なしたことから、夫を救い出したいと思っていたのである。ともあれ、彼女の勇敢な女性的ふるまいは、不朽の観念に向けられるよりむしろ、現在生きているが死すべき運命にある者たちの発達上の必要にささげられたジェネレイティヴィティの表現であった。」(Ibid.pp.68.邦訳 369,pp.71-2.)

エンマに関するエリクソンの考察には、<care>という言葉は一度も使われていない。しかしながら、夫とフロイトとの関係への懸念、夫、フロイトの子ども、そしてフロイト自身を

心配する気持ちから、フロイトへ直接働きかけるために何度も書簡を送るという行為のなかに、その行為を支えるエンマの前向きな心の動きを見て取ることができる。さらには、自分の行為が否定され、事態の悪化という結果になったとき、後悔や罪悪感や劣等感そして不信感のなかで停滞しつつも、他者の痛みを思い希望的な関心を抱き続ける力としての<care>を、書簡を送り続けたエンマの姿に見ることができる。エリクソンが指摘している、現在生きている者たちへの発達上の必要に向けられたエンマのジェネレイティヴィティは、そのような<care>という力に支えられてこそ、現実に発揮されたのである。そのときのエンマの内面では、「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」の二つのベクトルがダイナミズムを成していたといえるだろう。

4、他者への関心と自己へのまなざし

エリクソンは、「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」のダイナミズムが、とりわけアイデンティティと親密性とに関係しているという[9]。これは<care>概念にもう一つの非常に重要な示唆を与えるものなので、アイデンティティ・親密性と「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」との関係について考察を進めていきたい。

アイデンティティとは何かという問いに答えるのは容易ではないが、これまでに積み重ねられてきた研究に依拠し、ここでは端的に「自分が自分であるという感覚」ととらえておくならば[10]、親密性は、アイデンティティの感覚があるがゆえに他者と交じり合うことができ、そして交じり合うがゆえに、お互いのアイデンティティがより際だつ、その相互調整のプロセスということができる[11]。アイデンティティ・親密性の文脈は、「他者とのかかわりにおいて自己へのまなざしを失わないこと」を示唆している。これが「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」の核心的な葛藤であると、エリクソンはいう。

この自己へのまなざしは、自分がそれまでの人生をどう引き受けるのか、ということに関係してくるので、ライフサイクル全体にかかわる意味をもっている。エリクソンのライフサイクル論では、世界とのかかわりの中で引き起こされる葛藤と危機を、順に「基本的信頼 対 基本的不信」「自律性 対 恥･疑惑」「自主性 対 罪悪感」「勤勉 対 劣等感」「アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散」「親密性 対 孤独」「ジェネレイティヴィティ 対 停滞」「統合 対 絶望」と表している。それぞれの危機をのりこえると、次の局面のダイナミズムに移ってゆく、というのがライフサイクル論解釈の定石であるが、しかし、危機的状況は去るにしても、葛藤のダイナミズムそれ自体が解消してしまうことはない。世界にかかわるダイナミズム、そしてその葛藤と危機とを常に引き受けることは、すなわち、それまでの人生を引き受けるということであり、自己へのまなざしによって葛藤を意識化すること、世界に対して開かれ、世界と対話し続けるということを表している。

エリクソンは、これらの葛藤やダイナミズムを回避しようとする大人の心性が「偏見」を生むと考え、そして、まさに世界との対話の継続によって、ものごとの判断力や「思慮分別(judiciousness)」が人間に生まれると考えている[12]。自己へのまなざしによって、ある程度の

「思慮分別」を有すればこそ、他者の必要を理解し、応答し、現実にかかわってゆく責任を負うことができる。そのとき初めてジェネレイティヴィティが、そして他者の必要に応える<care>が発揮されるといえよう。

他方で、必要とされる役割には権威や優位性が付随しやすい。すなわち、ジェネレイティヴィティの局面の関係には「非対等性(inequality)」が避けられず、それは擬似的親密性を押しつけることが最も容易に可能な関係性である。また、エネルギッシュなかかわりが相手を飲み込んでしまう危険性も十分にある。このような「搾取可能性(exploitivity)」[13]を自覚することも、自己へのまなざしによってこそ可能になるといえるだろう。こうした意味において、他者の必要に応えるジェネレイティヴィティには、自己へのまなざしが不可欠なのである。

その好例としてエリクソンのサイコヒストリー研究で有名な *Gandhi's Truth* から、エリクソンが注目しているガンディーの二通の書簡を例に取ってみよう。まず、ガンディーがしばらく離れて暮らしていた息子のデヴァーダス（当時１０代）に宛てた書簡。

「私はいつもおまえのことを考えています。私はおまえが非常な熱意をもち、何かに関与しうることを知っています。もしおまえがここにいたなら、あらゆる瞬間に真理の至高の不思議と力とを目にしたでしょう。これが私がおまえにのこすことのできる遺産のすべてです。私が信じているように、それは尽きざる遺産です。その価値を知る者にとっては、計り知れないほど貴重です。その誰もが、他のどんな遺産をもつことも望むことも求めないでしょう。私は、おまえがその価値をすでに知っていて、それを愛情で慈しむだろうと思います。私は昨夜、おまえが、私の信頼を裏切り、金庫から証書を盗み、それを換金する夢をみました。おまえはそのお金を全部悪のために使いました。私はそれを知ることになって、驚き、たいそう惨めに感じました。ちょうどそのとき私は目を覚まし、それが全部夢であったことが分かりました。私は神に感謝しました。この夢は、私のおまえに対する愛情(attachment)を物語っています。もちろん、おまえはこの愛情を欲しています。この現世において、いつかこの愛情が完全に消え失せてしまうだろうなどと心配する必要はありません。私は最大の努力を傾けてすべての人に等しい愛(love)をもとうとしています。しかし、私はおまえからそれ以上のものを希望しています。」(Erikson,1969,p.319.邦訳(2)p.134.)

父の信じる価値を、息子にも信じてほしいという強い要求と、独白にも似た夢の話、父の愛情への信頼をうながし、また父への愛を求める結びの文。そして、ガンディー自身が10代のころ、兄の腕輪から金(gold)を盗み取り、それをちょっとした借金の返済にあてたことで、父に罪を告白した体験があるという。この書簡に対して、エリクソンはこう問いかけている。

「ガンディーが息子に向かって、自分は目覚めてからその夢が本当でなかったので喜んだという理由によって、その夢は父親としての愛情を物語る、と書くなら、息子は、なぜ父親は自分を、まず最初に悪に支配された裏切り者、盗人として夢見たのか、と問うてよい

はずである。父親としての愛情は「全く」消え去らないだろうというなにやら訳の分からない保証と、彼が息子から要求する「何かそれ以上のもの」という曖昧な言い方とを併せると、その夢は次のようなことを意味する。ガンディーは、自分自身の息子たちからもっとも多くのものを要求し、もっとも悪いものを予想している――つまり、彼は息子を、自分の中の最悪のものと結びつけているのである。」(Ibid.pp.319-20.邦訳(1)p.135.)

続けて、エリクソンは「父親からそのような書簡が来れば、それは私たちの中の最悪のものを引き出すだけかもしれない、と私は感じるが、それは洋の東西を問わず多くの読者がすでに経験ずみのことである」(Ibid.p.320.邦訳 p.136.)という。ここでエリクソンが感じている違和感はこれ以上言葉にされていないが、次の書簡の場合と比較して見ると、より明確である。次の一通は、エリクソンによれば「今日多くの者によってガンディーの唯一の真の後継者と見なされるヴィノーバ・バーヴェ」に宛てた書簡である。

「どんな言葉であなたを誉めてよいか分かりません。あなたの愛情と性格、さらにあなたの自己検討が私を魅了します。あなたの価値を計るのに私は値しません。私はあなたの自己評価を受け入れ、あなたに向かって父親の態度をとります。あなたは私が長らく感じていた願望を満たしてくれるように思います。私の見解によれば、父親とは実際に、徳において彼を凌駕するような息子をもつときに初めて父親になることができます。同様に、真の息子とは、父親が成したものを改良する者です。父親が真実にあふれ、しっかりした心をもち、情け深いなら、息子はすべてこういうものをより多くもつでしょう。これが、あなた自身の姿です。あなたが達成されたものは、私の努力によるとは思いません。ですから、あなたが私にすすめる役割を、私は愛の贈り物として受け入れます。私はそれにふさわしくなるように努力しましょう。そして、私がもしヒランヤカシプー（魔王の名前）のような人間になったら、神を愛したプラーフラッドが彼に反対したように、尊敬心をもって私に反対してください。」（Ibid.p.318.邦訳(1)pp.132-3.( )内は筆者。）

エリクソンは、この書簡を、「ガンディーは未来の部下がプラーフラッドのように死をもって指導者に反抗するかもしれないことを認めた上で、･･･彼自身の中に魔王がいるかもしれないことをも容認している」とみている。指導者として、部下との関係を単なる権威関係にすることなく、また反対にその権威を回避しようとしたり否定するのでもない。指導者と部下という非対等な関係において、お互いの独自性を認め、尊重し、非対等であるからこそ成立しうる相互性を築いてゆこうとする、指導者側からの働きかけをここに見ることができる。

ガンディーから息子と部下とに宛てられたそれぞれの書簡には、その文面から受けとれる印象に明確な違いがあるといえよう。エリクソンは、これらの書簡をガンディーの生活史の中に位置づけ、さらに広範な文脈において読み解こうと努めているが、それについてはここでは触れない。むしろ、エリクソンがここではこれ以上言及をしていない違和感を明確にするために、<care>という視点からこの両者の違いを考察してみたい。先に述べたように、こ

の二通の書簡は、子どもを心配しつつも、その成長を願う大人の前向きな関心<care>にとって、大人の側の「自己へのまなざし」がいかに重要かということを表している。

ガンディーの息子への書簡と部下への書簡において、一方は、息子に対して自分と同じ価値を信じる以外の道を暗黙に断ち、夢において彼を自らと同一視していることを父の「愛情」として主張する。他方は、部下がいずれ自分を越えゆく存在であること、自分が過ったときは尊敬をもって反対する存在であることを認めるばかりか、そうあることをお互いのために望み、相互形成的な関係を築こうとしている。こうした違いは、直接的には相手の違いによるものなのかもしれないが、さらに考察を進めるなら、そのときのガンディーの自己へのまなざしのあり方と結びついているともいえるだろう。というのも、息子への書簡に比して部下への書簡では、ガンディーは自分のあり方に対して徹底的に自覚的だからである。自己へのまなざしをもたぬとき、相手への関心は「愛情」という言葉にくくられがちであり、その関係性をお互いの立場において確認するというプロセスは省かれる。それに対して、自分は指導者としての権威をもち、また若い部下の尊敬を受けており、物事に対する影響力を有している、また、自分を見失うこともあるということを自覚するときには、自己と相手との違いが浮き彫りにされ、その関係性の意味が問われてくるのである。

一般に、親が子どもに向ける関心、教師が生徒に向ける関心、大人が子どもに対して向ける関心は、「子ども（生徒）を心配しつつも、その成長を願う」前向きな気持ちに代表されることが多い。ところが、そうした気持ちは常に相手を飲み込む危険性と表裏一体である。<care>が<care>として相手に届くということが、<care>する側の「自己へのまなざし」にいかに支えられているかということを、ガンディーの書簡はよく表しているといえるだろう。

5、＜care＞の核心としての「配慮」

エリクソンのいう<care>は、他者への関心と自己へのまなざしとが深く交差するところにあるといえる。自分と同じように世界とのダイナミズムを引き受けている存在への共感がその根底にあるといってもよいだろう。<care>という言葉の語源的にもっとも古い意味は、「悲しみ」「苦悩」であるという。他者の痛みに思いをよせるということ、しかし、その痛みを自分の世界へのかかわり方の問題としても、前向きにとらえていこうとする動き、それがライフサイクル論において示されている<care>の核心であろう。

エリクソンの<care>概念を「世話」と訳すと、他者に関心をもってエネルギッシュにかかわってゆくという側面は表せても、自己へのまなざしをもつという側面を表すことができない。自己へのまなざしという側面があってこそ、具体的に世話をするという行為は相手に届くものとなる。この<care>の核心をあえて日本語で表すとすれば、何が当てはまるだろうか。本稿では「配慮」という言葉を考えてみたい。「配慮」という言葉は、「心を配ること」、「気を配ること」であり、「配」は、「配る」、「届ける」、「慮」は、「次々と関連したことを連ねて思いをめぐらす」という内的なプロセスを表す。一つの対象を取り出して熟考するというだけではなく、それに関連する様々なことにも思いをめぐらせるという内的なプロセスであ

る「慮」と、それを相手に届けるかかわりとしての「配」。「配慮」という言葉は、そうした内外のプロセスを一即にとらえるものとして読み解くことができる。エリクソンの<care>概念に内在している、他者への関心と自己へのまなざし、あるいは「ジェネレイティヴィティ」というエネルギッシュなかかわりと「停滞」という内的な立ち止まりという、二つの側面を合わせてとらえる言葉、他者のあり方と自己のあり方とを絶えず確認しながら現実のかかわりを豊かなものへと切り開いてゆくプロセスを支える能力を表す言葉としては、日本語においては「配慮」が当てはまるのではないだろうか[14]。

結果を先に読みとる力ではなく、現在を洞察する力によってこそ、現実への働きかけはそれとして意味をもつようになる。何もしないことが<care>の時もあれば、叱ること、誉めることがそれぞれ<care>の時もある。様々な文脈において、他者と自己を、現実を眺めてみること。エリクソンのいう<care>は、まずそうした「慮」としてあり、ジェネレイティヴィティという駆動力によって相手に届く「配慮」となるのである。

他者を思い、自己を見つめる「配慮」によって、かかわりのダイナミズムが繰り広げられてゆく。ライフサイクルが生み出され、世代サイクルが生成してゆく。<care>は、こうした動きを生み出す「配慮」という特質を有するゆえにこそ、「大人の人間的な強さ」となりうるのである。エリクソンの<care>概念は、このように、世界とのかかわりのダイナミズムの中で生き、他者の人生と自分の人生とをともに紡いでいこうとする存在を、その内面から照らし出す鍵概念といえるだろう。

＜注＞

1）<virtue>は、「徳」、「人格的活力」など様々に訳されている概念であるが、エリクソン自身は、<virtue>という言葉について次のように説明し直している。「私がその言葉<virtue>を使うのは、それがかつて、あるものの生来の強さや活性的な資質を意味していたからである。たとえば、薬やお酒の気が抜けたとき、『<virtue>がない』という言い方がされていた。その意味で、<vital virtue>という言葉は、人生の連続する局面のうちに、人間を活力あふれる状態にするようにする、ある資質を意味するものとして使われてよいだろう。」(Erikson,1968,pp.232-3.邦訳 p.326.引用については、翻訳書を参考にしながら、自分で訳出を試みた。以下も同様である。)

ところが、エリクソンは<virtue>という言葉に元来男性的な強さという意味があるとして、後にはこれを「人間的な強さ(human strength)」という一般的な表現にかえている。しかし、独自の意味で用いられた<virtue>概念にこそ、彼の人間観や発達観が表されているともいえ、そうした視点からこの概念の独自性と重要性を問い、そして言葉の妥当性を明らかにした論文に、「E. H. エリクソンの virtue概念－発達的視点と規範性の問題」（西平　直、1982）が挙げられよう。

<virtue>に関する研究には他に、<virtue>を「発達課題」として主張する論文、「エリクソンの『発達課題』の再検討－leading conceptとしての“virtue”を中心に－」（髪櫛久美子、1992）がある。たしかに、エリクソンのライフサイクル論は、発達心理学等のテキスト等で往々にして「発達課題説」として紹介されるが、エリクソン自身は、*Childhood and Society* (1963)において、ライフサイクル論が発達課題説として受け取られることに否定的見解を示している。当然、<virtue>に関しても、その見解は妥当すると考えられるが、エリクソンの発達という事象に対する「ものの見方」は、西平　直『エリクソンの人間学』において、同著者の上記の論文の一部も含めて、エリクソンの研究全体を見渡す考察からすでに明らかにされてたことである。本稿はそれに加えて、個々の<virtue>に焦点を合わせてライフサイクル論全体と

の関連の中で考察するならば、<virtue>概念を通してエリクソンの発達観をさらに具体的に考察できるだろうというパースペクティヴのもと、そのうちの一つである<care>を明らかにすることに徹したい。<virtue>に関しては稿を改めることとし、本稿ではさしずめ「人間的な強さ」という表記で論を進めていくことにする。

2）<care>が初めて登場したのは1963年の *Childhood and Society* の註で各局面ごとの<virtue>が簡単に提示されたときであるが、その翌年出版された *Insight and Responsibility* (1964)に所収の論文 "Human Strength and the Cycle of Generations" において、初めて個々の<virtue>が詳細に論じられている。なお、この論文においてエリクソンの理論的問題関心は「世代サイクル」や大人と子どもとの「相互性(mutuality)」といった問題へと広がったといえる。その点は「E.H.エリクソンの心理社会的発達理論における『世代サイクル』の視点」(柳沢昌一、1985) で明らかにされている。

3）Erikson, 1964, p.130. 邦訳 p.129.

4）Erikson, 1950,p.231.邦訳（中）p.138. <lose oneself>は、熟語として「我を忘れる」、「没頭する」、「夢中になる」という意味があるが、直訳するなら「自分を失う」、少し意訳するなら「自分を手放す」などとも考えられるであろう。ここでは、文脈上「自分自身に振り回されやすいが、そうはしないこと」の意味をもつものとして、「自分に固執しない能力」と訳出してみた。なお、この能力は非常に重要視されており、エリクソンはこれを強調するためにこそ「ジェネレイティヴィティ」という語を創造したという。なお、ジェネレイティヴィティについては拙稿「E. H. エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する考察－ライフサイクルとのかかわりのダイナミズム－」(1999) において、この点からも考察している。

5）「ジェネレイティヴィティそれ自体は、人間組織における駆動力である。」(Erikson, 1968b, p.291.)

6）「人間の人生の局面と局面がかみ合っていることを思えば、自己耽溺という精神跛行状態に陥らないように、大人は必要とされることを必要とするようになっていることがわかるだろう。」(Erikson, 1964 p.130. 邦訳 p.128)

7）Erikson, 1980a.では、エリクソンの妻ジョーンの手によるエピジェネティック・チャートを表す織物において、ライフサイクルの各局面の時間の幅が示されている。

8）ここで、ジェネレイティヴィティと対立する停滞感は、ジェネレイティヴィティにとって補完的役割をも有しているということが明らかになる。ジェネレイティヴィティと停滞感の関係に限らず、各局面に図式化される<～ vs.～>について、エリクソンは、「この< vs.>は「～ 対 ～」(versus)の意味であるが、対比される二つの特性にはある相補性があり「～ とその逆の ～」(vice versa)という意味もこめられている」と説明する。(Erikson,1982,p.55.邦訳 p.71.)

9）Erikson, 1950, p.231. 邦訳（中）p.137.

10）アイデンティティを、他者によって証明される「存在証明」であると同時に、自分で感じる「独自性」であるという二重の意味をもつものと理解すれば、ここでは厳密には「他者に対して自分が自分である感覚」といえるだろう。アイデンティティ概念については、多くの研究がなされているが、中でも『エリクソンの人間学』(西平 直、1993) は、概念の多義性を丁寧にきりわける鮮やかな議論が展開されており、学ぶべきものが多かった。

11）エリクソンは親密性について、「現実に、真の親密性は融合している複数のアイデンティティ(identities)であると同時に、対比によって際だつアイデンティティ(identities)である」と説明している。(Erikson,1968a,p.135.邦訳 p.177.)

12）エリクソンの「偏見」と「思慮分別」に関しては *Childhood and Society*の終章「不安を越えて」の中で論じられている。(Erikson,1963,pp.403-424.邦訳(2)pp.181-210.)

13）実は、ここで述べた大人と子どもの関係の「非対等性」と「搾取可能性」は、エリクソンの問題関心における通奏低音といえる。彼の理論的基盤となった*Childhood and Society*には、終章に次のような表現が見られる。「本書では、人間の生において、大人と子どもの非対等性が長く引き延ばされているという存在事実の一面、それが技術や分化の享受と発展に寄与していると同時に、搾取可能性も助長しているということに関する洞察の原点を、精神分析の実践と理論に求めて、その論証を試みてきた。」(Erikson,1950,p.377.邦訳（後）p.172.)

14) もっとも、<care>をそのまま「配慮」と訳しうるかどうかという問題については、本稿では保留し、今後さらに検討を重ねていきたい。

<引用文献・参考文献>

髪櫛久美子 1992「エリクソンの『発達課題』の再検討－leading conceptとしての“virtue”を中心に－」、『名古屋大学教育学部紀要（教育学科）』39,3, pp.69-79.

Erikson, E. H. 1950. *Childhood and Society*, W. W. Norton,『幼年期と社会 前・中・後』草野栄三良 訳、日本教文社、1956.

Erikson, E. H. 1963. *Childhood and Society*, W. W. Norton,『幼児期と社会 1,2,』仁科弥生 訳、みすず書房、1977.

Erikson, E. H. 1964. *Insight and Responsibility*, W. W. Norton,『洞察と責任』鑪幹八郎 訳、誠信書房、1971.

Erikson, E. H. 1968a. *Identity Youth and Crisis*, W. W. Norton,『アイデンティティ』岩瀬庸理 訳、金沢文庫、1973.

Erikson, E. H. 1968b. “Life Cycle” *The International Encyclopedia of the Social Sciences*, New York:Crowell-Collier,pp.286-92.

Erikson, E. H. 1980a. “On Generativity and Identity”, *Harvard Educational Review*, vol.51, No2.

Erikson, E. H. 1980b. “ Themes of Adulthood in the Freud-Jung Corespondence ” *Themes of Work and Love in Adulthood*, Edited by E. H. Erikson and , Neil J. Smelser, Havard University Press,「フロイトーユング往復書簡における<大人であること>という主題」『みすず』366,368,369.、西平 直 訳 1991.

Erikson, E. H. 1982. *Lifecycle,Completed*, W. W. Norton.『ライフサイクル、その完結』村瀬孝雄･近藤郁夫 訳 1989.

Evans, R. I. 1967. *Dialogue with Erik. H. Erikson,* Harper & Row,『エリクソンは語る』岡堂哲雄･中園正身 訳 新躍社 1981.

西平 直 1982.「E. H.エリクソンの virtue 概念－発達的視点と規範性の問題」『教育学研究』52,2,pp.214-23.

西平 直 1993.『エリクソンの人間学』東京大学出版会

谷村千絵 「E. H. エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する考察 ―ライフサイクルとかかわりのダイナミズム ―」『教育哲学研究』第80号、pp.48-63.

柳沢昌一 1985.「E.H.エリクソンの心理社会的発達理論における『世代サイクル』の視点」『教育学研究』52-4.

E. H. Erikson's Conception of 'care' :Concern for Others and Insight into Oneself

TANIMURA Chie

This paper tries to throw light on Erik H. Erikson's concept 'care' mentioned as 'human strength' (or 'virtue')in 'adulthood' , the seventh stage in his theory of life cycle which attempts to understand human life cycle by eight stages. Erikson regarded 'human strength' as on ability to get over conflicts or crisis. 'Care' is 'human strength' to get over the conflict of 'generativity vs. stagnation. 'Care' was translated into Japanese 'sewa' or 'hagukumi' , which means in concrete taking 'care' of children or the elderly.

However, 'care' is defined by Erikson as 'concern.' Furthermore,throwing light on the dynamism of generativity vs. stagnation, it is clear that 'care' means the inner process including both concern for others and insight into oneself. Then, it seems that the Japanese word 'hairyo' shows the nuclear mean of Erikson's term 'care.' In this paper, including such a problem , I try to discuss the concept of 'care' in detail.

大阪大学教育学年報 第8号（2003年）
Annals of Educational Studies Vol .8

「必要とされること」の位相
－小学校でのアシスタント・ティーチャー体験を通して－

谷 村 千 絵

【要旨】
E. H. エリクソン（1902-1994）はライフサイクルに関する著述の中で「大人の人間は、必要とされることを必要とする」（E. H. Erikson, 1964）と述べている。筆者は、大阪市立四貫島小学校にボランティアで、アシスタント・ティーチャーとして通いはじめて一年になるが、本稿では、その体験を振り返り、エリクソンのいう「必要とされること」について考察した。（1）では、エリクソンについて若干の説明をし、（2）ではエリクソンのライフサイクル論と「成人期」についてまとめた。（3）で「大人の人間は、必要とされることを必要とする」という見解について触れ、そして（4）（5）（6）（7）で、具体的な体験を振り返って「必要とされる」ことについて考察し、（8）では「必要とされること」の3つの位相と多層的な生成について考察した。

（1）エリクソンについて

筆者はこれまで、20世紀アメリカで活躍した精神分析家E. H. エリクソンのライフサイクル論を手がかりに、人間が「大人である」とはどういうことなのかということについて、考察を重ねてきた[1)]。本稿では、そのなかでエリクソンが述べている「大人の人間は、必要とされることを必要とする」（E. H. Erikson, 1964）ということに焦点を当てて考察する。筆者は、小学校に一年間アシスタント・ティーチャーとして通い、さまざまな子どもとのかかわりを体験した。本稿では、そのなかから、エリクソンのいう「必要とされること」に関係すると思われる体験をいくつか取り出し、考察を行いたい。

はじめに、エリクソンについて簡単な紹介をしておく。

E. H. エリクソン（E. H. Erikson 1902-1994）は、ドイツで生まれ、若い頃に縁があってウィーンで暮らしたときS.フロイトと出会った。そこで、フロイトの娘アンナ・フロイトに教えを受けて児童精神分析家となり、1933年に渡米している。ウィーンでは私設学校の教師をしていたが、エリクソンは当時にしては珍しく「子どもと遊べる男性」と言われていたという。そのこともあってか、エリクソンはアメリカで最初の児童精神分析家として成功した。子どもの患者との臨床経験、子どもの遊びの参与観察研究、アメリカン・インディアンの子育ての観察、子どもの発達の縦断研究などを通して、子どもの自我発達と子どもを取り巻く社会との関係を構造化して取り出すことに努めた。1950年に『幼児期と社会』を著し、既存社会の諸モード（様式）と個人の内面形成との複雑な絡み合いを具体的に丁寧に描写し、かつ系統的に理論化した彼は、一躍有名になった。

エリクソンの人間発達理論はライフサイクル論といわれているが、フロイトの心理・性的理論を基盤にして、それを心理・社会的な文脈に押し広げたところに特徴があるといえる。フロイトの性愛理論でいえば性器性の十全な発達が人間発達理論の終わりであったが、エリクソンは人間発達に青年期という区分を設け、個人が既存社会のなかに生きる場所や手がかりを主体的に見いだしていくという重大な課題を、アイデンティティという概念で説明した。それによって彼は、社会的文脈、文化的文脈、歴史的文脈が人間の精神発達に寄与することの「ことの大きさ」と、そうした影響を主体的に統合していく人間の内的な力、すなわち自我の発達の力について明らかにしたのである。さらに、60年代以降は、個と社会を包含するさらに大きな理論地平として、世代サイクルというパースペクティヴを提唱している。そこにおいて彼は、個人のライフサイクルは、社会的、文化的、歴史的にさまざまな影響を受け、異世代と関係し、歯車と歯車が噛み合うようにして、世代サイクルを生み出してゆくという構造を提示している。

このように生涯発達のみならず世代のサイクルまでを視野に入れて理論構築をしてきたエリクソンは、

「大人の人間は、必要とされることを必要とする」という。彼は、人間が「大人」であるということを、どのようなこととして考えていたのだろうか。

(2) ライフサイクル論と「大人」について

エリクソンのライフサイクル論は、社会とのかかわりにおいて個人に引き起こされる葛藤と危機を、発達の順に「基本的信頼 対 基本的不信」「自律性 対 恥・疑惑」「自主性 対 罪悪感」「勤勉 対 劣等感」「アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散」「親密性 対 孤独」「ジェネレイティヴィティ 対 停滞」「統合 対 絶望」と表している。

図1 <エピジェネティック・チャート>

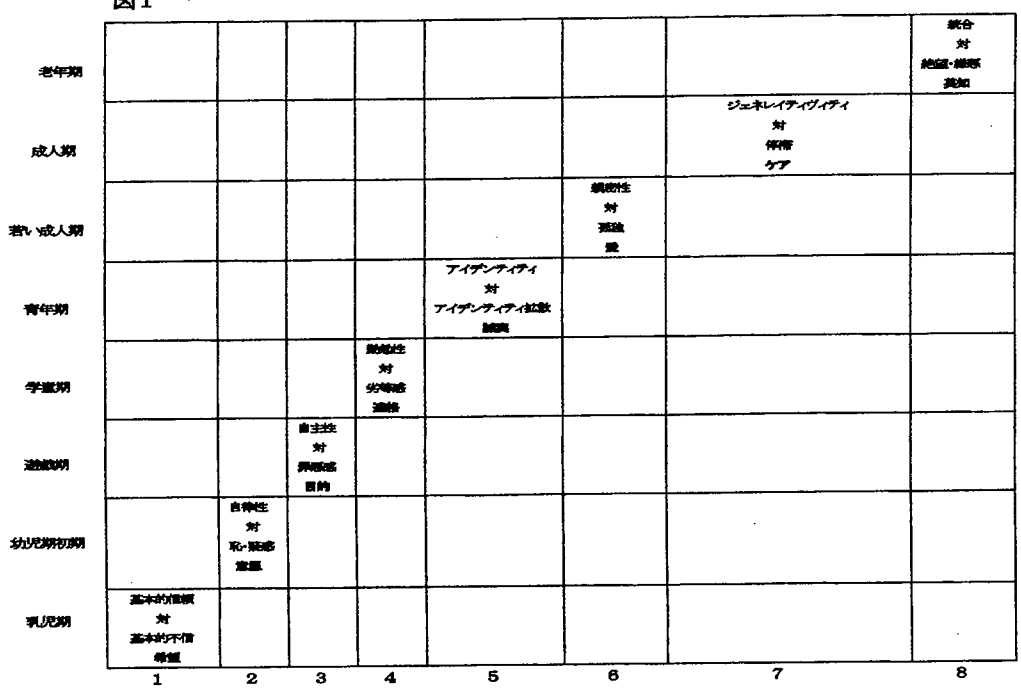


図1は、エリクソンによるライフサイクル論のチャート（エピジェネティック・チャート）である。各々の葛藤が書き込まれた対角線上のマス目に、まず注目しよう。それらは、下から順に発達段階にそって構成されている。それぞれの葛藤は、ある時期においてとりわけ先鋭化した形で生起する。クライシス（危機）である。このときに、自我親和的な感覚（基本的信頼感等）が自我違和的な感覚（基本的不信感等）を上回る形で葛藤に解決が見いだされるとき、危機は乗り越えられ、そのことを通して人間が有する内的な力<human strength / virtue>（希望・ケア等）が発揮されるという。そして次の局面に移ってゆく。ただし、危機的状況は去っても、葛藤そのものが解消すると考えられているのではない。エピジェネティック（漸成）という言葉に表れているように、このチャートは、発生学の漸成説を原理として構成されている。つまり、各要素は全体として終始一つのまとまりを保ちつつ（横軸の総和）、各要素がそれぞれの時期において臨界期的発達を展開してゆく（対角線上）という原理である。このチャートでは、何も書き込まれていない白紙のマスは、臨界期を迎える以前・以後にもその葛藤が存続しているということ示していて、重要な意味をもっている[2)]。

さて、このようなライフサイクル論は、関係性（かかわり）のなかで個々の人生が紡がれてゆく側面をとらえるものである。エリクソンは著作活動をはじめた初期において「健康な自我発達の理論」を考案し

ていた。所与の社会との相互作用の中で、人間個人がいかにその人として自己を形成してゆくのか、ということのメカニズムを「自我発達」ととらえて考案したこの理論こそ、ライフサイクル論の前身であった。つまり、社会との相互作用、すなわち、かかわりの中に生きる人間をとらえる視点で、ライフサイクル論は貫かれているのである。

そのようなライフサイクル論の成人期は「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」の葛藤の相として提示されている。エリクソンは、大人を、「生み出すこと＜generate＞」と「滞ること＜stagnation＞」の両極の間で揺れ動く存在と見ている。この葛藤を乗り越えるべく発揮されるのは、何かを＜care＞する力であるという。その対象は人間の場合もあれば、動物や植物、「もの」や「こと」の場合もあるが、それらを気遣い、責任を感じ、大切にして世話をし、支えてゆく＜care＞によって、人は「ジェネレイティヴィティ対　停滞」の葛藤を乗り越える。「大人の人間は、必要とされることを必要とする」という一文はこの文脈で用いられるのであるが、つまり、＜care＞という力が発揮されるためには、その＜care＞を必要とする存在（もの）が不可欠なのである。誰からも何からも必要とされないとき、人は「ジェネレイティヴィティ　対　停滞」の葛藤を乗り越えることはできない。あるいはむしろ、そうした葛藤を抱えることすらないといえるだろう。

エリクソンは、主著『幼児期と社会』において、大人は幼い世代に依存していると断言もしている[3]。「大人」は、ある年齢を過ぎればひとりでになるというものではなく、自分を必要とする存在との相互的な形成関係のなかに生じる存在様式なのである。「大人の人間は、必要とされることを必要とする」とエリクソンがいうとき、それは、人は必要とされることによって大人になる、ということでもあるだろう。

（3）「大人の人間は、必要とされることを必要とする」（E. H. Erikson, 1964）

彼の「大人の人間は、必要とされることを必要とする」という一文は、1964年に出版されたInsight and Responsibility（『洞察と責任』）に収められている、「人間の強さと世代のサイクル」というタイトルの論文のなかに著されている。この後には、ダッシュにつづいて、次のように述べられている。

> 「――なぜなら、人間は、自分が生み出してきたもの、今は‘育てられ’、保護されなければならないもの、やがて乗り越えられなければならないものから発せられる挑戦＜challenge＞を要求する――それはつまり、人間の自我の強さのためであり、また、彼の所属する共同体の強さのためである。」
>
> (Erikson,1964, p.131.)[4]

エリクソンは、ここでは「必要とされること」を、「挑戦されること」に置き換えて話を続けているが、人間は何（誰）に「必要とされること」（挑戦されること）が必要だといっているのか。それは、「自分が生み出してきたもの」、「今は‘育てられ’、保護されなければならないもの」、「やがて乗り越えられなければならないもの」からである。これらは、具体的には仕事、子ども、理念や芸術や文化、つまり、自分たちが生み出してきて、今はまだ守らねばならないが、歴史的にはいずれ乗り越えられていくべきもの、と考えることができる。そのような存在から「必要とされ」、「挑戦」されることによって、人間の自我や共同体の強さが鍛えられる。そのために人間は「必要とされることを必要とする」（挑戦されることを要求する）とエリクソンはいうのである。

それでは、「必要とされる」とは、具体的にはどのような状況を指しているのだろうか。そして、「必要とされること」（挑戦されること）により、人間にはいかなる変化生成がおこるというのだろうか。以下では、「必要とされること」について、筆者が小学校に一年間アシスタント・ティーチャーとして通った体験をもとに考えてみたいと思う。その際、叙述的な分類になるが、＜子どもが求めてくる＞＜体が勝手に動く＞＜子どもの世界の一部になる＞の３つの位相で、考察を試みる。

(4) 四貫島小学校のアシスタント・ティーチャー制度について

筆者は、2001年12月から、大阪市立四貫島小学校にアシスタント・ティーチャーとして週に1日通っている。まず四貫島小学校とアシスタント・ティーチャー制度について簡単に説明しておこう。四貫島小学校は、大阪市此花区、大阪環状線西九条駅から20分ほど歩いて四貫島商店街を抜けたところに位置している。下町の小学校という雰囲気で、各学年は約20～40人の単学級である。四貫島小学校のアシスタント・ティーチャー制度は、松 美佐子校長のリーダー・シップのもと、2001年度から始められた。保護者や地域の方など、教育や子どもに関心のある様々な人が参加している。資格や特技をもっていて希望する人は、大阪市学校支援人材バンクに登録している。スタッフになった人は、総合的な学習の時間や校外での学習、グループ学習、習熟度別学習など、人手がいるときにアシスタントをすることもあれば、先生方と連携を取って、子どもに自分の特技を教えることも可能である。筆者は、アシスタント・ティーチャーとして主に低学年のクラスにいることが多い。担任の先生のアシスタント的役割で授業支援をしながら、子どもと自由にかかわらせてもらっている。

ところで、2002年度から大阪市内の希望する小学校で取り組まれているインターン・シップ制度は、大阪教育大学2部の学生ならびに大阪市立大学の学生をアシスタント・ティーチャーとして受け入れ、単位を認定するという形のものであるが、四貫島小学校での取り組みはこの制度の先駆けであって、少なからず影響を与えているように思われる。四貫島小学校もまた2002年春からインターン・シップ制度を取り入れており、教職につくことを希望している数名の学生が通ってきている。ただ、初年度ということもあって、学校ごとにアシスタント・ティーチャーの位置づけは異なるようだ。四貫島小学校のように子どもと自由にかかわることができて、教室にもほとんど自由に出入りでき、(研究授業ではなく) 先生方の日々の教育実践を見、話もし、また、教師の立場で学校や職員室の雰囲気を感じることができるという、教職を目指す学生にとってあまりにも恵まれているこの環境は、筆者も含め、異者を受け入れる四貫島小学校の松 美佐子校長先生をはじめ各先生方の理解に深く支えられている。

さて、四貫島小学校において、アシスタント・ティーチャーの筆者は子どもの目にどのように映っているのだろうか。低学年であれば、私の体の大きさは彼らの倍以上になり、彼らに対して私はそこにいるだけでまず「大人」である。そして、筆者の教員免許は幼稚園教諭のみ、胸には「アシスタント・ティーチャー」の名札がかかってはいても、子どもの目には「先生」と映るようだ。

(5) 体験A<子どもが求めてくる>

そのなかで、筆者は、子どもにどのように「必要とされること」があるだろうか。

もっとも分かりやすいのが、子どもが具体的な援助を求めてきたり、頼りにしてきたりすることである。勉強で分からないところを聞かれたり、けんかの仲裁を頼まれたりすること、授業中に何をすればいいのか分からなくなったとき、尋ねられること。これらは、まがりなりにも筆者が先生 (あるいは大人) として彼らの目に映っているとき、求められるものである。子どもがなにか言いたいことがあるとき (「昨日、妹が生まれた」とか、「今度の金曜日にいいことがあるねん」など)、ただ話し相手として求められることもある。ときには「ふで箱とって」「これ消して」と召使いのように求められることもある。また、とりわけ低学年では、「だっこ」や「おんぶ」を求められることも多い。いつのまにか子どもが筆者と手を繋いでいたりもする。

このような形で「必要とされること」は、目に見えやすく、また応えやすい。子どもからの要求は明確であり、そのほとんどが、筆者自身がすでに有していることで応えられる。<子どもが求めてくる>というのは、もっとも分かりやすく、状況によってはとても気持ちのいい必要のされ方であるといえよう。

ところで、例にも挙げたが、たとえば「筆箱とって」などと子どもに召使いのように仕えることを要求されるとき、筆者がそれを断れば、「こういうことは要求してもしてくれない人間だ」という像が、子どもの中にできる。また、たとえば「国語や算数について質問すれば教えてもらえるが、担任の先生の教え方と違う」「学校の決まりについて聞いても、この人はよく分かっていない」と子ども達は、感じている

かもしれない。そのようにして、彼らが筆者に期待して要求してくる役割と、筆者が応えられる役割が、その関係性の中で明確になってくる。彼らの要求に対してより適切に応えようとすることで、筆者の側には、たとえば勉強の教え方を工夫し、学校の決まりについて最低限は把握するよう努めるという次の行動が生じる（役割受容）。また同時に、筆者に応えられない役割が明確になれば（役割拒否）、その役割に対する子どもの期待に変化が生じるということもある。そのやりとりを通して、子ども達は、筆者が彼らにどのように反応し、いかなるスキルをもって応える存在なのかということを具体的に知り、また筆者自身も、彼らに対し、自分にできることとできないこととが明確になる。子どもからの要求を通して、一人一人がどのような子どもなのかもまた、浮かび上がってくる。

さらに、同じ行為でも状況によって応えることができたり、そうでなかったりすることもある。たとえば、休憩時間なら「だっこ」はしてあげられるが、授業中となるとそういうわけにもいかない。彼らの気持ちは受け止めながらも、「今は授業中だからあとで」と断るとき、とくに一年生であれば、そうしたこちら側の反応を通して、授業時間と休憩時間の意味の違いを体得してゆくということもあるだろう。

子ども達に何らかの必要（ニーズ）があることによって、子どもと筆者との間で相互的なやりとり＜interaction＞が生してゆく。それを媒介（メディア）にして、お互いを知り、お互いが共有している時間・空間の意味づけ（たとえば、そこは学校で、授業があったり休憩があったりするということ）を生み出してゆく。このように「必要とされること」は、一つには、人間関係において「媒体」の機能を有するものとして考えることができる。「必要」という媒体を通して、私たちは「他者なるもの」を知り、「自己なるもの」を知る。そして、その相互的なやりとりから日常的に「文化なるもの」を再生産していると考えられるのである。

ところで、筆者は、一年間通ううちに、これとは異なる位相での「必要とされること」を実感するようにもなってきた。それが後の２つ＜自分の体が動く＞と＜本能的な反応＞である。少し分かりにくいので、筆者の体験を具体的に詳しく述べて見よう。

（6）体験B＜自分の体が動く＞

a．体操服の着替え

「何か違うな」と感じるようになったその一つの契機は、「子どもから要求されていないのに、自分の体が動く」という体験である。たとえば、朝からぼーっとしていたり、あるいはちょっとしたイヤなことで気分がぐずって何もかもやる気がなくなったりしている子どもがいる。彼らが、次は体育の時間だというのに着替えをせず、教室の中をふらふらしていたり、あるいは隅にうずくまったりしているとき、筆者は、その子どもから頼まれもしないのに、ロッカーから体操服をもってきてその場で着替えを手伝ってやる（低学年）。そうすると、子どもは拡散したりぐずったりしている気持ちを少し立て直し、「次は体育だ。着替えるんだ」ということを思い出すのか、筆者と一緒にスムーズに着替えを行い、運動場へ出てゆく（いつもそうとは限らないが）。甘やかしているように見えるかもしれないが、このような小さな援助が、子どもが自分で自分の気分を立て直すきっかけになれば、そのあとは自然に学校のリズムにもどってゆけることもある。

こうした働きかけをするのには、筆者ははじめ、抵抗があった。その子どもが体育をしたくないなら、しなくてもよいではないか、全員が同じ事をするという方が子どもには不自然なのではないか、と思っていたからである。しかし、学校で子どもをよく観察してみると、そういうときの子ども達は、「体育をしたくない」という意志をもっているのではない。明確な意志をもって着替えをしないのなら、やはり子どもを無理に着替えさせる必要はなく、する気になったときに着替えるのを待てばよいと思う。ただ、上に挙げたような例では、子どもは自分がいる状況そのものから逸脱して（または疎外されて）おり、学校生活に居場所を見つけられないでいるように感じられるのである。そういう子どもには、自分もここの生活集団の一人であるという自覚が、なによりも必要であるように思われる。一日の大半を過ごす場所で、自分の存在感を感じられないということは何よりも不幸なことだと思われるからだ。

こうした考えや子どもへの接し方は、学級の教育方針として指示されたことではなく、子どもからそうしてくれと要求されたことでもない。筆者個人の主観的な価値観と人間観察に基づいているにすぎない。ロッカーから体操服をもってきてその場で着替えさせてやる、という筆者のかかわりは、ただのおせっかいである。しかし、筆者の主観では、その状況は上記で説明したように「見える」ので、そうする「必要」があると思いこみ、つい体が動いてしまう。つまり、子どもの必要（ニーズ）をこちらが勝手に決めて、それを行動に移しているのである。もちろん、筆者のこのおせっかいが、子どもの気持ちをさらに後ろ向きにしたり、苛立たせてしまったりするときもある。だから、彼らから「ノー」のサインがでたときは、自分が彼らの「必要（ニーズ）」を読み間違えたということで、なるべく早めに身をひく。しかしやはり、彼ら自身の判断を仰ぐまえに自分が行動を起こしてしまっている。

b.泣いている子ども

もう一つ、同じ「おせっかい」の例を挙げよう。子ども同士が喧嘩をした場合、学校では両方の言い分をそれぞれ聞き、どうしたらいいかを子どもに考えさせる（のが教師の役割であると教育実習で習った）。けがをしていればその治療が先だが、泣いているくらいなら、気持ちの静まるのを待ちつつ話をきく。

その日も、低学年で些細な喧嘩がおこった。普段からよく遊びもすれば、派手な喧嘩もする二人である。ところが、いつもならまずそんなことでは泣かないような一言で、一方が崩れるような大泣きを始めた。対する相手は、まさかこの程度で喧嘩相手を泣かす（負かす）ことができるとは思ってなかったので、調子に乗ってどんどん囃し立てる。周りには他の子どもが何事かと思って群がってくる。

筆者は、泣き崩れている子どもが、前時間に担任の先生から真剣勝負で叱られており、喧嘩のまえにすでに気持ちが「いっぱいいっぱい」だったのを知っていたので、崩壊するように泣き崩れている体を気がついたときには抱き上げ、誰もいない廊下まで連れていってしまった。私が仲裁に入って問いただしたところで、その子が自分の泣いている理由をみんなの前で説明できるとは思えなかったし、たとえそれができたとしても、喧嘩の相手は、何故そんなことで泣くのか、やはり理解できないだろうと思ったからである。低学年の子どもを抱き上げれば、身長156センチの私でも、他の子どもの視界からその子を連れ出すことができる。その子は、普段は、自分の生の感情を他人に素手で触られるのにはとても敏感に反応するようなところのある子どもに見えていたが、抱き上げたときは、私の腕の中に完全に体を預けてさらに大泣きを続けていた。その預けられた体の重みを感じたとき、「この子は、抱き上げられたことをいやがっていない」ととっさに思った私は、彼がひとりで十分泣ける場所を目指して歩き出していた。子どもは、しばらく一人で好きなだけ泣き、そのうちケロリとして私の腕から降りて日常に戻っていった。

このかかわりもまた、筆者の主観に基づくおせっかいである。抱っこしてくれと頼まれてもいないし、こういうかかわり方が教育的に良いと習った記憶もない。自分を振り返ってみて、考えるより先に体が動いていたことが不思議だった。子どもにとって何が必要か。考えるより前に、必要と決めつけて体が動いているのである。たとえば、それが高学年の子どもだったら私に抱っこはできないし、相手もいやだろう。中学生くらいになればもう、人前で崩壊状態になって泣くことすらできないだろう。先の例も含めて、これらは7,8才の子どもとのかかわりの中で生じた「かなりおせっかいな自分」である。

「必要とされること」を、ここで考えてみるなら、それは、こうしたかかわりの後に続くプロセスにあるのではないだろうか。人間には、相手の必要（ニーズ）を勝手に決め込んでかかわってしまう性がある。仮に相手が自分より幼く、自分より無力であれば、なおさらその性は発揮されやすい。そして、そのことによってこそ相手をケアできるという事実も、たしかにある。しかし、自分のかかわりが相手にとってどういう意味をもったのか、そのことによって相手はどうなったのか、というような吟味がなければ、本当に「必要とされていた」のかどうかは分からない。そうした振り返りの作業と一体でなければ、「おせっかいな自分」は自作自演の喜劇役者でしかないのである。

（7）体験C＜子どもの世界の一部になる＞

a．休憩時間

筆者の言動が、子どもにどのような影響を与えているのか。夢や理想ではなく、現実味をもってそのことが考えられるようになったのは、アシスタント・ティーチャーとして四貫島小学校に通いだして一年が経った頃であった。

筆者が子どもに向ける表情や言葉、あるいは体の反応は、意識的な時もあれば無意識の時もあるが、こちらの意図にかかわらず、子どももまた、意識的・無意識的にそれに反応し、様々な感情・意識・態度を見せてくれる。ひとりひとりの子どもとの関係が少しずつできてきて、そういう細かな変化を認識できるようになってきたのであるが、たとえば、このようなことがあった。

休憩時間に、子ども達とテレビCMのことが話題になり、筆者は「それって知ってるー。こうやって踊るヤツやんなあ？」といって、軽く体を揺すって踊ってみた。そのまま調子に乗って踊っていたら、なんと筆者の視界の後方ギリギリのところで、そのときその話には加わっていなかった子どもの体が、同じリズムで動いている。滅多に一緒に遊ぶことのない子どもだったので、嬉しくなって「～くんも、これ知ってるんや？」と聞いたら、彼は黙って踊るのを止めてしまった。

もとの子どもたちの輪に戻ると、今度はその中の一人の足が、むずむずと、なんとなくリズムに乗って蹴り出すように動いている。「～ちゃん、ノッてるなあ」といって、調子を合わせるように筆者も足を交互に蹴り出すと、二人の調子はシンクロしてしまい、とうとう踊りになってしまった。なんとなく4小節目に彼がアドリブでポーズを入れたので、そのリズムとテンポをつなげるように踊っていると、見ていた子どもがひとり、ふたり、と調子を合わせて入ってくる。「足は、こうあげるんやで」などといって、筆者も周囲を誘う。気がつくと、5，6人が同じリズムと同じ振りで踊っていた。しかし歌や拍子はなく、みな黙って調子を合わせている。「これって、このあとはどうなるんやろう・・・」と筆者が思ったのと同じくらいに、見ていた一人の子どもが聞いてきた。「これって何してるん？」「さあ・・・？なんかしらんけど踊ってんねん」と筆者。踊っている子も見ている子も筆者も、この事態にどう収拾をつけたらいいのか困った様子になってきた。それでなんとなく疲れたなあという感じで、「ふう～」といって筆者が踊るのを止めると、子ども達も踊りを止めた。いったい、これは何だったのだ。でも、なんかタノシカッタナ、という感じで、みんな笑っていたけれど。

筆者のほとんど無意識的な行動に対して、思いがけず、子どもたちが反応して、新しいムーブメントが起こる。少し離れたところで自分の世界を守りながら反応していた子どもに、「～くんも、これ知ってるんや？」とつっこんでいったことで、その反応は消え、また、筆者の態度が「これって、どうなるんやろう・・・」「・・・なんかしらんけど踊ってんねん」と腰が引けたところで、子どもの態度も引いてしまう。その結果、この数分間の創作ダンスは行き場がなくなり、燃焼しきることもなく、消えていった。もちろん、みんな、なんとなく楽しかったとは思うけれど、筆者の態度が違っていれば、もっと盛り上がって楽しむことができたかもしれない、と少し残念に思った。

b．掃除の時間

また別の体験で、このようなこともあった。

掃除の時間、掃除をせずにちょろちょろ動き回ってはしゃいでいる子どもがいた。その子どもは、気分が高揚すると一気に盛り上がるようなところがあり、そういうときは口頭で諭したり、叱ったりしても「はいはい」と言いながら、体はすり抜けていってしまう。筆者が叱っても迫力がないので、恐くないのである。低学年なのでできるのだが、筆者が彼の動き回る体を抱きとめ、「掃除でしょ！！！」と言い聞かせても、目は友達の方へ向き、スキあらば逃げ出そうとする。その日は、これまでの経験から、ムダと分かって注意も体の制止もする気にならず、「どうしようかいな、この子・・・」という気分で、見るともなく彼の目を見た。すると思いがけず目があった。筆者は何かをいう意図があったわけでもないので、そのまま素の顔で彼を見つめることになったのだが、それもほんの数秒のことだった。ところが、しばら

くして気がつくと、その子が一生懸命に掃除をしている。「？」という感じだったが、見ているとまた目があったので、今度は意識して「～くん、今日は掃除を頑張ってるなあ」といってみた。彼はそれには何も答えなかったけれど、黙々と最後までしっかり掃除をした。

この二つの例のように、子ども達は筆者の一挙一動に対して、いつも、ほとんど本能的に反応しているのではないか、と思うことがある。その反応の表れ方は、高学年と中学年、低学年ではまったく違うし、個々人によっても違う。筆者とのかかわりの程度にもよるかもしれない。しかしながら、その一回、一回の子どもの率直さを思うと、「自分との関係において、そのとき彼（女）に何が起こったか」という点が、とても気になるようになってきた[5)]。

「必要とされること」について、ここでまた少し考えてみよう。今例に挙げた二つの体験で、子ども達は筆者を必要としていただろうか。何らかの援助を求められるという意味では、必要とされていないだろう。頼りにされていたのかといえば、ほんの少しあったのかもしれないが、筆者がいなくては困るという状況ではなかった。また筆者が、彼らの必要（ニーズ）を「読みとって」勝手に体が動いたというものでもない。筆者は、ただそこにいて休み時間を一緒にすごし、掃除を一緒にしただけである。しかしながら、そこにいるだけで、筆者の態度・行動・反応は子ども達から様々に意味づけられている。つまり、子どもの意味世界のなかに、筆者は彼ら自身によって位置づけられているのだ。筆者は、子ども達から存在意義を与えられている。筆者は、そのときの子どもたちの、それぞれの世界の一部になっているという意味で、「必要とされている」といえるだろう。それは、ただそこにいるだけで意味を与えられるという、かぎりなく根源的なホスピタリティではないだろうか。

例には挙げなかったが、小学校にいると、子どもが不意に満面の笑みを浮かべてこちらの目をみることがある。きっと、なにか嬉しいことや楽しいことがあったのだ。そうした自分の感情が思わず表出される先に、たまたま筆者の目がある。彼らはそうとは知らず行っているであろうが、そのときの筆者は、彼らから素朴で力強い存在意義を与えられているように感じられる。そして、子ども達のそのような反応をいとおしく思うとき、筆者もまた、彼らを必要としている。この関係を大切にしたいと願い、子どもにとって大切なことは何か、自分にできることはあるかと、考え始めているのである。

（8）「必要とされること」の3つの位相から多層的生成へ

小学校での体験から、「必要とされること」について、A＜子どもが求めてくる＞B＜体が勝手に動く＞C＜本能的な反応＞の3つに分けて考えてきた。この考察の中で見えてきたものは、3つの「必要とされること」にはそれぞれ違いがあるということだ。

A＜子どもが求めてくる＞では、相手が何か必要（ニーズ）を発することにより「必要とされ」た。B＜体が勝手に動く＞に見られるのは、こちらがそこに必要（ニーズ）があると思いこんで行動し、その振り返りの中で見えてくる「必要とされること」である。そして、C＜子どもの世界の一部になる＞では、そのときお互いがお互いの世界の一部になっていて、不可欠であるという意味で「必要とされている」（と同時に必要としている）。これらの3つはどれも筆者の実体験に基づいて、感じたこと、考えたことをほぼ時系列にそって並べたものであるが、振り返って考えてみるならば、それぞれの体験の軸となっている事象には微妙な差異があり、その場にいる筆者の態度にも異なる意識が反映されているように思われる。

A＜子どもが求めてくる＞で取り上げた体験は、言葉や身体によって表出された明確な事実が軸になっている。客観的に見て、ある程度の共通認識が可能だと思われる状況である。初対面の子ども達を前にして、努めて冷静に状況を把握しようとしている筆者の意識がうかがえる。B＜体が勝手に動く＞の体験では、筆者がそのように考え、感じたということが軸になっている。極めて主観的な事象が軸になっており、他の人が同じように感じ、また行動するとは限らない。筆者は、冷静であることより、目の前の現実に自分が関わってゆくことに集中している。そしてC＜子どもの世界の一部になる＞では、そのとき、その場で生起する一回限りの相互生成が軸になっている。客観的にも主観的にも、誰にも予想のできない事象の展開。筆者の態度には、生々しい意味生成の場に放り出されて、少しとまどっている意識が感じられる。

実体験の中で軸になっている事象の差異、そして、こうした意識の差異は、エリクソンの次のような視点に重ねて考えることができるかもしれない。エリクソンは、私たちが普段「現実」と呼んでいるものが、実際には私たち人間の主観や文脈、関係性などに影響を受けて多様に構成されうるものであることを明示している。彼は、それを「３つの現実」として、事実性＜factuality＞、現実性＜reality＞、アクチュアリティ＜actuality＞という異なる位相でとらえているのであるが、その説明は以下のようになっている。

事実性＜factuality＞とは、「我々が日常的に言う『もの』的な事実の世界であり、最低限度の歪曲や否認を伴って知覚され、同時に所与の認知発達の段階と所与の技術と科学の中で可能な、最大限度の妥当性をもって知覚されるものである」。現実性＜リアリティ＞とは、「我々が知ったこの事実を、その本質を我々が（多かれ少なかれ驚きをもって）認識できるようにする一つの意味連関にまで高める、説得力のある一貫性と秩序であり、一つの言語と一つの世界像を共有する一団の人間たち全員が共有する真実価値のことである。」アクチュアリティ＜actuality＞とは、フロイトが＜Wirklichkeit＞（’Wirken’すなわち「作用」ないし「働くこと」から派生した言葉）として「現実」をとらえたことに依拠しつつ、「能動的（アクティヴ）で相互作用的な（インターアクティヴ）意味合いをもつ、「相互活性化」＜mutual activation＞を意味する。」（Erikson 1982, pp.89-90.）

（２）で述べたように、エリクソンはライフサイクル論において、かかわりのなかで人間の発達が進みゆくという側面をとらえていたが、実際のかかわりのなかで私たちが認識する現実そのものは、このように例えば３つの異なる位相でとらえられるような多層的特徴をもっている。ここでは、そのことをあらためて確認しておく必要があるだろう。というのも、かかわりの中での変化生成（発達）もまた多層的なものであり、それらがいつも一つのストーリーに収まるとは限らないからだ。多層的に進行する変化生成。それは相互に影響を与え連動することもあれば、たとえば「覚醒」や「非連続性」という概念で説明されてきたような、一回性と超越性を有する現象として現れることもある。

本稿では、「必要とされること」によって、私たち人間にいかなる変化生成がもたらされるのか、ということを具体的事象に即して述べてきた。結論として、以下では、それぞれの体験において筆者に生じた（生じるであろうと想定される）変化生成を、エリクソンが現実をとらえる３つの視点に沿ってまとめる。しかし、これは今述べたような多層的に進行する変化生成をとらえる一つの試みにすぎず、暫定的な視点である。

Ａの「事実性」の相において見られる変化生成は、相手の必要（ニーズ）に可能な範囲で応えようとする動きである。経験を積んで「教え方」がうまくなるというように、これには技術として磨いていく（形成してゆく）という側面もあるだろう。Ｂの「現実性」の相においては、相手との関係を通して自己を反省する思考回路が生成している。これは、人間が相手の必要（ニーズ）を読みとろうとする性を補うためにも、培ってゆかねばならない回路であろう。それがなければ、「必要とされること」そのものが一人芝居となり、相手の必要（ニーズ）に応えることにはならない。この回路は、潜在的に必要を発している他者のためであると同時に、「必要とされ」、「役に立つ」自分でありたいと願う自己を支えるためのものでもある。そしてＣの「アクチュアリティ」の相においては、生々しい意味生成に触れてとまどいつつ、相手と自分との間に生まれている関係を育もうとする気持ちが生じている。ただそこに共にいるというだけで、私たち人間はお互いに意味を投げかけ合う存在であるということへの気づき。ホスピタリティの根源にある素朴な他者受容。その相互意味生成プロセスを、お互いにとって有意義なものとしてゆくために（その関係性が暴力性や無関心に覆われてしまうことがないように）、関係を大切に育もうとしている。

これら３つの位相（あるいは他の位相も想定できるのかもしれないが）での変化生成は、実際には、場合によって浸透・共鳴・反発しあうこともあれば、無関係にあるいは分裂的に進行することもあるだろう。何らかの必要（ニーズ）があることによって、子どもと筆者との間で相互的なやりとり＜interaction＞が生じ、そこで変化生成が起こる。媒介（「必要性」）を通して、お互いが生成し形成される。共有している時間・空間の意味づけが生み出されてゆく。そのダイナミズムそのものが、多層的に、ときには分裂的に生起するのである。

エリクソンは、成人期に関する著述のなかで、たとえば子育てに関して、「赤ん坊は、家族にコントロールされると同時に、その家族をコントロールし育てている。実際、家族は赤ん坊によって育てられなが

ら、赤ん坊を育てているといえる」(Erikson 1963, p.65.)と述べている。この見解は、異世代間のかかわりを相互形成としてとらえるエリクソンの視点を明確に示すものとして、これまでにも数多くの研究者によって言及されてきた[6]。そして、筆者の見解では、エリクソンは、この相互性が生じる契機として「必要とされること」を考えていたと思われる[7]。本稿では、この「必要とされること」を現実の事象から取りだすことを試みたのであるが、それにエリクソンが「現実」そのものを多層的にとらえる視点を重ねてみるならば、「必要とされること」ならびに「相互性形成」もまた、エリクソンの理論においては、多層的に進行するものとして位置づけられることがわかる。そうした位置づけにおいてこそ、異世代間相互形成を世代サイクルの原動力としてとらえるエリクソンの見解を、説明することができるからである。つまり、相互形成を、文化継承や相互補完の機能においてとらえるだけではなく、ときには「挑戦」をも突きつけられるような、ダイナミックで相克的な関係として、生成の生々しさに直面せざるを得ない関係としてとらえてはじめて、これをかかわりの原動力、つまり世代サイクルの原動力として想起することができるからである。

「必要」という媒体を通して、私たちは多層的に「他者なるもの」、「自己なるもの」を知る。そして、その相互的で多層的なやりとりから「文化なるもの」を再生産・生成している。そのプロセスが一つのストーリーに還元できるような一面的なものではないからこそ、人間の自我の強さ、共同体の強さが鍛えられてゆくのであろう。世代サイクルというパースペクティブにおいてエリクソンが示唆している「自我の強さ」、「共同体の強さ」については、さらに詳細な考察が必要であると思われるが、これについては、エリクソンの自我観、共同体観の検討も含めて、今後の課題としたい。

＜注＞

1）拙論「E.H.エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する考察 ―― ライフサイクルとかかわりのダイナミズム ――」『教育哲学研究』第80号1999教育哲学会、「E.H.エリクソンの＜care＞概念に関する考察 ―― 他者への関心と自己へのまなざし ――」『大阪大学教育学年報』第５号2000など

2）Erikson：*Childhood and Society* 1963 W. W. Norton p.273.邦訳p.350.

3）Erikson：*Childhood and Society* 1963 W. W. Norton p.266.邦訳p.343.

4）翻訳は邦訳書を参考にして新しく訳出を試みた。以下の引用も同じ。

5）そうした姿勢で子どもに関わってゆくことは、たとえば、エリクソンがジェネレイティヴィティに不可欠な能力として挙げる「自分に固執しない能力＜the ability to lose oneself＞」と、関係があるのかもしれない。詳しくは拙論「E.H.エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する考察 ―― ライフサイクルとかかわりのダイナミズム ――」『教育哲学研究』第80号1999教育哲学会

6）柳沢昌一「E. H. エリクソンの心理社会的発達理論における「世代サイクル」の視点」『教育学研究』52,4,1985, 田中毎実「人間形成論の内容的展開の試み－ライフサイクル論と相互形成－」『人間形成論－教育学の再構築』岡田渥美 編玉川大学出版会 1996　など

7）拙論「E.H.エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する考察 ―― ライフサイクルとかかわりのダイナミズム ――」『教育哲学研究』第80号1999教育哲学会

＜引用文献一覧＞

Erikson, E. H. 1963, Childhood and Society, W. W. Norton

Erikson, E. H. 1964 Insight and Responsibility, W. W. Norton

Erikson, E. H. 1982 "Threefold Reality," Lifecycle, Completed, W.W.Norton

Phases of "To be Needed"

-An Experience as a Voluntary Assistant Teacher at the Primary School-

TANIMURA Chie

This paper is concerned of theory of E.H.Erikson in terms of life cycle and human development. I have been spending for over a year (Dec.2001-) at City-run Primary School at Osaka, Shikanjima, as a voluntary assistant teacher. It is a first hand experience to utilize Erikson's theory through real research action at the school. There are seven parts of this paper to be shown as follows: (1) the brief introduction of Erikson' s life and his works, (2) the important points of the theory of life cycle and the stage of adulthood, (3) the explanation of phrase of "adult man needs to be needed," (4)(5)(6)(7)details of school environments, roles of voluntary assistant teacher and interactions between I as a voluntary assistant teacher and the children, (8) conclusions and reflections.